

---

# ホームズの英雄と女救世主

鯨井

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホムスの英雄と女救世主

### 【Nコード】

N3898P

### 【作者名】

鰺井

### 【あらすじ】

「俺は英雄になる」 十六才の少年、ロルスはそう言って、友人の魔道士、エミールを誘い、故郷の村を旅立った。街道を進む彼らの行く手を阻んだのは……

## プロローグ

皆さんは「ハーデイスの英雄伝説」を御存じだろうか。

遙か昔、レオーネ大陸全土を支配し、繁栄の限りを尽くしていた神聖ハーデイス帝国に、東方の蛮族が侵入した。人々は、残虐を極める彼らの行いになすすべなく、ただ恐怖するだけだった。そんな人々の前に女救世主が現れ、おのれの手で自由を勝ち取ることの大切さを人々に説いて回った。彼女の傍らには常に一人の若者の姿があった。彼は女救世主の命とあらば、いかに困難な任務もやすやすと成し遂げた。人々は女救世主の言葉と若者の勇気に心動かされ、武器を手にとって立ち上がることを決意し、遂には蛮族を追い払った。その後、救世主は人々の熱意に押され、女帝の座に就くことになった。人々は当然、若者にも帝位についてほしいと願った。ところが、権力を望まない若者は人々の願いにもかかわらず、どこへともなく旅立っていたのだという。

しかし、伝説というものは往々にして事実と異なる。ある時はそれを伝える民衆の願望によって、ある時は為政者の都合によって一部が削除されたり強調されたりする。

今となつては「ハーデイスの英雄伝説」がどれぐらい真実を反映しているのか知るすべはない。この伝説を単なるお伽話しととらえるか、歴史書ととらえるかは読み手しだいである。

いずれにせよ、この伝説が後の人々に多大の影響を与えたのは事実である。もちろん、影響と言っても、ほとんどの者にとっては、これを読んで日々の生活に活力を与えられたり人生を送るうえでの参考になったりする程度のものだ。

だが、ごく希に影響を受けすぎてしまう者もいた。彼らにとっては、この伝説は純然たる歴史的事実以上のものだった。この伝説こそが世の中の真実であり、自分自身の未来を映す鏡だと信じて疑わなかった。彼らは人々の嘲笑の的となった。行く先々で大バカ者呼ばわりされた。

実際のところ、彼らは大バカ者だった。大体、英雄になろうなどと考える者は、その時点ですでに英雄の資格を失っている。英雄になることを欲して故郷の村を旅立った彼ら若者がその後どういう末路をたどったのか、想像に難くない。一番成功した者でも、どこかの町のヤクザのお頭に納まる程度、最も不運な者は故郷を発った直後に追いはぎに命を奪われるのが関の山だった。

それでも、そういうバカが何百人もいれば、一人ぐらいは奇跡的に英雄になれる可能性がある。逆に言えば、英雄になるにはそれぐらいの強運が必要ということだ。こうして新たに生まれた英雄は新しい伝説となり、後の人々を勇気づけたり、新たな大バカ者を生みだすきっかけになったりするのである。

私たちの祖国、ホムスにも英雄伝説があるのは皆さんも御存じのことと思う。いや、伝説、というのは不適切な言い方かもしれない。わずか百年ほど前のことにすぎないのだ。私たちのお爺さんやお婆さんは、かの救国の英雄を実際にその目で見たという人から話を聞くことができたのだから。なのに、どうして「伝説」と呼ばれるようになったのか、不思議に思っている人は多いだろう。

それは「救国の英雄」が数多くの謎に包まれているためである。彼は本当に百姓の息子だったのか。彼はなぜ突然、歴史の表舞台から姿を消したのか。彼はその後どこでどのような後半生を送ったの

か。人々が彼について話す時、推測や願望が入り交じり、とうとう伝説と化してしまったのだ。

最も謎めいているのは、彼と共にあつて祖国を救った女性、つまり、このホムス帝国の現皇帝の曾祖母にして初代の皇帝をも務めた人物、ミリアの出自である。彼女も人間である以上、親や兄弟、親戚がいるはずである。ところが、現在に至るまで、彼女がどの地方の出身なのか、いや、ホムス人なのかどうかさえわかっていない。人々のたくましい想像力によれば、彼女は外国のさる高貴な殿方が娼婦に生ませた娘だといい、スラム街で育った罪人の子だといい、あるいは、天から舞い降りた神の使いだともいう。

私は人生の大半を「ホムスの英雄と女救世主伝説」の研究に費やしてきた。長年の苦勞のかいあって、今日、ここにその成果を発表するに至った。この研究にあたり、皇帝陛下には、後世に正しい歴史を伝えるのが歴史家の義務である、と言われ、曾祖母の個人的な部分を暴くことを私どもに許された。陛下の寛大な御心がなければこの研究は完成しなかったであろう。

繰り返しになるが、私は歴史的事実のみを伝えたい。皆さんの中には、この研究結果に驚愕し、到底受け入れ難いものとして拒否する方もいることだろう。しかし、私は敢えてそのような方に異を唱えることはしない。「伝説」をどのようにとらえるかは結局、読み手しだいなのだ。私にできるのは、伝説を歴史的事実に昇華させ（あるいは落とす）て、英雄になりたい、などと考える大バカ者を一人でも少なくすることだけである。

（以上、エロイ・ガフタルク著  
「研究　より、序文を抜粋」  
説

「ホームズの英雄と女救世主伝

「俺は英雄になりたい」

とロルスは言った。

昼下がり、村の教会の書庫に座り込んで魔道書に目を通すことがエミールの日課である。一方、彼の幼なじみ、ロルスにとっては、エミールの勉強の邪魔をすることが日課のようだ。

いつものことなので、エミールは気にも留めず、膝の上に置いた魔道書から目を離すこともなかった。

「いや、英雄になること自体はそう難しくない」

エミールに無視されているのに、ロルスは一人演説をやめなかった。

「問題は女救世主をどうやって見つけるか、だ」

彼はエミールの傍らに座り込んで大きな体を小さく丸め、腕組みをしながら考えた。

「伝説によると、英雄は女救世主の片腕となって、向かい来る敵をことごとく打ち倒すことになっている」

彼を無視したまま、エミールは魔道書のページをめくった。そこに書かれているのは火炎の術。薬草を熱処理するのに使う魔法だ。

「しかし、伝説には英雄と女救世主の出会いの場面が出てこない」

ロルスの言葉は、エミールにとっては耳を楽しませる音楽にすぎない。彼の目は魔道書の文字を追いつけている。火炎の術は戦場で戦魔道士が攻撃魔法として使うこともある、と書かれている。

「わかっているのは、女救世主に出会うまで彼は悪人を懲らしめ、弱き者たちを助ける義族の頭目だったらしいということだけだ」

エミールは薬魔道士なのでいくさとはなんの縁もない。火炎の術による攻撃の方法、という一節を読み飛ばして次のページに進んだ。

「別の解釈によれば、一団の軍隊を率いる武人であったともいう」

氷雪の術。エミールはこの魔法があまり得意ではない。魔道学問所の卒業試験でも、この術がうまくいかなかったため、史上初めての全科目満点による主席卒業を成し遂げることができなかったのだ。

「どっちにしろ、英雄になるためにはこんなちっぽけな村で畑を耕してばかりもいられない。何か行動を起こさなくては」

主席で卒業したとは言え、薬魔道士には働き口があまりない。いくさの続く昨今、慢性病の症状を和らげる薬を作る魔道士よりも戦場で攻撃魔法を繰り出す戦魔道士の方が引く手数多あまたなのである。

「なあ、エミール」

ロルスは急に神妙な顔をして新米薬魔道士のきれいな青い瞳を覗き込んだ。



「俺、村を出ようと思う」

その言葉はやつと魔道士の耳に届いた。エミールはさつき挨拶を交わして以来初めて、ロルスの顔に目を向けた。ロルスは、十六才にしては幼く見える浅黒い顔を精一杯真面目な表情に見せようと努力しているようだった。

「村を？出る？」

薬魔道士には、自分と同年の幼なじみが今言ったことの意味がわからなかった。彼の話を全然聞いていなかったのだから無理もない。

「村を出る、つて、出ていつちゃうつてこと？」

「それ以外、どういう意味になる？出て行くというのは、もちろん二度と帰らない覚悟で旅に出ることだぞ。朝出て夕方帰ってくるという意味じゃない」

ロルスは苦笑いした。

「なんのために？」

エミールはますます首を傾げた。

「おまえ、俺の話を聞いていなかったのか」

ロルスはやにわに立ち上がり、両の拳を握り締めた。

「俺は女救世主を探す。そして救世主の片腕となって祖国を救う。」

そう、俺は英雄になるんだ」

エミールは、文字どおり、開いた口がふさがらなかった。二十秒ほど経ってやっと

「……本気で言ってるの？」

という声が出た。

「あたりまえだ。俺が冗談を言うためにわざわざこんなところまでやって来ると思つか」

ロルス目は真剣だった。もともと、彼が英雄伝説の話をするときはいつも真剣だ。ろくに学校に行かなかったロルスに、少しでも字を覚えさせてあげようと「ハーデイスの英雄伝説」と題する幼児向けの本を与えたのが間違いだった。彼はその物語の虜になった。あつというまに、一字一句に至るまで暗記してしまった。とりわけ、主人公に対する憧れの念は常軌を逸していた。エミールは今までにも、そんなロルスの様子を見て心配になったことはあった。しかし、まさかここまでアホだたとは、エミールでさえ想像していなかった。

「で、ロルスのお父さんとお母さんには相談したの？」

エミールはいきなり反対するより相手のペースに合わせる方が賢明だと考えた。

「できるわけないだろ。こんなことおやじに言ってみろ、言葉より先にげんこつが返ってくる」

「じゃあ、旅の費用はどうするの。旅の装束を準備するだけでもお

金がかかるのに、その上道中の宿泊費や食費となれば、ちょっとやそつとでは済まないよ」

ロルスはエミールのそばに再びしゃがみ込んで意味不明の薄ら笑いを浮かべた。

「実は今からそのことを話そうと思っていたんだ」

と彼が言うのを聞いて、エミールは嫌な予感がした。ロルスがこの顔をするのは何か良からぬことを企んでいる証拠なのだ。

「おまえも俺と一緒に来てくれないか」

いつもマイペースのロルスも、このときばかりは言いにくそうだった。

「おまえにはおやじさんの遺した金があるだろ？おまえは天涯孤独だからその金をどんなふうに使おうとだれも文句は言わない。まして祖国のために使うのなら、死んだおまえのおやじさんだってきつとあの世で喜んでくれる」

「バカなこと言わないでよ」

エミールの我慢も遂に限界に来た。

「あれは大事なお金なんだよ。どうしても困ったことがあるときにだけ使いなさいって、父さんに言われたんだ。僕にはそんなくたらないことのためにあのお金をつぎ込む言われはないし、村を出て行く気もない」

「祖国を救うことがくだらないことだって言うのか」

ロルスの言葉にエミールは呆れ果て、

「あのねえ、ロルス。確かにここ十年このホムス王国は隣のデイルスの軍隊に八割がた占領されたままだ。でもね、それはデイルスの王様に正当なホムス王の王位継承権があるからなんだよ。伝説のよ  
うに、蛮族が国を荒し回っているわけじゃない」

と言って聞かせた。

「なんでよその国の王様に、うちの王位継承権があるんだ」

ロルスは納得できない様子だった。

「デイルスの王はホムス国内にフハディアという領地を持っている。つまりデイルス王であると同時にホムス王の臣下、フハディア伯でもある。それに、今のデイルスの王様は前のホムス王のいとこにあたるお方だ。ホムスの王になったとしてもおかしくない。むしろ、一部の領主たちが彼の王位継承を認めようとせず、いまだ抵抗を続けていることの方がおかしい」

「しかし、よその王様に支配されるのは確かだろう。俺、デイルス語なんか喋れないぞ。いきなり、おまえは今日からホムス人ではなくデイルス人だ、なんて言われても困る」

「そんなことにはならないって。ただデイルスの王がホムスの王を兼ねるだけなんだから。なんにせよ、今は祖国の危機でも何でもなし、誰も英雄を必要としてはいない。ロルスは真面目に畑を耕すことだけ考えていればいいんじゃないの」

エミールは諭すように言った。

「百姓の次男坊なんて所詮は厄介者さ。うちの畑は兄貴が継ぐんだ。俺は万が一兄貴が死んだときや兄貴の嫁さんに子供ができなかったときのための予備部品みたいなものだ。親父が死んだら少しは土地を分けてもらえるかも知れないが、その程度では真面目に耕すかいもない」

ロルスは皮肉な笑みを浮かべた。

「畑を耕してさえいれば、平穩無事に暮らしていけるのに」

「俺は平穩無事なんてまっぴらだ。なあ、エミールおまえは平気なのか。おまえはこれから一生、爺さん婆さんに肩こりや腰痛の薬を作ってやるだけの日々を送ることになるんだぞ。それで満足なのかおまえのその高い魔力をもっとみんなの役に立つことに使いたいとは思わないのか」

「……………」

エミールは口ごもった。自分の魔力を薬品調合以外の目的に使うなど今まで考えたこともなかったのだ。

「……………僕の魔法は十分老人たちの役に立ってるよ。みんな、僕の調合する薬のおかげで肩や腰の痛みを気にせずに済むんだもの……………」

エミールの言葉は齒切れが悪かった。自分自身を無理矢理納得させようとしているかのようだった。しかしロルスはそんな些細な変化に気づくほど繊細な神経を持ち合わせてはいなかった。

「……そうか。なら、いいんだ。いや、すまなかった。いきなりわけのわからないこと言っちゃって。今の話は忘れてくれ」

エミールはロスルが素直なのを意外に感じながらも

「じゃあ、村を出て行くことも諦めるんだね？」

と尋ねた。

「諦めるものか」

ロスルは激しく首を振った。

「俺は絶対に英雄になるんだ。そのためにはどこにいてもいい女救世主を探し出さなくてはならない。金ぐらいどうでもなる。ただ、見知らぬ土地をあちこち訪ね歩くのにおまえみたいな魔法使いが一人いてくれれば心強いんじゃないかって思ったんだ。俺は身を守るといつても小さいころ死んだ爺ちゃんに少し剣術を教わっただけだからな。でも、おまえが嫌だというなら仕方ない。俺は一人でも村を出す」

ロスルはゆっくりと立ち上がり、書庫の出入口へと歩きだした。

「ロスル……」

エミールは何か言葉をかけようと思ったが、ロスルの寂しげな背中を見ていると胸が詰まって声にならなかった。

その夜、エミールは夢を見た。

夢の中では、彼は小学生になったばかりの小さな子供だった。二年前死んだ父も八年前世を去った母もその夢の中ではまだ生きていた。

エミールは学校から帰ってくるや否や、カバンを家の中にほうり投げ、ロルスのいえへと向かった。彼を誘い、両親から戒められていたにもかかわらず、二人だけで村はずれの森の奥へと分け入った。

そこは二人にとって未知の世界だった。下草や枯れ葉を踏みしめて道なき道を行き、草むらをかき分け、岩伝いに小川を渡ってゆくと次々と新たな風景が目の前に現れた。その度に二人の胸は高鳴った。彼らは更に新しい驚きが欲しくなった。もっと奥へ進んでいきたいという衝動を抑えられなかった。

二人の行く手を巨大な木の幹が遮った。彼らはしばし、惚けたようにその木を見上げていた。そのうち、エミールが幹の根元に食用のきのこが無数に生えていることに気づいた。二人は騒ぎだした腹の虫を静めるため、きのこをむしり取って食べようとした。

そのとき、彼らは背後に物音を聞いた。振り返ると彼らの周りを何十本もの人の形をした木が取り囲んでいた。エミールは「木人」

と呼ばれる植物モンスターの話を思い出した。木人たちは自分たちの食料を横取りされたと思ったらしく、敵意を現わにしながらエミールたちの方へにじり寄ってきた。

ロルスとエミールはきのこを放り出し、脱兎のごとく走りだした。幸い、木人は動きが鈍かった。二人は木人の間をすり抜けて包囲を破り、無我夢中で走り続けた。しかし、土地カンという点では森の住人である木人の方に分があった。たちまち二人は崖っぷちに追い詰められた。追いついてきたのはたった三匹、これなら何とか撃退できる、と考えたエミールは火炎の術の呪文を唱えた。すると木人の一匹は真っ赤な炎に包まれ、見る見るうちに灰になった。

「おい、エミール、なんてことするんだ」

ロルスは叫び声を上げた。

「おまえは大きくなったら薬魔道士になるんだろ。植物モンスターの殺したら薬魔道士の神様のご加護を受けられなくなるぞ」

「じゃあ、どうするの。このままでは二人とも殺されちゃうよ」

エミールは半べそをかきながら訴えた。

ロルスはそばに落ちていた棒切れを拾い上げ、剣のように胸の前で構えた。

「俺が何とかする。おまえは奴らが怯んだ隙に逃げろ」

エミールの口から反論の言葉が出るよりも早く、ロルスは木人目掛けて突進した。ロルスの振った棒切れは運良く木人の急所である



目に当たり、ダメージを受けた木人は撤退を始めた。

二人はまたでたらめに走りだした。傾いた太陽からの弱々しい光は森の中にほとんど届かなかった。遠くに灯をかざす人影が見えたとき、エミールは大きな泣き声を上げた。

二人を発見した村人はすぐさま彼らの両親を呼んで来た。あちこちを捜し回っていたほかの村人たちも無事発見の報を聞きつけて松明を手に二人のもとに集まってきた。大勢の村人の前で、それぞれの両親は二人をこっぴどく叱りつけた。特にエミールの父の言葉は辛辣だった。

「おまえは薬魔道士になって父さんのあとを継がなければならないんだぞ。薬魔道士の神、デーフオンは植物モンスターを三匹以上殺した者をご加護くださらない。デーフオンのご加護がなければ薬草を調合する魔法は一切使えなくなるんだ。知っているだろう。なのに、おまえはどうして木人を殺したりしたんだ？」

エミールはただ泣きじゃくるだけだった。

ロルスは泣きこそしなかったが、父に殴られて真っ赤に腫れた頬を抑えながらしょんぼりしていた。ロルスも百姓の子である以上、小麦の神、ダウスの加護が必要である。薬魔道士ほどではないにせよ、草木を大切にしなければいけないのはエミールと同じだ。ダウスの加護を受けない者が育てた麦には穂が実らないのである。自分が木人をやったおかげで二人とも逃げられた、とロルスが得意げに話した途端、父のげんこつが飛んできたのだった。

エミールは家に帰り、小言の続きを聞きながら夕食を食べた後、すぐ床に就いた。目を閉じると、父や母の怖い顔も、襲い来る木人

たちの姿もなぜか頭の中から消えてなくなり、森の奥深くで見つけたすばらしい光景だけが臉に浮かんた。きのこが生えていたあの大木の先には一体何があるのだろう、大きくなったらあの先を探検してみたいな……。そう考えているうちに、いつしか眠りに落ちた。

目が覚めたとき、エミールは十六才に戻っていた。ベッドから起き上がり、辺りを見回してみたが、部屋が一つしかないそのちっばけな家には、もちろん彼のほかに誰もいなかった。

彼は立ち尽くしたまま、しばし夢を反芻した。父や母に会えた喜びよりも、十年前、森の奥で目にしたあの風景を再び思い出せた喜びのほうが大きかった。今や彼の胸の中は好奇心で一杯だった。こんな気持ちになるのはいつ以来だろう。彼は思った。薬魔道士になって父の後を継がなければならないという義務感がいつしか彼から冒険心を奪っていたのだ。

エミールはいても立つてもいられなくなった。あの大木のもつとずっと先にあるものが見たくて見たくてしょうがなかった。顔を洗い、パンのかけらを口にねじこむや、頼まれていた薬の調合を手早く終わらせて依頼主の老夫婦のもとに届け、すぐさまロルスの家の畑に向かった。

ロルスは両親と共に農作業に勤しんでいた。今の時期、畑の方はそれほど手がかからない。彼らの仕事が一段落したところでエミールが、薬草取りにロルスを同行させたい、と彼の父に申し出ると、父は快く承諾してくれた。

エミールはロルスを伴って森に入った。いつもエミールが薬草を採取する場所はそれほど奥めいたところではない。それでもたまにモンスターと遭遇することがあるので一応安全のためにロルスが同

行することになっているのである。ところが、今日のエミールは薬草には目もくれず、モンスターのうようよいる森の奥地へと進んで行くのだった。不思議に思ったロルスは訳を尋ねようとした。

そのとき、目の前に巨大な木の幹が現れた。かつてそういたように、二人は木の幹を下から上へと見上げていった。幹は遥か上空で緑色のもやになって青空の中へと溶け込んでいた。

「なんだ、意外と近くだったんだね」

エミールが言った。

「十年前来たときは、大冒険の末ここにたどり着いたような気がしたけど」

ロルスは幹の根元に群生するきのこに目をとめ、

「あのきのこを食べようとして木人たちを怒らせちゃったんだよね」と呟いた。

「思い出した？死ぬほど怖い思いをしたけど、今となっては楽しい思い出だね」

エミールは嬉しそうにロルスの顔を見た。

「どうして急にこんなところへ来ようなんて思っただんだ？」

ロルスはちょっと怪訝そうな顔をした。

「うん……この木の向こうにはどんな風景が広がっているのか知りたくなってさ」

「ああ、この先か。この木の向こうには深い谷があって底に川が流れていて、谷沿いに少し遡ると大きな滝があるんだ」

「ロルスはこの先に行ったことがあるの」

エミールは意外そうに言った。

「何度もな。と言つても、ここ二、三年はこの大木のところまで来ることなくなった。もうこの森は探検し尽くしたから」

「そうだったの。でもロルスはそんな話、全然僕にしてくれなかった」

「おまえが聞こうとしなかったんじゃないか。薬魔道士は薬草のありかがわかっていればそれでいいんだ、って」

「そうだったつけ。そう言えばそうかもしれない。……なんだか、惜しいことしたな。ロルスが探検したとき僕も一緒に行けばよかった」

「この村の近くにはもう俺が行つてみたい、見てみたい場所はない。俺が次に行きたいところは別の土地、見てみたいのは大きな町だ」

「そして、いつか女救世主を見つけたい、でしょ」

エミールは悪戯っぽく微笑んだ。

「そうさ。彼女はきつと俺を英雄の座へと導いてくれる。『ハーデイスの英雄伝説』を初めて読んだとき、なぜかそんなふうに感じたんだ。それに、彼女も俺のことを求めているような気がする。うまく説明できないが、多分これは天命なんだと思う。俺はそう信じている。だから、俺は旅立たなければならぬんだ」

ロルスはそう言っ て目を輝かせた。

するとエミールも目をロルスのそれと同じ色に輝かせ、

「僕も行くよ、ロルス」

と言った。

「今なんて言った」

ロルスは言葉の通じない異国人のように不思議そうにエミールの顔を見やった。

「僕もロルスとこの村を出るよ。一緒に旅をしよう。僕もこの村の外の世界を見たくなくなった。女救世主に会えるかどうかはわからないけど、想像できないような素晴らしい風景やわくわくするような出来事に出会えるのは確かなんだから」

エミールは力強くうなずいて見せた。

「おまえ……いいのかよ、おまえの薬を必要としている人がいるんじゃないかったのか」

「薬魔道士は今、余っているんだ。隣の村にも、その隣の村にもい

るから大丈夫、僕の患者さんを紹介しておくよ」

「そうか」

ロルスはエミールの手を握り締めた。

「よし、じゃあ一緒に行こう、エミール」

「ロルス……」

エミールも彼の手を握り返した。

「実は名、俺、ちょっと心細かったんだ。昨日も言っただけど、俺の剣の腕は頼りないからな。村を一步出れば盗賊やモンスターがうようよしてると言うじゃないか。おまえは頭がいいから奴らを避ける方法や追い払う手立てを見つけるのもうまいだろう？おまえが一緒なら安心だ」

ロルスは少し照れ臭そうな顔をした。

「僕は旅なんてしたことないから頼りにはならないかも知れない。そういうことに関してはロルスとどっこいどっこいだよ。でも、三人寄れば文殊の知恵、って言うからね」

「そうだな。とにかく、善は急げだ。明日にでも出発しないか、エミール。おやじにこの計画がばれるまいに村を出てしまいたい」

ロルスは急にそわそわし始めた。

「だめだよ。僕は患者さんに断りを入れないといけないし、旅装束

の準備もしなければならぬ。道具をそろえるだけでなく情報も必要だ。一週間もしたら行商人がやってくるから、それまでは我慢しなければ」

エミールはそう言ってロルスを諭した。

「ちえつ。面倒くさい」

ロルスは残念がった。

「けど、おまえの言うことはもっともだよ。早くもおまえの忠告が役に立つたって訳だ」

エミールは首を振り、

「助言って言うほどでもないけど。なにせよ、ロルスも暇があれば旅の経験のある人にでも聞いて情報を集めておいてよ」

と言った。

ロルスは気を取り直して

「よし、わかった。まずはうちの隣のノンモ爺さんにでも聞いてみようぜ。行くぞ、エミール」

と応え、足早に歩き始めた。

「あ、待ってよ、ロルス」

エミールは慌てて追いかけた。

二人が去った途端、大木の回りに立っていた低木が一斉に動き出した。木人だった。彼らは運命の番人のつもりなのか、森の彼方に消え行く二人の少年の姿をただ静かに見守っていた。

それから一週間、ロルスとエミールは村のあちこちで情報を集めた。旅先で目にした珍しい物や恐ろしい出来事の話を知っている二人の胸は高鳴った。話を聞いただけでこれだけワクワクするのだから実際に見たり体験したりしたら心臓が止まってしまうのではないかとさえ思えた。

彼らはあくまでそれとなく聞いたつもりだったが、その瞳に宿る好奇の光はあまりに強すぎた。二人の行動はたちまち村中の噂になった。ロルスは両親にその訳を詰問されて、つい、エミールが勉強のため旅に出るつもりなのだ、などとでっちあげてしまった。

このことをロルスから知らされたエミールは仕方なく話を合わせることにし、もう少し魔道の勉強をしたいから町を出ることにしたのだ、と村人に説明した。すると村の人々は、納得し、承諾してくれたのはよかったが、エミールのためにわざわざ旅に必要な衣装や道具までそろえてくれたのだ。エミールは村人を騙していることへの自責の念にさいなまれた。しかし、本当のことを打ち明けても口



ルスが村を出ることを彼の両親は許さないだろう。彼と一緒に旅をするには嘘をつくのもやむをえまい。

罪滅ぼしに、エミールは色々な薬を作って村人たちに与えた。特に今まで彼の患者だった老人たちにはできるだけたくさんの薬を作って手渡した。彼らはエミールの旅立ちをひどく残念がった。エミールは、ちゃんと隣村の薬魔道士に紹介状を書いておいたから心配しないで、と言って慰めた。

そのうち、村に行商人がやってきた。エミールは彼からあと少し旅に必要な道具を買い求めた。本ならルスに旅装束を買ってあげたいところだが、そのことが商人の口からルスの両親に伝わるはずいので諦めざるを得なかった。ルスの旅装束は町に出たときにでも手に入れるしかなさそうだ。

エミールは村人に、二日後村を発つ、と嘘を言った。村人たちはきつと見送りに来るだろう。そうしたらルスと共に行くことがばれてしまう。ルスを後から来させてもよいが、どうせなら一緒に旅立ちたい。そう考えたからである。実際には、ルスとは翌朝、日の出前に村の北側の出口で待ち合わせて出発するという約束を交わしていた。

その夜、エミールは驚くほどよく眠れた。目が覚めたとき、あまりの爽快さに、寝過ごしてしまったかと思い、飛び起きたほどだった。しかし窓の外はまだ真っ暗で、ふくろうの声が鳴り響いてさえた。

旅行用の背負い袋の中身を今一度点検し、父の遺したかなりの量の金貨を細長い袋に詰めて腹に巻き、魔力を高める効果のあるマントを羽織った。もう二度と帰ってこないかも知れない家の中を惜し

むかのように見回した後、外へ出、扉に予定が変わって一日早く発つことになった、と書きつけておいた。そして、静かに歩きだし、東の空に浮かぶ下弦の月と満天の星明かりが照らし出す砂利道を踏みしめながら村の北の出口へと向かった。

待ち合わせ場所には、ロルスはまだ来ていなかった。まさか、両親にばれたなんてことはないだろうな、などと考えているうちに、南からあからさまに挙動不審な人影が現れた。ロルスに違いないと思い、岩陰から身を乗り出して手を振るとロルスは慌ててエミールの方へ駆け寄った。ロルスがそばまで来たとき初めて、半月と星々の光を受けたその姿がはつきりと見えるようになった。

「ロルス、どうしたの、その格好」

エミールは驚きの声を上げた。ロルスが身に付けていたのは騎士が長距離の行軍の際着用する軽い革鎧だったのだ。しかも腰には立派な剣がぶら下がっている。

「どうだ、似合うか」

ロルスは得意げに胸を張った。

「爺ちゃんの形見さ。爺ちゃんは若いころ、一応騎士だったからなでもこんなもの、とつくの昔に捨ててしまったんだと思ってた。さつきこつそり家を抜け出そうとしたら、兄貴に呼び止められたんだ。こいつを着て行けって。兄貴、俺が旅に出るつもりだとうすうす感づいていたらしい。納屋の奥からこの鎧を引っ張りだして、その上、剣の刃まで研いでおいてくれた」

「そうだったの。でも、それを着てると、本当に騎士みたいだ。口

ルスは背が高いからそういう勇ましい格好が絵になるんだね」

エミールはそう言って幼なじみの浅黒い顔を見上げた。

「兄貴に感謝しなければならぬのはそれだけじゃない。親父とおふくろは説得してやるから心配するな、だつて……」

さすがのルスもしんみりとなった。

「いいお兄さんじゃない」

エミールはルスの肩を叩いた。

「そうだな」

ルスは気合いを入れるために両の拳を握り締めた。

「よし、行くぞ、エミール、女救世主が俺を待っている」

「うん、行くっ」

エミールは力強くうなずいた。

二人は北極星の方向へ足を踏み出した。

道を歩き始めてすぐ、エミールは思い出したように立ち止まり、

「そうだ、忘れてた。僕、ディーフォンのご加護を捨てることにしたんだった」

と言った。

「どうして？ そんなことしたら、おまえは薬を調合する魔法が使えなくなる。薬魔道士でいられなくなる」

ロルスは驚いて相棒の顔を見やった。

「これから僕たちは旅に出るんだ。慢性病の薬が作れたってなんの役にも立たないよ。それより、盗賊やモンスターに出くわしたときに備えて攻撃魔法を使えるようにしておいたほうがいい」

「いいのかよ。もう少し薬魔道士の経験を積みば医魔道士になれるんだろ？ もつたいないじゃないか。一度ご加護を断ったら五年ぐらいはその神様にそっぽを向かれるって聞いたぜ」

「いいんだよ。実は、今日のために魔法攻撃のやり方を魔道書で勉強してたんだ。だから戦魔道士の神、エソルシエのご加護さえ受けられなくても攻撃魔法が使える。今にも危険が襲ってくるかも知れないからね」

エミールは胸の前で手を合わせて目を閉じ、

「エソルシエよ、このエミールに汝のご加護を与えたまえ。我、ここに誓う、汝の御心のみを我が意とし、汝の力のみを我が頼みとすることを」

と唱えた後、天を仰いだ。一通り誓いの儀式が終わると、ロルスの方に目をやって満足げに微笑んだ。

「これでよし、っと。植物に魔法をかけることはできなくなったけど、その代わり人や動物を火だるまにしたり、雷を落したり、凍らせたりすることができるようになった」

「頼りにしてるぜ、戦魔道士さんよ」

ロルスまで満足そうな表情をしていた。

「ところで、ロルスはどうするの。旅に出た以上、麦に穂をならせる能力を使う機会があるとは思えないけど」

と相棒に言われ、ロルスは腕を組んだ。

「そうだな……、なあ、エミール、英雄の神様っていないのか」

「いるわけないじゃない、そんな神様」

エミールは呆れ顔で言った。

「なんてこった、八百万も神様がいるのに英雄の神様がいないなんて。行商人や料理屋の皿洗いや遊女や盗人にだって神様がいるんだろっが」

「ロルスは一応剣が使えるんだから、取りあえずは剣士になればいいんじゃない？ 剣士としての経験を積み、そのうち騎士とか拳闘士になることもできる」

ロルスは仕方ない、とばかり方をすくめ、

「神様にご加護を求めるのは十三才の誕生日に初めてダウスにお祈りして以来だよ。それで剣士の神様の名は？」

と尋ねた。するとエミールは

「アギユイス」

とぶっきらぼうに答えた。

ロルスは目を閉じ、手を合わせた。

「アギユイスさま。このロルスにご加護を与えたまえ。我は誓う、汝の御心のみを我が意とし、汝の力のみを我が頼みとすることを」

祈り終えたロルスはしげしげと自分の両手を眺めた。

「これで剣士になったのか。実感湧かないなあ」

「剣を振ってみればいい」

エミールは相棒の腰の剣を指差し、言った。

ロルスは剣を抜き、上段に構え、振り降ろした。

「お、なんか剣が軽く感じるぞ」

「でしょ」

戦魔道士エミールはさかしげにうなずいた。

「さあ、これで準備は整った。早く出発しないと村の人が起きだす時間になっちゃうよ」

「よし。まずはスコスの町を目指そう」

剣士ロルスは剣の先で北を指し示した。

三十分も歩くと、隣村が見えてきた。ここはロルスたちの村に比べると幾分規模が大きく、雑貨屋や小学校、鍛冶屋までそろっている。エミールの通っていた魔道学問所もここにある。ちょっとした買い物するのにこの村まで来ることもあるため、顔見知りの村民も多い。旅に出ることをあまり彼らに知られたくないので、ロルスたちは人の集まる中心部を避けて足早にその村を通り過ぎた。

その後、いくつかの村を抜け、更に北へと進んで行くうち、道は緩い上り坂になった。単調な杉林の中をだらだらと登って行くのは

好奇心が服を着ているようなロルスたちでさえ退屈だった。彼らにとって唯一の希望は遙か遠くに見える坂の頂上だった。きっとあの向こうには息を飲むような絶景が広がっているに違いない。そう信じ込むことで、退屈さを忘れようとした。

太陽は彼らの後方に回り、背中に容赦なく日差しをぶつけてくるが額に吹き出た汗はひんやりとした空気があつというまに乾かしてしまう。高地の冷気は旅人にとっては快いものだった。

坂を上り詰めたとき眼下に広がった光景はロルスたちの期待を裏切らなかった。すぐ下にはスコスの町が広がっている。今彼らの立っている場所から町まで急な山腹をつづら折れになった道が降りて行く。町の向こう側には川があり、何艘かの小さな帆船が浮かんでいる。川沿いには西から東へ街道が走っているのが見える。そのもつと向こうには、頂上に雪をいただいた大山脈がそびえている。

ロルスとエミールはその風景を十分堪能した後、はち切れたように一気につづら折れ道を駆け降りた。スコスの入り口についたとき、町の教会が十二時を告げた。ちょうど彼らの腹時計も昼飯時を知らせていた。

スコスはエイハン街道沿いに位置する小規模な宿場町である。ロルスたちの村からわずか半日で来られるこの町は村の男なら一生に二、三度は訪れる機会がある。もっとも、ロルスとエミールにとって町を訪れること自体、生まれて初めての経験だった。

二人は物珍しそうに辺りを見回しながら目抜き道を歩いた。通りを行き交うのは巨大な行李を背負った行商人の他、ロルスと同じような旅の剣士やエミールと同じような魔道士たちだった。彼ら旅人たちは一様に、通りに面した料理屋を覗き込むようにして歩いて行



く。昼の十二時と言えば考えることは皆同じのようだ。

ロルスたちは適当な料理屋に入り、狭い店内にひしめく客たちの間を縫うようにして奥の方へ進んだ末、やっと空席にたどり着いた。遠く離れたカウンターの中から恰幅の良い中年女性が、昼定食でよいか、と聞いてきたので、ロルスは大声で、それ二つください、と答えた。

二人はようやく落ち着いて話ができるようになった。

「スコスまでは平穩無事だったね」

エミールは手ぬぐいで汗を拭きながら言った。

「で、これからどうするの、ロルス」

「ははは、実はあんまり良く考えてなかったんだ。とにかく村を出たい一心だったから」

ロルスは後ろ頭を掻きながら答えた。

「そんなことだろうと思ったよ」

エミールは肩をすくめた。

「おまえはどう思う？どうしたら女救世主に会えると思う？」

ロルスに真剣な眼差しで見つめられて、エミールはちょっと口ごもった。彼は女救世主の話など信じてもないし本気で探すつもりもない。

「……伝説では、彼女は蛮族に占領されたハーディス帝国の人々に、自分たちの手で自由を勝ち取ることの大切さを説いて回ったんですよ。じゃあ、僕たちもデイルスに占領されている北ホムス地方へ向かうべきだよ」

エミールは一応もつともらしいことを述べたが、本当は彼自身が北ホムスへ行ってみただけなのである。

「北ホムスカ……」

「エイハン街道を進めば南ホムス最大の都市、エイハンがある。そこから更に北上してレスティア峠を越えらるともう北ホムス地方だよ。北ホムスに入ればまず魔道都市ユフがあつて、そのずっと先には王都パンノス、そして北ホムス平原を横切ると隣国デイルスとの国境地帯に出る」

「デイルスまで行つてもしょうがないだろう」

「ああ、そうだった」

エミールはしまった、とばかり舌を出した。自分が訪れたいところを列挙しているうちについボロが出てしまった。

「とにかく、北へ向かつて進もう」

ロルスはそんな相棒の様子をいぶかるでもなく、希望に満ちた眼差しで遠くを見つめた。

「エイハンとかパンノスみたいな大きな町に行けば人がたくさんい

るから、女救世主のことを知っている人と会える可能性も増える」

「そうだね」

あいづちをうちながら、エミールは心の中で安堵の溜め息をついた。ロルスがここから東の湿原を越えたいなどと言いつ出すことを懸念していたからである。南ホルムス東部もデイルスの占領下にあるが、そちらの方にエミールの行きたい場所はない。

同時に、ロルスに対して申し訳ない気もした。自分はもしかしたら相棒の純粋な願いを踏みにじているのではないか。彼は思った。しかし、ロルスの救世主探しを一応は手伝っているのだからバチがあたることはないだろう……

そのとき、カウンターの女が、料理ができたので取りに來い、と言った。二人は彼女から盆にのった定食を受け取ってテーブルを持ち帰り、食べ始めた。日の出前に朝食を取って以来何も口にしていなかったため、二人とも本当に腹ぺこだった。大食漢のロルスは言うに及ばず、いつもは食の細いエミールでさえ食べる速度を制御できなかった。かなりの量が盛られた定食だったにもかかわらず、あつと言うまに平らげてしまった。

食べ終わって椅子の背もたれに体を預けたロルスがふと店内を見回すと、いつのまにか客の人数が三分の一ほどに減っていることに気づいた。カウンターの中年女性も先程までとは違って変わって暇そうに突っ立っている。

「ねえ、おばさん」

ロルスは思い切ってその女性に声をかけた。

「この町に女救世主はいないか」

「はあ？」

女は不思議そうな顔をして少年剣士の方を見やった。彼は大真面目な表情だったが、彼の向かいに座っている魔道士はひどく狼狽していた。女が次に何を言ったらよいのか考えている間にその魔道士が口を開いた。

「いや、その……、ほら、『ハーデイスの英雄伝説』ってあるでしょ？ 僕たちはあれに出てくる女救世主みたいな人を探してるんだ」

「なぜ」

女はますます不思議そうな顔になった。

「それは……その……、僕の理想のタイプなんだ、彼女みたいな人が」

魔道士は言いにくそうに言った。

「本当なのか、エミール」

今度はロルスが驚いた表情になった。

エミールは今更ながら、別の言い訳を思いつかなかった自分を責めた。取りあえずロルスを無視して、もう一度女に

「ねえ、おばさん、どこかにいないかな、そんな人」

と尋ねた。

女は急に堰を切ったように笑い出した。

「はははははははは、理想のタイプが伝説の女救世主だつて？ はははははははは」

魔道士の顔は今や熟れた林檎のように真っ赤だった。一方、その相棒の剣士は納得のいかない表情で女と魔道士を見比べた。女は剣士に咎められたと思つたらしく、無理矢理笑いを噛み殺した。

「いや、失礼。笑っちゃいけないよね、あんたたちにとっては大事な話なんだから」

「それで、知っているのか、それらしき女を」

剣士はまた真面目腐った顔で女に尋ねた。

「女救世主ねえ……。本当にそんなのがいるならまずうちの店を食い逃げから救つて欲しいもんだ。一日に二、三人はいるからね」

「なんだ、知らないのか」

「あいにく、あたしの知り合いにそんな品行方正な奴はいないよ」

「知り合いじゃなくてもいい。そんな人の噂を聞いた、とかいうことはないか」

「うーん、噂か……。噂と言えば、最近この辺り一体を荒し回って

いる盗賊団のお頭が、確か、女だつて聞いたけど」

「盗賊かよ。救世主には程遠いな」

「彼女はどちらかと言うと、英雄の方だね」

「どうして盗賊が英雄なんだ？」

「彼女たちが悪徳商人や年貢の取り立てが厳しい代官から金品を奪つて人々に分け与えるからさ。いわゆる、義賊つてやつだ」

「なるほど。しかし、それなら女救世主と言えなくもないよな」

ロルスはそのままじつと考え込んだ。彼の様子を見てエミールは表情を曇らせた。まさかロルスは盗賊の根城に乗り込もうなどと考えているのではないか。そんな暴挙につきあわされては命がいくつあっても足りない。

「救世主はたとえ正義のためでも盗みなんてやるような人じゃないよ、きつと」

エミールの苦しまぎれの一言にロルスはあっさり納得してくれた。

「そうだよな。俺もそう思う」

「すまないね、お役に立てなくて」

カウンターの女は肩をすくめて言った。

「いえ、いいんです」

エミールは首を振った。

「それより、お代はいくらになりますか」

「6レートだよ」

エミールは小銭入れを取り出した。妙に軽いので、まさか、思いながら開いて中を見ると、案の定1レート硬貨一枚しか入っていなかった。そう言えば昨日、村で行商人から買い物をしたとき、すっかり小銭を使い果たしてしまったのだ。

「ねえ、ロルス、小銭持ってる？」

という相棒の質問に、ロルスは悲しげな笑顔で答えた。

「俺が金なんか持っているわけないだろう。うちみたいな百姓の家にとって金なぞ鋤とか鍋を買うときに使うぐらいのものだ」

エミールは、聞くだけ無駄だった、という表情を浮かべながら、魔道士マントの下に手をつ込んでまさぐり始めた。外から見えないように、腹に巻いた金貨袋を解き、中から金貨を数枚取り出してからまた腹に結び付けるのにはかなりの時間を要した。

カウンターの方へ歩み寄り、女に金貨を一枚手渡そうと腕を伸ばした魔道士の足元に、革袋が落ちてきて中身の金貨を二十枚ほど吐き出した。店の中に残っていた五、六人の客は石の床に金属が跳ねる音を聞いて、一斉に魔道士の方を振り向いた。

エミールは慌てて革袋を拾い上げ、こぼれた金貨を袋の中に収め

た。どうやら袋を体に結わえ損ねたらしい。彼は袋を手を持ったまま金貨を女の手のひらの上に置き、

「ごめんなさい。こんな大きなお金しかなくて」

と言った。女は金貨を大事そうに受け取って店の奥に引っ込み、手のひら一杯の銅貨を持って戻ってきた。

「はい、お釣だよ。今日はいいけど今度来ることがあったら気をつけておくれ。こんな小さな店で金貨なんか出されたら、あつというまに釣銭がなくなってしまう。金貨っていうのは両替屋でくずしてから使うものだよ。それにね……」

女は口をエミールの耳元に近づけた。

「金貨なんて持ち歩いていることが世間に知れたら良くないことを考える連中に狙われることになる。注意したほうがいい」

そう言われてエミールは、はっ、となった。今、確かに視線を感じた。慌てて客席の方を振り返ったが、こちらの様子を伺う客は一人もいなかった。

エミールは顔をこわばらせて自分の席に戻り、革袋を腹に結わえ直した。背負い袋を担ぎ上げ、相棒に「行こう」と声をかけてから、カウンターの女に謝辞を述べつつ足早に店を出た。

「おい、待てよ」

ロルスは怪訝そうな面持ちでそのあとを追った。



彼の相棒は何を思ったのか、町中を通りから路地、路地から通りへとでたために歩き回った。ロルスはその間ずっと、背後から訳を尋ね続けたが、エミールがそれに答えたのは二十分も後のことだった。

「料理屋で僕が金貨をたくさん持っているのを見られたから」

という相棒の説明を聞いてロルスはやっと事情が飲み込めた。

「なるほど。しかし、さつき歩き回っている間、誰かにつけられてるって感じはしなかったけどな」

エミールは少し表情を和らげ、

「僕も大丈夫だと思う。いずれにせよ、金貨を人目にさらしたのはまずかった。これからは店に入る前に両替屋さんに寄って行くのを忘れないようにしなくちゃ」

と言った。

「そうだな」

ロルスは大きくうなずいた。

「よし、出発しよう、エミール。今スコスを発てば、暗くなる前に二つ先の宿場までたどり着けるだろう」

二人は町の目抜き道を北へ向かって歩き始めた。

しばらく行くと目の前が開け、前方に赤褐色の帯と暗緑色の帯が

横たわっているのが見えた。手前の赤い帯はエイハン街道、向こうの緑のはゲール河である。ロルスたちは煉瓦が敷き詰められた街道上に出、左を向いて進路を西に取った。

エイハン街道は今は西に伸びているが、これから少しずつ右へ曲がって行くため、エイハンまでは概ね北西に向かって進むことになる。その間ずっと、ゲール河の暗緑色の流れを右手に見て歩くはずだ。エミールは地図を見ながらそう説明した。

川面に浮かぶ小さな帆船にしばし見とれていたロルスはふとエミールの顔に目をやった。

「おまえが女救世主に憧れていたなんて知らなかったよ」

「え？何の話？」

エミールはロルスの言葉の意味がすぐにはわからなかった。

「さっき料理屋で言ってたじゃないか、女救世主が理想の女だって」

「ああ、そのこと。あれは嘘だよ」

「嘘？何でまた嘘なんかついたりしたんだ」

「それは……」

いい歳をして英雄になるために女救世主を探している、なんて恥ずかしいから。エミールはそう言いかけて思いとどまった。その代わり、

「ロルスが英雄になろうとしていることがデイルス側にばれたら命を狙われるかも知れないから」

と適当なことを言っでごまかした。

「そうか。それもそうだな」

ロルスはエミールの言葉を全く信じていた。

「やっぱりエミールがいてくれてよかった。俺一人ではそこまで考えが回らなかっただろう」

相棒に幼な子のような純粹な瞳で見つめられるとエミールはまた複雑な気分になった。僕はロルスを欺いているのかも知れない。

しかし、ロルスとていつまでも救世主探しを続けるわけではないだろう。そのうちデイルス軍が南ホムスをすべて占領すればいくさは終わり、とりあえず救国の英雄の存在理由がなくなる。そのときロルスはどうするのだろう。英雄になるのを諦めてエミールの観光旅行につきあってくれるだろうか。それとも、あくまでも初志を貫徹するためいくさの起こっているよその国へでも行くのだろうか。

そう考えているうちに、エミールの懸念は別の方向にエスカレートしていった。ひと通り行きたいところに行つて金貨も底をついたとき、僕はどうするのだろう。村に帰つてまた薬魔道士をやるのだろうか。そもそも、僕はどうして旅に出たのだろう。外の世界が見てみたいから、というのかもしれない。自分自身に対する言い訳なのかも知れない。本当は薬魔道士として生きて行く人生に嫌気がさして逃げ出しただけなのかも知れない。

エミールは相棒の浅黒い顔を覗き込んだ。たとえ動機が子供っぽくても世のため人のために尽くそうとしているロルスのほうが僕なんかよりずっと立派な人間なのかも知れない。

やがて彼らの前方にくすんだ緑色の壁が現れた。針葉樹の森が高地を覆っているのである。彼らの行く手は緑の壁に遮られているかに思われたが、しばらく進むと、赤色の街道が木立の間を坂道となつて登って行くのが見えた。

坂の麓までやってきたロルスたちは一旦立ち止まって上方を仰ぎ見た。いつのまにか灰色の雲が太陽を覆い隠していた。

「この森を抜ければ次の宿場が見えるぐらいのところに出ると思う。あれは雨を降らす雲ではないと思うけど、山地の天気は変わりやすいから急いだほうがいい」

エミールの意見にロルスも賛成した。二人は幾分早足で坂道を歩き始めた。

坂を登るにつれ、右手を流れるゲール河はどんどん低まってゆき、ついには街道と河面の間に急峻な崖を形作った。ロルスが崖っ縁に立って下を覗いてみると、暗緑色の水が白い泡を伴って大きな岩の間を縫うように流れているのが見えた。水面から彼の足元まで人の背丈の七、八倍はあるだろう。本当ならもう少しこの絶景を眺めていたいところだが、雲行きが怪しいので今は先を急がなければならぬ。エミールにそのように促されてロルスは再び歩きだした。

辺りは不気味なほど静まりかえっていた。森に住まう鳥や動物たちはどうしたのだろう。雨が降るのを予想してそれぞれの寝ぐらに引き籠っているのだろうか。それだけではない。前を見ても後ろを

振り返っても街道上に人影は一つも見当たらなかった。森に入らず  
つと前に巡礼中の修道士と思しき一団とすれちがって以後、ロルス  
たちが目にしたものといえは物言わぬ森と道と河と空だけだ。

ロルスは相変わらず呑気に景色を楽しみながら歩いていたが、エ  
ミールは何となく嫌な予感がしていた。と言ってもその予感にはつ  
きりした根拠はない。単なる取り越し苦労と言ってしまうばそれま  
でだ。彼自身、何度も胸中の不安を振り払おうと試みた。しかし、  
振り払おうとすればするほど不安は大きく膨らんでゆくのだった。

坂を登りつめたとき、急にロルスが身を強ばらせた。エミールが  
驚いてその顔に目を向けると、彼は眉をひそめ、周囲を見回しなが  
ら、

「今の音は何だ」

と言った。その言葉の意味を彼の相棒が確認しようとした瞬間。

森の中から人影が一つ飛び出してロルスたちの前に立ちふさがつ  
た。続いて現れた三つの人影は彼らの背後と左側に陣取った。

ロルスは前方の人物を睨みつけた。身軽な服装をした中肉中背の  
男で、異様にしゃくれた顎をしている。手にした短剣を胸の前で構  
え、今にも鋭い一突きを繰り出してきそうな雰囲気である。更に左  
から後方を振り返ってみたが、他の三人もやはり同じような身なり  
で、同じように短剣を構えていた。

エミールは不安げな表情を相棒の剣士に向けた。ロルスは腰の剣  
に手をかけ

「お、おまえたちは何者だ」

と上ずった声を出した。いつもより二オクターブは高いその声を聞いてエミールはますます不安になった。

しゃくれ顔の男はすでに戦いに勝利したかのように不敵な笑みをその目に浮かべ、鼻のすぐ下にある口からだみ声を出した。

「有り金全部置いて行け」

ロルスとエミールは顔を見合わせた。前後と左を敵に、右を奈落のような断崖にふさがれていては逃げ出すことは不可能だ。一戦交えるか？いや、だめだ。相手は四人、しかもあの剣の構え方、落ち着き払った物腰からは実戦経験の豊富さが見て取れる。脚も腕も頼りにならない以上、残された武器は頭だけだ。

エミールは懷から小銭入れを取り出して目の前の男の足元に投げ、震える声で

「それが有り金全部です。そこには金貨が三枚も入っています。お願いです、命だけは助けてください」

と言った。

男は小銭入れを拾い上げ、ガマのような口を開いて中を確認した。

「ほう、確かに。薄汚い銅貨の群れの中に金ぴかが三枚混じっている。銅貨だけでも金貨一枚分ほどになるだろう。これはたいした収穫だ」

「お金は渡したのだから、命までは取らないでください。まだ死にたくありません。どうか道を空けてください」

エミールの懇願に、しゃくれ顎の男は薄ら笑いで答えた。

「命は助けてやるとも。おまえたちが正直にすべての金を出しさえすれば」

「それがすべてです。嘘じゃありません。僕たちはお金持ちじゃないのです。それ以上のお金なんか手にしたことも見たこともありません」

エミールが必死になればなるほど、盗賊たちの顔はいやらしい薄ら笑いに引き歪んでゆくのだった。

そのとき、森の中から甲高い声が響いた。

「俺たちが欲しいのはそんなはしたがねじゃなくて、おまえが腹に巻いている革袋の中身のほうだ」

ロルスとエミールは左の方を向いた。木の幹の陰からゆったりとした足取りで出てきたのはロルスよりも背の高い、痩せた男だった。

「さあ、魔道士さん。おまえのその豪華な腹巻きを外してもらえるかな。見てのとおり、俺たちはみな薄着だ。夜ともなれば腹が冷えて仕方ねえ。おまえはマントを着ているんだからその上腹巻きまで必要ねえだろ」

男にそう言われ、ロルスとエミールは再びお互いの顔を見た。剣士の浅黒い顔は悔しさを、魔道士の青い目は恐怖を表現していた。

「どうしてエミールが大金を持っているとわかった」

ロルスの問いに、背の高い男は馬鹿にしたような目つきで答えた。

「おまえたちの後ろに立っている奴は昼飯をおまえたちと同じ料理屋で食った。奴は店を出た後、食事中に見たものを俺たちに知らせた。俺たちはおまえたちの進路を確認して、先回りしてここで待ち伏せた、という訳だ」

「なあるほど」

ロルスは感心した様子でうなずいた。エミールは相棒のその態度にちよつとびっくりした。確かに動揺してはいるが、絶体絶命の緊迫感には程遠いものだったからだ。

「つかぬことを聞くが」

剣士は顔を引きつらせながら微笑んだ。

「おまえたちは何の神様にご加護をいただいている？」

「そんなことを知ってどうする」

背の高い男は怪訝そうな顔で聞き返した。

「盗人<sup>ぬすっと</sup>にも盗人の神様がいるんだろ」

「そのとおりだ。おまえの周りにいる四人は普通の盗賊だが、俺は盗賊頭<sup>かしら</sup>の神様のご加護を受けている」



「俺は今、剣士だが」

ロルスは少しずつ落ち着きを取り戻した。

「いずれは英雄となる」

「は？」

盗人たちは目を白黒させた。

「だから俺たちを見逃せ」

剣士の真面目な表情を見て、盗人たちは声をそろえて笑いだした。

「ははははは、だめだこりゃ。こいつは頭がおかしい。話をするだけ無駄だ。……おい、野郎ども、さっさと片付けちまおうぜ」

頭かしらの合図と共に盗人たちは剣を構え直し、ロルスたちになじり寄った。

「英雄から金を巻き上げるなんて。おまえたち、あとで後悔しても知らないぞ」

剣士の言葉はもう盗人たちの耳には届かなかった。

エミールは一瞬でもロルスを頼もしいと感じた自分が恥ずかしく思えた。この期に及んでは有り金をすべて渡すのもやむを得まい。そう考えてマントの下に手を入れ、革袋を解こうとした。

すると、突然。

どこからかひとときわ張りのある鋭い声が飛んできてエミールたちの耳をつんざいた。

「そこいらへんでやめておきな」

ロルスたちも盗人<sup>ぬすつと</sup> たちも声の主を求めて辺りを見回した。

「おまえたち、一体誰の許しを得てこの森で追いはぎを働いた？」

再び声が聞こえてきたとき、その出どころはロルスたちのずっと前方だとわかった。

ロルスたちの前に立っている顎のしゃくれた盗人は半分だけ首をひねって後方を見やった。他の盗人たちとロルス、エミールは彼の背後に注目した。高くはないが屏風のように幅のある木の幹の陰から軽快な動きで飛び出してきたのはまたも背の高い人物だった。

「この辺り一帯は『闇の狐』の縄張なんだ。勝手なことをされちゃ困るんだがね」

そう言いながら、その人物は一步一步ロルスたちの方へ歩み寄った。曇り空から放たれる日の光は弱々しく、その上、木の葉が陰を作っているため、最初その人物の姿はうすぼんやりとしかわからなかった。ロルスの十歩ほど前のところでその人物が立ち止まったとき、ようやくはっきりと見えるようになった。

ロルスとエミールはその姿を見て息を飲んだ。その人物は黒い髪を短く刈り込み、スリムなズボンをはき、槍を手にはいたが、胸にはちきれんばかりの二つの膨らみが付いていたのだ。

「おまえは……」

ロルスたちの左手で盗賊頭<sup>がしち</sup>が呟いた。

「カーラか」

その声を聞いて、背の高い女は眉をひそめ、

「おや、ドーク、あんただったのかい」

と言った。

ロルスとエミールは盗賊頭と女の顔を見比べた。背の高い二人の人物はしばらく無言で睨み合った。二人とも、色々な感情の入り混じった複雑な表情だったが、こころなしか盗賊頭のほうが女の視線に圧倒されているように見えた。その間、他の盗賊たちは、しまった、と言いたげな顔で女の方を見つめていた。

「まだこんなところをうろろしていたんだね、ドーク」

女が口を開いた。

「知つてのとおり、ここはあたしたちの縄張だ。この森で盗みをやらかしていいのはあたしたち『闇の狐』だけだ。それが盗人同士の掟<sup>おきて</sup>ってわけさ。あんたも盗人なら、盗人の掟は守ってほしいもんだ。あんたとはつい最近まで同じ釜の飯を食った仲だけど、一度たもとを分かってしまえば商売敵<sup>がたき</sup>ってことになるんだからね」

女が言い終わるのを見計らったかのように森の中に二十人もの人影が現れた。ロルスとエミールが驚いている間に、彼らは素早く木の陰から踊り出て、きびきびとした動作で盗人たちを取り囲んだ。見ると、彼らの身なりはロルス、エミールを囲む四人の盗人とそう

変わらないものだった。

ドークと呼ばれた盗人頭は悔しさを押し殺したような笑みを浮かべた。

「それは冷たすぎるぜ、カーラ。この獲物、貧乏魔道士と三下剣士がどれだけの金を持つてるって言うんだ。おまえたちはこの森を通る旅人からいつでも好きなだけ盗めるじゃねえか。また別の機会にもっと金持ちの商人かなんかを狙えばいい。な、頼む、今回の獲物は俺たちに譲ってくれ」

男は自分たちをまるで野菜か何かのように取引しようとしている  
ロルスは、憤慨し、剣を抜く気配を見せたが、エミールに押しとどめられた。

「残念だけどね」

女は不敵な笑みを浮かべた。

「あたしたち、おまえとその小僧が話すのを木の陰に隠れてちゃんと聞いてたんだ。金貨三枚がはした金だって言えるほどたくさんのお金をそっちの魔道士が腹に巻いているんだろ？そんな大金、あたしたちでも滅多にありつけるものじゃない」

ロルスは、今度は女に小僧呼ばわりされたことに腹を立て、またもエミールになだめられた。女はそんな彼らの様子に気づいてさげすんだような一瞥をくれただけだった。

女が合図すると、周りを取り囲んでいた者たちは一斉に武器を構えた。ある者は弓を引き、ある者は剣や槍を握り直し、またある者

は拳術の構えをとった。

盗人頭ドークはこの期に及んでまだ笑顔を作ろうとしていた。

「まあいい。こいつらはおまえたちにくれてやる。けどな、俺たちはこの森で旅人から『追いはぐ』のをやめるつもりはないぜ。元はと言えば、この辺りは俺の『狩り場』だったんだ。俺が『闇の狐』のお頭だったんだ。そうさ、おまえがお頭に納まって俺たちを追出すまではな」

ドークの言葉を聞いて、エミールは、はっ、となった。あの背の高い女がこの盗賊たちのお頭なのか。

「今に見てろ、カーラ」

ドークは言い放った。

「俺はいつか俺の縄張と俺の手下どもをおまえから取り戻してやる。でかい仕事を一発かましておまえより俺の方が腕が立つってことを証明してみせる」

言い終わるや否や、盗人頭は逃げ鼠のようにそそくさと森へ消えていった。彼の四人の手下たちも尻に帆を掛けて逃げだした。

女盗賊の手下たちは彼らを追おうとはせず、むしろ武器を構えていた手をだらりと緩めた。その様子からはすべての仕事をやり終えた安堵感すら見て取れた。すっかり肩から力を抜いた手下たちは次の指示を求めてお頭の方に目を向けた。お頭は満足げな表情を浮かべ、ロルスとエミールを見つめていた。

エミールはさきほどスコスの料理屋で店の女から聞いた話しを思い出していた。この地に出没する義賊、女のお頭に率いられた盗賊団。今、目の前にいるのがその盗賊団なのだろうか。

彼の傍らで、ロルスは不満そうに女を睨みつけていた。本人は精一杯威圧しているつもりなのだろうが、はたから見ると反抗期の少年が親に楯突くときの眼差しにしか思えなかった。エミールは相棒の腕を引っ張ってその勇敢な反抗をやめさせようとした。彼女は剣士の鋭い視線と魔道士の不安げな視線に対し、優しい、包み込むような微笑みで応えた。

エミールは確信した。彼女は義賊のお頭に違いない。彼女のあの表情、あの眼差しからは盗賊稼業に手を染めるような人間に特有の邪悪さを感じられない。世間が広いわけではないエミールにとつて、彼女は他に例えようのない独特の雰囲気放っているように思えた。強いて例えるなら、村長と母親を足して二で割った感じだろうか。

女は笑顔のままゆっくりとした足取りで歩み寄り、ロルスたちのすぐ前に立ち止まった。

「怪我はないかい」

さっきまでとはうって変わって温かみのある声だった。

「あのドークって男は一つのこと目が行くと他は目に入らなくなるタイプだからね。旅人から金を奪おうって思った途端、あいつの目には金しか見えなくなる。旅人の命なんかどうでもよくなっちゃうのさ」

間近でお頭の顔を見て、ロルスとエミールは初めて気づいた。彼

女は意外にも、ロルスたちとほんの二つ、三つしか歳が離れていない二十歳前の若い女だったのだ。

「ありがとう」

エミールは少し顔を赤らめ、言った。

「怪我はありません。奴らが襲ってくる前にあなたたちが来てくれたから」

少年の言葉に、女は我が事のように喜んだ。

「よかった、よかった。命あつての物種だからね。そりゃあ、ここ一番つてときには命を懸ける必要もあるだろうけどさ、ただ旅をしていて盗賊に命を奪われるなんてのは誰がどう聞いたって無駄死にだ」

彼女の優しい口調に感化されたのだろう、それまでずっと挑戦的な態度だったロルスもやつと頬を緩め、話しかけた。

「おまえたちなのか、最近この辺り一帯を荒し回ってるって盗賊は」

「おや、もしかして噂になってるのかい」

「ああ、スコスの町で聞いたぜ。おまえがお頭なんだろう？大した女だ。盗人連中を束ねるなんて誰にでもできることじゃない」

「成り行きでそういうことになっちまったただだよ。あたしなんてどこにでもいる普通の女さ」



ロルスは急に相棒の方を見やった。エミールは不思議に思つて剣士の顔を見返した。その表情は真面目そのもので、目だけからちゃんと輝いていた。ひよっとするとこの女が救世主なのだろうか、と問いかけてくる眼差しだった。エミールは彼の言おうとしていることをすぐさま感じ取り、まずい、と思つた。伝説の女救世主を守護するためにこのまま盗賊たちと行動を共にしたいなどと言ひ出すのではなからうか、という懸念が頭をよぎったからだ。エミールの行つてみたい場所はここよりずっと先にある。第一、旅に出てまだ一日も経っていない。早くもこんなところで道草を食うわけにはいかない。

「旅を続けていけばもつとすごい人に会えるかも知れないよ」

と言うエミールの言葉に、ロルスは一瞬不満そうな顔をしたただけだった。

「そうかも知れないな。……よし、エミール、行くか」

ロルスがそう言ってくれたので、エミールは心の中で、ほつ、と溜息をついた。そして顔を上げ、自分より頭一つ分も背の高い女盗賊に向かって

「じゃあ、僕たち、出発します。助けてくれてありがとうございます」

と言つた。

女は、しかしにこにこした表情のままじつと動かなかつた。

ロルスとエミールが不思議そうに彼女の日焼け顔を見上げると、

彼女は静かに右手を差し出し、手のひらを上に向けた。

「？」

ロルスたちは少しの間、惚けたように彼女の手のひらを見つめた。

「おい……、その手は何だ」

やっと口を開いたロルスに、女盗賊は一層嬉しそうな笑顔を向け、

「何、って、そんなの、決まってるじゃないか。お金だよ、お金」

と言った。

「え？何だって」

ロルスは、よく聞こえなかった、と言わんばかりに聞き返した。

「有り金全部出しな、って言ってたんだよ」

そう言いながら、女は右手を揺らして見せた。

「そもそも盗賊に囲まれた旅人はお金を置いて行くって決まりなんだけどね。その上、あたしたちは命の恩人でもある。本当ならかつさらっていった南の大陸の奴隷商人にでも売り飛ばさないと割に合わないんだよ」

お頭は笑顔を絶やさなかったが、彼女の手下たちは怪しく目を光らせていた。

「でも安心しな、奴隷商人と取引するのも意味もなく人を殺すのもあたしの主義に反する。あんたたちがおとなしく金貨の詰まった袋を置いていってくればさらったたり傷つけたりする必要もない。」

さあ、魔道士さん、金貨を出してもらおうか」

女盗賊の良く通る声はロルスとエミールの耳をつんざいただけでなく、心にまで動揺を与えた。

ロルスの傍らで、エミールはうつむいて唇を噛んでいた。もはや降参寸前、といったところだ。後一押しされれば金貨を差し出してしまっだろう。

ロルスは良いとは言えない頭を回転させ、豊富とは言えない知恵を搾り出そうとした。

「お、おまえたち、義賊だろう。義賊なら義賊らしく悪徳商人とか高利貸しを狙ったらどうなんだ」

剣士の口から出てきた言葉は女盗賊の神経を逆撫でただけだった。

「誰が義賊だつて？ふん、笑わせるねえ。大方、スコスの警士どもが取り締まりの手を抜くためにでっち上げた噂話だろう。いつものことさ。そんな作り話を信じ込むとはあんたたちもめでたい奴らだよ。そんなお人好しが大金を持ち歩くななんて危なっかしくてしょうがないてもんだ。他の誰かに盗られる前にこのカラー様がいただいてやるから感謝しな」

女盗賊は槍を右手に持ちかえ、その刃をロルスたちの方に向けた。

それでもロルスは無駄なあがきをやめなかった。動揺のためほとんど正常に働かない頭脳にあらん限りの血液を注ぎ込んで無理矢理回転させようとした。

こういう場合、ハーデイスの英雄ならどうするだろうか。読んだ本に詳しくは書かれていなかったが、確か英雄は窮地に立たされた時、剣よりも知略で切り抜けることが多かったと言う。そうだが、知略だ。この頭で考えるんだ。包囲を破って逃げ出すか？盗賊たちをうち負かすか？さもなければ言いくるめるか？しかし、俺が未来の英雄だから、という論法はさつき使ってみたが、どういうわけか通用しなかった。何か別の言い方のほうがよいのだろうか

そうしている間にも、女盗賊の持つ槍の刃先は少しずつ魔道士の喉元に近づいていった。

「ほら、早くしな」

女盗賊は更に言葉でも促した。

エミールが手をマントの下に潜り込ませたのを見た瞬間、ロルスの脳に過剰な血液が流れ込み、正常な判断力を完全に失わしめた。彼の意志に反して口が開き、声が出た。

「俺は……」

剣士になつとした目つきで見つめられて、女盗賊は眉をひそめた。

「俺はおまえを愛してる」

その場に居合わせたものは、エミールを含め全員、目が点になった。

雨は夕方ばらばらと降っただけですぐに止んだ。

日が沈むと急激に空気の冷たさが増すのは多分、この森が小高い山地の上にあるためだろう。

地面はまだ少し濡れていたが、人々はそんなことはお構いなしに地表に出た木の根の上や枯れ草の上に直接腰を下ろし、焚火を囲んで酒を酌み交わしていた。

大木の根元にちよつとした上座<sup>かみざ</sup>があつて、ロルスはその傍らで照れ臭そうに後ろ頭を掻き、エミールは杯を手にしてうつ向いていた。

「愛してる、なんて言われたのは生まれて初めてだ」

上座にどつかと座り込んだ女は呆れているような喜んでいるような複雑な表情でロルスたちを見つめていた。

「まったく何て奴だ。確かロルスって言ったね、おまえのクソ度胸には百戦錬磨のこのあたしもお手上げだよ」

酒が入ったせいか、女は昼間より一層大きく声を響かせている。

もつとも、ロルスに思いがけず愛を告白されて一瞬ア然となった彼女が我に帰ったとき発した笑い声はそれより遥かに大きかった。

しばらく笑い続けた末、彼女は面白がって、ロルスとエミールを森の奥深くにある盗賊たちの根城に連れて行くよう手下に命じた。

最初訳がわからず当惑していたロルスたちも手下たちに丁重にもてなされているうちに、次第に自分たちは客人として招かれたのだと理解するようになった。

夕方ごろどこかへ出かけたお頭が日没近くになって戻って来ると、すぐさま宴会が準備され、日が沈むや否や酒樽の栓が抜かれたのだった。

「しかも旅の目的は、伝説の女救世主を見つけるため、だって。英雄になるため、だって」

お頭はそう言って手下の盗賊たちの笑いを誘った。

ロルスは木の実のジュースの入った杯を持ったままむすつと黙りこんでしまった。自分の志がいかに崇高かを彼らに説明するのはもう諦めた。今一度説明したとしても、どうせ更なる笑い声が返ってくるだけだろう。

一方、その隣ではエミールが不安げな表情をしてちびりちびりと

ジューズをすすっていた。

そんな二人の様子を見て元気づけてあげようと思ったのか、女盗賊は空の杯に酒を注ぎ、彼らの前に差し出した。しかしロルスは、自分は未成年だ、英雄としては未成年の飲酒を認めることはできない、と言い、エミールは、魔力が下がるから、と言ってそれを断った。

手下たちはお頭が自らついた酒を断った二人に対して不満そうな声を上げたが、当のお頭は気を悪くするでもなく、相変わらず陽気な笑顔を見せていた。

「なあ、ロルス、エミール、おまえたちは先を急ぐわけじゃないんだろ？なら、ゆっくりしていきなよ。エイハンの一流ホテルほどうもないけど、ここの泊り心地だって捨てたもんじゃないんだから」

お頭はそう言いながら、数十軒も連なった掘っ立て小屋が篝火に照らし出されているのを指差した。

「ああ、そうさせてもらうぜ、お頭」

ロルスはその申し出を快諾した。しかし女盗賊はそれを聞いてちよつと変な顔をした。

「お頭って呼び方は手下があたしを呼ぶときの呼び方だ。おまえは客人なんだ。あたしの下でも上でも何でもないんだから、カーラって名前で呼んでくれればいい」

「わかったよ、カーラ」

剣士は照れ臭そうに言った。

「それにしても、カーラってすごいよな、女だてらに盗人たちのお頭だもんな。しかもその若さだ。十八と言えば俺たちと二つしか違わないってことだぜ」

「よせよ。あたしは人に褒められるのが苦手なんだ」

今度は女盗賊カーラの方が照れた。

「手下はみんな男だろ。と言うことは、もしかしてここはカーラにとってハーレムじゃないか。いや、違う。男と女の立場が逆か。こういう場合何て言うんだろう。ま、とにかく、いい男寄り取り見取りってとこだよな」

ロルスが明るく言ったのにカーラは表情を曇らせた。

「ここにはあたしの相手が務まるような男はいないよ……」

「へえ。じゃあ、どこかにいるんだな、おまえの相手が」

剣士の罪のない一言に盗賊たちは敏感に反応した。四十もの瞳が一斉に彼を咎めるような視線を送ってきた。

カーラのほうはどういうわけか、うつ向いてうつそりと微笑んでいた。彼女がこんな弱々しい笑顔をロルスたちに見せたのは初めてだった。

「あたしが好きだった男は少し前までこの『闇の狐』のお頭だった奴さ。そう、惚れる相手としては悪くなかった。いつもあたしの前



を歩いてぐいぐい引つ張っていつてくれる、彼のそんな行動力に惹かれたんだ。でもね、お頭として人の上に立つ者には無謀な行動力より慎重な判断力が必要なんだよ。彼が、エイハンの軍隊の荷駄を襲う、って言いだしたときだって、あたしたちは反対したのに、お頭の命令だ、の一言で押し切られた。結局、カルロとワートルが荷駄を護衛する騎士に切り殺されて銀貨の一枚も盗れずにここへ引き上げる事になったんだけど、それ以来、手下の心は彼から離れていたのさ。そしてあたしの心もね。あたしみたいな女が新しいお頭に選ばれたことを彼が認めようとしなかったのはきつとプライドが傷ついたからだと思う。そのうち彼は数人の手下を連れてここを去っていったってわけだ」

「それは昼間、僕たちを襲った盗賊のリーダーのことでしょ。ドークとか言う」

それまで黙りこくっていたエミールがぼそつと呟いた。

カーラは無言でうなずいた。

彼女の寂しげな表情を少しでも和らげてあげようと、ロルスは明るい顔をして

「でも、やっぱりカーラはすごいよ。お頭になって当然って気がする。手下には慕われているし、槍の腕も立つみたいだし。体も大きいからきつと力も強いんだろ」

と言った。

するとカーラは少し元気を取り戻し、子供がすねるように口を尖らせて見せた。

「体が大きいとか力が強いとかいうのは女を褒める言葉じゃない。あたしだってこんな体に生まれたくはなかったさ。できることならもっと可愛らしいお姫様みたいな体になりたいよ。そう、『古代魔法』でもあればね」

「『古代魔法』？」

ロルスはきよとした顔で聞き返した。それに答えたのは横で聞いていた相棒の魔道士だった。

「『古代魔法』っていうのは今から一万年ぐらい前の人々が使っていた魔法のことだよ」

「い、一万年？」

無学な剣士は心底びっくりした様子で相棒の顔を見返した。相棒は博学な者に特有の口調で説明した。

「一万年前、八百万の神様があまねく世界を統べるようになるまで、この世にはたった一人の神様しかいなかった。そのころ、人々は地上に神様の力が届かないのをいいことに、森を焼いたり空を汚したり好き放題のことをやっていた。その上、動物や植物を自在に変化させるだけでは飽き足らず、遂には自らの肉体まで変える秘術を手に入れた。結局、他の世界に追放されていた八百万の神様が戻ってきてそれまでの神様に罰を与え、乱れていた人々の行いを正し、秘術を封印しましたとさ。それで、今の話に出てきた人の体を変化させるという秘術が……」

「『古代魔法』なんだな」

ロルスは納得した、と言わんばかりに大きくうなずいたが、エミールはもつと説明したい、という顔をしていた。

「なんでも、魔力の高い者が『古代魔法』を使えば人の背を高くしたり低くしたりするのはもちろん、若返らせたり男に子供を生ませたり背中に翼を生やして空を飛ばしたりすることもできた、って言うよ。まして動物や植物を作りかえる術なんて子供にでも使えるような低レベルの魔法だったらしい」

「ほう、そうなのか」

「この世界に棲むモンスターたちは実は一万年以上に『古代魔法』によって作られた生き物のなれの果てだ、って説もある。それに…」

最初魔道士のうんちくに感心していたロルスもいささかうんざりしてきた。話を中断させる口実をしばらく考えた末

「どれ、ちよつくら小便でもしてくるか。山の中つてのは冷えるから小便が近くなって困る」

と言つて立ち上がった。その背中に、カーラは

「あんまり遠くまで行くんじゃないよ。この近くにもたまたまモンスターが現れることがあるんだからね」

と母親のような言い方で声をかけた。ロルスは手を上げてそれに答え、暗闇の中へ消えていった。

盗人たちはまた陽気に酒を酌み交わし、笑いさんざめき始めた。戻ってきたロルスと緊張のほぐれてきたエミールもカーラと共にその輪の中に溶け込んでいった。

その後、宴会は夜更けまで続いた。

翌朝、ロルスたちが堀つ立て小屋の一つで目を覚ましたとき、外から聞こえてきたのは威勢の良い掛け声だった。

外に出てみると、昨日宴会が開かれていた広場で盗人たちがそれぞれの得意武器の練習に勤しんでいた。剣を振るう者や槍を突き出す者、斧を振り降ろす者、それに二人一組で向かい合って素手で打ち合う者もいた。

カーラはもちろん槍を手にし、木の幹を相手に突き刺す練習をしていた。ロルスたちがやってきたのに気づいた彼女たちは、客人も練習に加わるべきだ、と促した。ロルスは剣を抜き、同じく剣を持つ盗人との練習試合に挑んだが、何度戦っても勝つことはできなかった。そんな相棒の健闘を、エミールは広場の片隅でじっと見守るだけだった。

朝食の後、盗人の一部は情報を集めに街道の方へ出かけ、残りは

洗濯、掃除などの雑務に取りかかった。カーラはロルスたちを連れて森の中を歩き回り、珍しい場所に案内したり木の実やきのこを採取したりした。

午後はめいめいのんびりと過ごした。昼寝をしたりする者も中にはいたが一番多いのはやはりカードゲームに興じる者だった。ロルスは、剣の汚名をカードで晴らす、とばかりエミールから賭け金を借りてゲームに参加したものの、勝ったのは最初の数ゲームで後は連敗を重ねるだけだった。相棒に更なる借金を申し込まれてもエミールは頑として受け付けなかった。

宴会が開かれた前日とは違い、その日の夕食は簡単なものだった。それに、よく見れば盗人たちの人数が足りない。不思議に思ったエミールがカーラに尋ねると、彼女は少し言いにくそうに「奴らも男だからね、女の肌が恋しくなるんだよ」と説明した。エミールはそれを聞いて顔を真っ赤にし、口ごもってしまったが、ロルスは悪戯っぽく「じゃあ、カーラもたまに町へ出かけて男をあさるのか」などと質問したため彼女にぶん殴られた。

頭のこぶを手で抑えながら、ロルスは「ここのみんなは意外とのんびりした暮らしをしているんだな」と素直に感想を述べた。カーラは「金を持っていそうな旅人が街道を通れば追いはぎに行くけど、今日みたいにめばしい獲物がいないときはのんびりゆったり過ごすのさ」と応えた。そして彼女は

「ここでの暮らしが気に入ったのならずっとここにいればいい」

と言って少年の瞳を覗き込んだ。するとロルスはきっぱり

「俺は女救世主を探さなければならない」

と言い放った。

カーラは真面目な顔で、そうだったね、と呟いたきり、黙り込んでしまった。

カーラにそのように言い放ったにもかかわらず、ロルスは翌日もその翌日にも救世主探しの旅を再開しようとはしなかった。

エミールは心配になって、彼にいつまでここにいるつもりなのか尋ねたが、はつきりした答えは返ってこなかった。

確かなのはロルスが盗人たちとすっかりうち溶け合っているということだった。

エミールは以前から、ロルスはほとんど人見知りしない人間だ、と思っていた。だから最初は、彼がここの人々とすぐ親しくなれたのも誰にでも話しかけられるその性格のせいだろうと考えた。しかし、よく見てみるとむしろ盗賊たちが彼に話しかけることのほうが多かった。会話の中心にいるのはいつも彼だった。

故郷ではロルスの立場が両親や兄や村の年長者の下にあったため

わからなかったが、どうやら彼には人を惹きつける能力があるようだ。エミールは今までそれを単なる人懐っこさだと思っていたのだった。

このことを知ったとき、エミールの心配はますます大きくなった。このままではロルスがここを離れたくてもこの人々が彼を離さなくなってしまう。本当に『闇の狐』の一員になってしまう。

エミールのそんな心配をよそに、滞在四日目の朝、大金を持った商人が街道を通る、という情報が盗賊たちの根城にもたらされ、カーラは手下を率いて出陣の支度を始めた。

俺も連れていってくれ、というロルスの言葉に、カーラは意外にも首を縦には振らず、

「一度盗みに手を染めたら騎士の神様になかなかご加護をいただけなくなる。おまえは剣士としての腕を磨いてまず騎士に、そしていずれは聖騎士にならないといけない。昔から英雄と言えば聖騎士と相場は決まってるだろ」

と言ってウィンクして見せただけだった。

お頭に拒まれては無理に参加するわけにもいかない。勝手な行動は盗賊団のチームワークを乱すことになる。ロルスたちは根城に留まって果報を待つしかなかった。

果たして、カーラたちの仕事は成功を収めた。彼女たちにほとんど被害はなく、相手に傷を負わせることもなく、大量の金貨を手に入れることができたのだった。

その夜、四日ぶりに宴会が催された。しかも久々の大漁とあつて、盗賊たちはすっかり羽目を外し、それこそ浴びるように酒を飲んだ。

さすがのロルスも少し元気がなかった。盗みに加わらなかった自分が浮いた存在のように思えたのだ。盗人たちの満足そうな顔を見ているうち、ふと彼の心の中に、俺も盗人の神のご加護を求めようかな、という考えがよぎった。

そのとき、暗闇の中から突然人影が現れた。



「誰だ」

それまで上機嫌そのものだったカーラは表情を一変させ、篝火に照らし出された人影を睨みつけた。

すると人影はゆっくりとした足取りでカーラの前に歩み出た。

彼女の傍らでうつ向いていたロルスとそんな相棒の様子を心配そうに見つめていたエミールは目を上げ、その人影に注目した。他の盗人たちのうちまだ酔い潰れていなかった者も力のない目つきで彼を見やった。

「ユフスカ」

カーラはその人影をそう呼んだ。

ロルスとエミールはその人物のしゃくれた顎に見覚えがあった。三日前、街道で最初に四人の盗人がロルスたちを取り囲んだとき、前方に立ちふさがって金を出せと言ったのが確かこの男だったはずだ。

ユسفと呼ばれた男は悲愴な面持ちでカーラのすぐ前まで近づき、がつくりと膝をついた。

「お頭を、ドークを助けてやってくれ」

それはやはりロルスたちの知っているだみ声だった。

「ドークがどうかしたのか」

カーラは感情のこもらない声で言った。

ユスフは地面に座り込んで背中を丸め、ぼそぼそ話し始めた。

ちょうどひと月前、ある男がドークのもとを訪れ、話しがしたいと言って彼を人気のないところへ連れて行った。話しを終えて帰って来たドークに訪ねたところ、その男に「大きな仕事」を持ちかけられたとのことだった。ユスフが更に説明を求めるとドークは「今は詳しく言えない。その仕事は多額の報酬が約束されているものの、盗人本来の仕事、つまり盗みではない。引き受けるかどうか回答するのはひと月後だが、まだ迷っている」と答えた。

それが三日前、魔道士から大量の金貨を奪う機会をカーラたちに潰されて、ついに彼は引き受けることを決心した。そして例の男が今日、再び訪ねてきたときにドークはその旨を伝えた。ユスフはさつき、ドークからその仕事の内容を聞かされ、猛反対した。そのため彼の盗賊仲間を追放になり、こうやって元の仲間のところに戻ってきたのだという。

「で、それはどんな仕事なんだい」

カーラはあくまで冷静だった。

「それがとんでもない話なんだ。エイハンの公爵が乗った馬車を襲え、だって。そんなこと言われても、俺たち盗人にうまくできるはずがねえじゃねえか。そうだと、カーラ。じゃなくて、お頭」

ユスフは手をもみしだいて訴えかけた。

「なるほど。ジャック・バラン公の暗殺、ってわけか」

カーラの表情はほとんど変わらなかった。

「大方、デイルスの連中、いくさにけりがつかないものだから短気を起こしたんだろうさ。ドークの奴にその仕事を頼んできた男つてのもきつとデイルスの手の者だね」

「いくさにけりがつかないのでエイハンの公爵を殺す、とはどういうことだ」

横からロルスが口を挟んだ。ユスフは彼を見て、どうしてこいつがここにいるんだ、という顔をしたが、何も言わなかった。

「そりゃあ、バラン公が反デイルス派の諸候の中で一番有力な領主様だからさ。それにエイハンには前の王様のいここにあたる方がいらして、ホムスの正当な王だと主張しておられる。バラン公はその後ろ盾つてことだね」

カーラがホムスの国内情勢をよく知っていることに驚きを感じながら、エミールは

「でもどうしてドークなんかに頼んだんだろう」

と呟いた。

「街道で馬車を襲うとなれば地理に詳しい者に頼むのが一番さ。あたしたちはスコスとエイハンの間なら森の中から町の路地まで知り

尽くしている」

カーラはそう言って少しだけ表情を和らげた。

「だけど、ドークに白羽の矢が立つたつてのは驚きだ。あいつ、そんなに腕の立つ盗人なのか。結構有名なんだな」

ロルスは感心しながら言った。しかしユスフは悲しげな笑顔を浮かべ、

「この辺りで有名なのは『闇の狐』だけだ。その仕事を頼んできた奴は多分『闇の狐』の評判を聞きつけてそこのお頭を訪ねるつもりが、ドークががまだお頭だと勘違いしてうちに来ちまったんだと思う」

と言った。その言葉にカーラは肩をすくめ、

「ま、なんにせよ、あたしたちには関係ないね。『闇の狐』を追放された者がどこでどうなろうと知ったことじゃない。どうせ公爵の馬車を護衛するエイハンの精鋭騎士に切り殺されるのが関の山さ」

と冷たく言い放った。

「そりやないぜ、カーラ。ドークはこの間までカーラの、いや、お頭の男だったんじゃないか。おまえから言ってやってくれよ。手下が三人しかいないドークに一体何ができるんだつて。かりに二十人いたつて本職の騎士にはかないつこねえんだつて。きつとおまえの言つことなら聞くはずだ。」

お願いだ、奴をとめてくれ。助けてやってくれ」

ユスフは泣きそうな声で懇願した。それでもカーラは

「いやなこった」

と首を振るだけだった。

エミールの目には、カーラはわざと冷たく振る舞っているだけのように見えた。彼女は本当はドークのことが心配なんじゃないか。そんなふうにも思えた。

一方、ロルスは全く別のことを考えていた。

「おい、おっさん、ドークは balan 公をいつ、どこで襲うつもりだ」

彼の言葉が向けられた先はユスフだった。

「誰がおっさんだ。俺はまだ二十二だ」

ユスフは顔を引きつらせてロルスを睨んだ。

「そんなことはどうでもいい。ドークの野郎はもう襲撃地点に向かったのか。balan 公の馬車はどこを通ることになっている。教えろ」

「おまえがそんなことを知ってどうする」

「俺がドークの計画を止めてやる」

ロルスの言葉はエミールにとってもカーラにとってもまさに晴天の霹靂だった。

「何だって」

とエミールが叫ぶと、カーラも

「ど、どういっつもりなんだい」

と言って目を丸くした。

ユスフは一瞬口ごもったがすぐに馬鹿にしたような顔で

「笑わせるな。おまえに何ができる。この前、俺たちに取り囲まれて震えてたくせに」

と言った。それに対し、ロルスは不敵な笑顔で

「ドークに襲われる前に、 balan 公に知らせればいい。そうすれば馬車の通る道を他に変えるか、時をずらすかするだろう」

と答えた。

「それは無理だ。今からエイハンに知らせようとすれば普通三日はかかる。襲撃は二日後、しかもその場所はリゴスの森だ。そこへ行くにも二日かかる。それにドークはもう出発しちまった」

「ということは、公に知らせるにしてもドークの方を止めるにしても今からその森へ向かわないと間に合わないってことだよな」

そう言って、ロルスはいきなり立ち上がり、

「行くぞ、エミール。 balan公を助けする。公が死んだらこのホムスは終わりだ。相手がたとえ盗人でも万が一ってことがある。ドークだって何か手を考えているだろう」

と相棒を促した。するとエミールは

「どうして僕たちがそんなことやらないといけないの？前も言ったけど、デイルスが勝とうと反デイルス諸侯が勝とうと僕たちには関係のないことなんだよ」

と訴えてロルスの腕を引っ張った。

さっきまで冷静を装っていたカーラも今やエミール以上に狼狽していた。

「馬鹿なことはやめなよ、ロルス。ドークは一つのことしか目に入らない人間だって言っただろ。とめようとしたりしたらきつと殺される。行くなよ、ロルス。ここに残ってくれ」

カーラの必死の懇願に、ロルスは凜々しい笑顔で答えた。

「大丈夫だ。とにかく、ドークたちより先にbalan公と接触してしまえばいいんだ。そのためには一刻も早くここを発たなければ……おい、エミール、さっさとしろ」

ロルスは逆にエミールの手を引っ張って荷物の置いてある小屋に連れて行こうとした。エミールは少しだけ抵抗したが、結局ロルスの強引さに押し切られた。

「ちょっと、ロルス」

というカーラの言葉を無視して、ロルスは相棒と共に宴会広場をあとにし、堀っ立て小屋で荷物をまとめて一分も経たないうちに戻って来た。そして「闇の狐」の面々に

「色々世話になった。ありがとう。次に来ることがあったら、また宴会でも開いて歓迎してくれ。じゃあな」

と別れを告げた。

ロルスたちの行動があまりにも唐突だったので、カーラはただ呆然と見守ることしかできなかった。

剣士と魔道士の姿が暗やみに消えた途端、カーラの中に何とも言えない複雑な思いが込み上げてきて、胸を締めつけた。

ロルスとエミールはエイハン街道に出て進路を北西にとった。

月のない夜だったが、空はよく晴れており、満天の星空から降り注ぐ光が彼らの行く街道をはっきりと照らし出していた。

道中、エミールは何度も、バラン公救出など無意味なことだし、



どうせドークごときでは精鋭騎士に歯が立たない、と説明した。しかしロルスは聞き入れないばかりか、逆に、ドークを実力で阻止することになれば攻撃魔法が必要だ、と言ってエミールに頼ってくる始末だった。相棒にそこまで言われては、エミールも協力せざるを得なかった。

ロルスとしては、エイハンになるべく近いところで balan 公と会うために昼夜を徹してでも歩き続けたかったのだが、いかんせん普段鍛えていないエミールの体力が十分ではなかった。盗賊の根城を発ったその夜から翌日の日中はなんとかもったものの、夕方には完全にまいってしまった。

仕方なく、ロルスはトオという手近の宿場町で宿を取り、相棒を寝かせた。ついでに情報を得るために宿屋の主人に話しかけてみた。

「リゴスの森まであとどれくらいかかる？」

「明日の朝ここを発てば森の入り口に差しかかるのは昼ごろだな」

それを聞いてロルスは考えた。balan 公の馬車が明日のいつ森を通ることになっているのかはわからないが、夜明けにエイハンを出るとすると、多分午後には森に達するだろう。ということはロルスたちが明日の夜明けまでに森に入って街道を進んで行けば昼ごろには森の向こう側で balan 公に会える可能性が高い。

それからロルスは宿で少し仮眠をとった。そして真夜中にベッドを出てエミールを叩き起こし、軽く夜食を口にした後、宿屋をあとにした。幸い、昨日に続いて今日も雲一つない夜空だったため、月がなくても街道を行くことができた。しかしエミールはまだ疲れが取れておらず、なかなか歩行のペースが上がらなかった。

それでもどうにか夜明けごろにリゴスの森にたどり着いた。二人は小高い丘の上に発ってエイハンの方向を見渡してみた。

「何てこった。リゴスの森ってこんなに広いのか」

ロルスが驚きの声を上げた。

「森がエイハンの町の近くまで延々と続いている」

エミールはそう言ってその場にへたり込んでしまった。

「くそつ。これでは森を抜けるころには昼過ぎか、下手をすると夕方になるぞ。それに、もしドークがエイハンに近い場所を襲撃地点に選べば午前中にでも馬車と接触してしまう」

ロルスは悔しさを噛みしめながら、疲労困憊の相棒に指示した。

「とにかく急がねばならない。俺は先に行くから、おまえはできるだけ速く俺の後を追いかけてくれ」

「……わかった」

エミールは力なくうなずいた。

再び歩き始めたロルスの足取りはこの二日間に四、五時間しか寝ていないとは思えないほどスムーズだった。エミールが重たい足を引きずるようにしてやっと十歩ほど歩く間にロルスの姿はもう森の木々の向こうへ隠れてしまった。

ロルスは歩きながら辺りの様子を観察した。道に起伏はほとんどなかったが、大きな木を避けるように何度も曲がりくねっているため街道を進む者にとっては見通しが悪かった。もちろん、木に登ればかなり遠くまで見渡すことができるだろう。馬車が近づいてくることをかなり前に察知できるに違いない。つまり待ち伏せをする側にとってこれほど都合の良い場所はない、ということになる。

もしかしたらあの木の向こうにドークが隠れているのでは。あの曲がり道で盗賊たちが待ち構えているのでは。待ち伏せができそうな地点を見つけるたびにロルスは神経を擦り減らした。

馬車の近づいてくる音が聞こえてくると、今度は耳の神経を研ぎ澄まさなければならなかった。しかし、さっき聞こえてきた車の音は農夫が作物を運ぶ小さなシャレット（二輪馬車）のもので、今通り過ぎた古ぼけた車は商人のヴォワチュール（荷馬車）だった。

そうやって、三時間が過ぎ、四時間が過ぎて行くと、だんだんと肉体的にも神経的にも疲れがたまり、ロルスの感覚は鈍ってきた。それでも彼は足を止めることはなかった。吹き出す汗を拭うのも水筒の水を飲むのも物を食べるのも歩いたままだった。

そして、太陽がほとんど真南まで上り詰めたとき、三たび、車輪が地面を転がる音が森の中に響き渡った。

その音は地響きを思わせるほど重々しい音色だったが、古ぼけたヴォワチュールがたてるけたたましい車輪音とは違い、滑らかな、音楽的な調べだった。人の乗るための馬車、それも大型のシャリオ（四輪馬車）が近づいてくる音と思われた。

ロルスは歩を速めた。彼が馬車を視認するのを阻むかのように道

は曲がりくねり、木の枝は路上にせり出していた。カーブを曲がれど曲がれど目の前に現れるのは新たなカーブばかりで、シャリオの影すら見えてこなかった。

いくつものカーブを曲がった末、遂にすぐそばに車の音が聞こえるところまで来た。きつとこのカーブを曲がればシャリオが見えるはずだ　　ロルスは目を凝らしながら道沿いに左へ曲がった。

見えた。四頭の馬に引かれて走るシャリオの車体が日光をはねかえして白く輝いている。その傍らには騎士を乗せた馬が二頭、つき従っている。 balan公の馬車に違いない　　ロルスは踊りだしたい気分だった。二日間、この光景だけを思い描いて歩き続けてきた彼の苦勞が今報われようとしていた。

その瞬間。

彼の頭上で、ざわつ、という音が聞こえたかと思うと、森の太木が一本倒れてきて街道の上に横たわった。

すぐそばまで走ってきていたシャリオは急に止まることはできず、四頭の馬たちは、太い木の幹に体当たりすることとなった。騎士の乗る馬も一頭は辛うじて幹に乗り上げることができたが、もう一頭は真正面から幹にぶつかり、背中の騎士を遙か遠くにまで投げ出してしまった。

続いて、シャリオの向こう側でも葉が風になびくような音がし、木が路上に倒れ落ちた。

今や馬車と馬たちは前後を木で塞がれ、進むことも退くこともできない状態になった。しかも馬車を引いていた四頭の馬と騎士を投

げ出した一頭は大怪我を負い、ほとんど死にかけていた。投げ出された騎士の方も頭を強く打ったらしく、地面につつ伏したまま動かず、馬車を制していた兵も意識がないようだった。

そして残された退路、すなわち右側と左側に立ちはだかったのは四つの人影だった。

ロルスはとつさに木の影に身を隠し、彼らの様子を伺った。

彼らは皆簡単な服装をし、顔の目から下の部分を布で覆っていた。うち三人は胸の前に短剣を構え、背の高いもう一人は普通の長剣を右手に握っていた。

木の幹の上に乗り上げた騎士と四人の賊はお互いを値踏みするかのようにしばし睨み合った。

「何奴」

騎士の問いかけに賊たちは答えず、代わりに彼らの一人が馬車のそばに歩み寄り、カーテンの降ろされた窓の中を透かし見ようとした。

「何をする」

と叫びながら、騎士は馬を飛び降り、剣を抜いた。

たちまち他の三人の賊が彼を取り囲んだ。騎士は一瞬動きを止めただけで、抜いた勢いにまかせてそのまま剣を振りかぶり、馬車を覗く男の方へ突進していった。すると背の高い賊が剣を構えて騎士の行く手に立ちふさがり、馬車への接近を阻もうとした。騎士はそ

れでもひるむことなく、その剣を相手の剣目掛けて突き出した。

二人の剣は金属のぶつかり合う冷たい音を発し、次に擦れ合うきりきりとした音を立てた。

つば競り合いを演じたのは、しかしほんの二、三秒だけだった。

騎士の腕力は賊の手から剣をあつさりとは払い落とすほどのものだった。騎士は無防備になった賊には目もくれず、馬車の扉をこじ開けようと努力している賊に渾身の力を込めて剣を振り降ろした。賊は慌ててその場を跳び退き、辛うじて剣をかわした。

剣を払われた賊はその間に拾い上げ、今馬車のそばを離れた賊にあと二人の賊を加えて全員で騎士を再包囲した。騎士は馬車の扉に背中をくつつけて剣を構え、何人足りとも近づけるものか、という態度を見せた。

賊の一人が今度は扉のない側に回り短剣で窓を割ろうと試みた。すると騎士はまたも簡単に他の三人の包囲を破り、素早く反対側に回り込んでその賊を撃退した。

彼らの攻防をずっと陰で見守っていたロルスは騎士の強さに感服した。これなら今すぐに馬車の中の人物が賊の手にかかるということはないだろう。とは言え、それも時間の問題だ。そうこうしている間に、騎士の体力は少しずつ消耗してゆき、賊の動きに機敏に対応できなくなってきた。

ロルスは後ろを振り返った。当然ながら、木が邪魔をして相棒の魔道士が来ているのかどうかなどわかるはずもなかった。

騎士に加勢しよう　彼は決心した。

再度賊たちの様子を見極めたロルスは、今なら賊の不意を打てそうだ、という判断を下した。まず剣を抜き、木陰に身を隠しながら森伝いにシャリオの方へ近寄った。できるだけ賊たちに近い幹のところで一旦立ち止まり、もう一度敵情を偵察する。動きの鈍くなつた騎士は三人の敵を相手にするのがやつとだ。四人目は馬車に取り付き、もう間もなく窓ガラスを割ってしまいそうだった。

ロルスの手が剣を強く握りしめた。彼はシャリオの窓を壊そうとしている賊に狙いを絞り、タイミングを見計らって今まさに足を踏み出そうとしていた。

とんとん。

と彼の肩を何かが叩いた。

ロルスは不思議に思つて後ろを振り返った。

そこには見覚えのある顔が微笑んでいた。

「カーラ？」

ロルスは死ぬほどびっくりして思わず叫び出しそうになった。

「しっ」

カーラは慌ててロルスの口を抑え、

「馬鹿だね。おまえは今、不意を打とうとしてたんだろ。せつかく

奴らが騎士と馬車の方に気を取られているって言うのに声なんか出して気づかれたら台なしになるじゃないか」

と言ってから、そっと手を離れた。

「どうしてカーラがここにいるんだ」

手が離れた途端、ロルスの口から驚きの声が上がった。

「あたしは balan 公がどうなるうと知ったことじゃない。けど、ドークは元仕事仲間で、元恋人だ。やっぱり放っては置けないよ」

カーラはそう言っで、感心したように腕を組んだ。

「心配になって来てみたんだけど、ドークの奴、結構うまくやっているじゃないか。無駄足だったかな」

「おい、balan 公が奴の手にかかって死ぬのをこのまま黙って見過ごすつもりか」

ロルスはむっとなつて言った。

「balan 公はちゃんとお助けするよ。なんたつてあたしが生まれ育つたこの土地の領主様だからね。助けてあげれば褒美ぐらいもらえるだろう。それにドークが公爵暗殺のかどでこのままおたずねものになってしまうのもかわいそうだし」

そう言いながら、カーラはロルスにうなずいて見せ、それから後ろを振り返って



「おい、おまえたち」

と森の奥に向かって声をかけた。すると、一本の木の陰から二、三人ずつ、合わせて二十人ほどの盗賊が姿を現した。その中にはエミールの疲れ顔とユスフのしゃくれ顔もあった。

「みんな来てたのか」

ロルスは男たちの顔を見回しながら言った。

「でも、よく間に合ったな。一昨日の夜、あんなに酔っ払ってたのに」

「俺たちはこの辺りの地理を知り尽くしている。まっすぐ街道を進むよりもずっと早くここに来られる抜け道があるのさ」

ユスフは醜く微笑みながら言った。

「途中でカーラたちと会って一緒に抜け道を来たんだ。街道沿いに歩いていたら僕はこんなに早くここに着かなかったらう」

エミールは疲れ切った表情を何とか笑顔にこしらえて言った。

カーラは手下たちに目配せをしてから、まずシャリオの方に目を移し、状況を再確認した。次に右手を上げ、それを振り下ろして合図した。

「いくよ」

その途端、すべての盗賊たちは素早く、静かに木の陰から街道の方へ飛び出した。ばらまいた砂鉄を磁石で引き寄せるかのごとく、彼らは一旦街道上に大きく散開し、すぐさま馬車の周りを取り囲んだ。ほんの一瞬の出来事だった。経験に裏打ちされたその巧みな連動は全く見事と言っほかなかった。

騎士をあと一歩のところまで追い詰めていた賊たちが気づいたときにはすでに自分たちが袋の鼠だった。カーラの手下たちが構えた剣や槍の刃、弓に込められた矢の矢尻が四方から彼らを睨んでいた。背の高い賊は自分の前にいる騎士に剣を向けたまま、首をひねって周囲を見回した。彼の目は、周囲の輪を作っている男たちの向こうからゆっくりと歩み寄って来る三つの人影をとらえた。

「カーラか」

彼はそう言って、口を覆う布を取り去った。

カーラとその傍らにつき従うロルス、エミールはその賊から数歩離れたところで立ち止まった。

「ドーク、剣を納める。おまえがおとなしくこの場を立ち去るなら、俺たちは追いかけてりしない」

口を開いたのはロルスだった。

「そういうこと。多勢に無勢、ここは諦めるのが得策だよ」

カーラは言い足した。

するとドークは悔しさに顔を引きつらせた。

「どうして邪魔をする。この仕事をやり遂げれば俺は一流になれるんだ。そうすれば、手下どもも俺のところに戻ってくれる。」

それにカーラ、おまえだって俺のことを見直すだろう。そうさ、俺は以前のようにおまえを引っ張って行ける人間に戻りたいんだ。そのためにこの仕事を引き受けたんだ。これはお前のためなんだ」

「ドーク……」

かつての恋人に求めるような目で見つめられて恋する乙女に戻った気分になったのか、カーラはほんの一瞬だけ隙を見せた。

そこへ、一本の短剣が飛んできた。

「カーラ、危ない！」

ロルスは手にした剣でそれを払いのけた。

見ると、先ほどまで馬車の反対側で窓を割ろうとしていた賊が車体の陰で悔しそうな顔をしていた。恐らく彼が短剣を投げたのだらう。

たちまちのうちにカーラの手下の弓使いが矢を放ち、彼の腕を射抜いた。彼は痛そうに腕を抑え、その場にしゃがみ込んだ。

「ありがとう、ロルス」

カーラは今度はロルスに、恋する乙女のような眼差しを向けた。

ロルスは微笑みでそれに応えた後、ドークとその傍らの賊二人に鋭い目つきで睨みつけた。二人の賊は短剣を捨てたが、ドークは剣を握ったまま唇を噛みしめた。その表情は悔しさと自分に対する歯痒さを同時に表現していた。

その次の瞬間、彼の表情は苦痛に引き歪んだ。馬車を守っていた騎士が彼の左胸を刺し貫いたのだった。

「ドーク！」

カーラはすぐさま彼のもとに駆け寄った。

騎士が剣を抜き取ると、ドークの体はカーラの方に倒れた。彼女はそれを受け取り、そっと抱きしめた。

かつての恋人の腕の中で、ドークはほんの少し微笑んでから目を閉じた。

エミールがその傍らに歩み寄り、彼を診<sup>み</sup>た。

「だめだ。もう息がない」

魔道士は首を横に振って見せた。

カーラはドークの死体を地面の上に置き、

「馬鹿な男」

と、驚くほど冷静な口調で呟いた。

ドークを刺した騎士は剣を納め、馬車の扉を少しだけ開いて中に声をかけた。

すると扉が大きく開かれ、中からゆつくりと、口髭をたくわえた恰幅の良い中年男性が姿を現した。彼の身につけている物はロルスたちが本の挿絵でしか見たことのない王侯貴族の装束だった。

彼は盗賊たちをしげしげと眺めながら、

「助けてくれてありがとう。君たちは一体何物だ」

と穏やかな声色で言葉をかけた。

「俺たちは『闇の狐』。盗賊団だ」

ロルスはきつぱりと答えた。

どういうわけか、カーラもその手下たちもロルスが自分を含めて「俺たち」と言ったことに違和感を覚えなかった。

「ほう。あの有名な」

男は目を見張った。

「しかし、盗賊がなぜ私の命を助けたりしたのだ」

「俺はデイルスの奴らをこのホムスから追い出したい。そのためには今あんに死なれては困る」

ロルスは相手が高貴な人物だということに全く臆することなく言った。

「なるほど。と言うことは君たちはこの私がエイハンの公爵だということも知っているのだな」

男は一瞬、無表情になったが、すぐ元の穏やかな顔に戻った。

「君たちに礼をしたいところだが、あいにく馬車が壊れてしまつて、先へ進むこともエイハンに戻ることもできない。すまないが、君たちのうちの誰かがエイハンへ行つて私が襲われたことを知らせて来てくれないか」

「それなら大丈夫だ。ほら」

カーラはそう言つて、街道の北の方を指差した。馬車がすごい勢いで走つて来る音が聞こえる。

「手下の一人をエイハンに向かわせておいた。公爵様の危機を伝えるためにね。あれはきつと公爵様をお迎えに来た馬車の音だよ」

女盗賊の説明に公爵は感心した様子で

「なかなか手際が良いな、君たちは」

と言つた。

ジャック・バラン公は馬車と共に迎えに来た騎士隊の隊長に事情を話し、ロルスたちをエイハンへ連れて行くよう命じた。そして自らは慌ただしく馬車に乗り込み、六名の騎士を護衛に従えて南の方へ去って行った。

隊長は降伏した三人の賊にドークの死体を棺に入れ、担いで行くと言った。その周りには剣を手にした四人の騎士がつき従った。

ロルスとエミール、それに「闇の狐」の面々は残りの五名の騎士の先導に従って街道をぶらぶらと北の方向へ歩いて行った。

道中、隊長は馬上から何度もロルスに話しかけてはバラン公救出の手際の良さと「闇の狐」の日頃の活躍を褒めたたえた。どうやらこの盗賊団のリーダーはロルスだと勘違いしているようだった。

ロルスは面倒くさかったので彼の勘違いを訂正することはせず、代わりに盗賊の行いを褒める騎士を批判し、また公爵の護衛の少なさを指摘した。

隊長は盗賊を賞賛したことについては非を認めたが、護衛の人数に関しては「今はより多くの兵を前線に送らねばならない。それにエイハンの城に駐留する兵もほとんどが国王陛下の身边警護に回されているのだ」と反論した。その上で、ロルスの批判や指摘は的を得たものである、と再び彼を褒めたたえた。

昼過ぎ、食事を取るために一行が足を止めたとき、エミールはふとカーラが浮かない顔をしているのに気づいた。やはりドークを死

なせてしまったことにショックを受けているのだろう。彼はそう考えて、「気を落とさないで。あれはカーラのせいじゃない」と彼女に声をかけた。するとカーラは、大丈夫だよ、と言って笑顔を返してくれた。エミールがカーラと会話らしい会話を交わしたのはそれが初めてだった。

太陽が西へ傾き始めたころ、一行は森を抜け、一面に畑が広がる地域に出た。ロルスとエミールの肉体は今や疲労の極地に達していたが、遠くに西日が照らし出すエイハンの町が見えてくると、途端に元気が湧き出た。街道を進んで行くにつれ町は次第に大きくなって見え、日が沈んだときには建物の群れが前方の視界を完全に遮っていた。

町に入った、もう着いた。ロルスとエミールのその考えは甘かった。町に入ってから街路を進みエイハン宮に到着するまでさらに二十分も歩かされたのである。つい六日前に初めて村を出た彼らにとって、エイハンの町の大きさは想像を遥かに越えたものだった。

宮殿の門前で一行は二つに別れた。三人の賊は棺を担いだまま騎士にどこか別の場所へ連行され、ロルスたちは騎士隊長と共に門をくぐり、庭園の中に延びる石畳をまっすぐ進んで大きな建物の中に入った。

玄関ホールに隣接する大きな部屋で盗賊たちはしばらく待つよう命じられた。最初その部屋の豪華な調度品に見とれていたロルスとエミールは待たされているうちにふかふかの長椅子で眠り込んでしまった。

一時間も経ってやっと隊長が姿を見せ、カーラにロルスとエミールを起こして一緒に部屋を出るよう言った。なぜこの三人だけが呼



ばれたのか不思議に思いつつも、彼らは隊長に従って別の部屋へ移動した。

その小さな部屋の中央に立っていたのは騎士装束をさらりと着こなしたハンサムな男だった。

「私はバエフ・カーバインだ」

彼は名乗った。

「カーバイン子爵は balan 公の信頼厚い重臣の一人だ」

隊長が付け加えた。

カーバイン子爵は隊長と同様にロルスや「闇の狐」を繰り返し賞賛した末、残念そうに

「公爵の命をお救いくださった『英雄たち』をおもてなししたいのはやまやまだが、公爵は明日自分が戻るまで待つように、とおおせだそうだ」

と説明した。そして更に

「今日のところは私の知り合いの別荘でくつろいでほしい。少し古いが二十人あまりの人間が羽根を伸ばすには十分な広さがある。誰かにそこまで案内させよう」

と言って近習を呼び、案内を命じた。

ロルスは今度こそ、「闇の狐」のリーダーは自分ではなくカーラ

なのだと打ち明けるつもりだったのだが、「英雄」という言葉に舞い上がってしまい、結局言い出しそびれた。

ロルスたちと「闇の狐」の面々は子爵の近習に町外れの古い屋敷に連れて来られた。中に入ってみると、どうやら人が住まなくなってもう何年も経っているらしく、床や家具にはほこりが分厚く積もっていた。

それでも盗人たちにとっては贅沢な住環境だった。彼らは城持ち領主にでもなったつもりで大喜びし、早速カーラの指揮のもと、半数の者が掃除に取り掛かり、残りは夕食の食料を確保しに出かけた。

ロルスとエミールはお気に入りの部屋を選び、盗人の一人に手伝ってもらって手早くほこりを払った後、ベッドに横になった。夕食の用意ができたことをカーラが知らせに来たときには二人ともぐっすり眠り込んでいて、何度起こしても起きなかった。

翌朝、ロルスとエミールは昨日食べなかった夕食を平らげるや否や、外へ出かけ、田舎者根性丸出しで物珍しそうにエイハンの町を見物した。好奇心の塊のような二人がエイハンじゅうを見尽くして帰って来たのは夕方近くだった。

屋敷にはカーラ一人だけが残っていた。彼女が言うには「他の盗賊たちもめいめい町見物に出かけている」とのことだった。ロルスが「どうしてカーラは出かけないのか」と尋ねると彼女は「この屋敷には根城から持つて来た『闇の狐』の全財産が置いてあるので留守番が必要だ。それにあたしは何度もエイハンに来たことがあるからもう訪れたいところはないんだよ」と答えた。

「ところで」

カーラは話題を変えた。

「今晚宮殿でバラン公があたしたちのために夕食を御馳走してくださるんだって。さつきカーバイン子爵の使いが知らせに来てくれた」

それを聞いてロルスとエミールは少し驚いた。まさかバラン公自らがもてなしてくれるとは、予想もしていなかった。

夕暮れ時になると他の盗賊たちが三々五々帰って来た。カーラと古株の手下数人は「闇の狐」の財産をすべて服の下に身に付けて外出の準備を整えた。ロルスたちはみなと共に屋敷を出、エイハンの町の人々が不思議そうに見つめる中、そろそろと宮殿へ続く街路を歩いた。

宮殿に入った一行は広間に案内された。そこにはテーブルが並べられ、その上にはナプキンやフォーク、ナイフなどが置かれてあった。盗人たちはそれを見ただけで御馳走を出された気分になったのか、歓声を上げながら先を争うように椅子に腰掛けた。

ロルスは誰よりも早く着席し、エミールとカーラに自分の隣に来るよう言おうとした。ふと見ると、エミールとカーラとユスフがま

だ座っていないのに席が全部ふさがっている。ロルスが部屋に控えていた男に「椅子が三つ足りない」と訴えたところ、男は「あなたと魔道士と女性の方は席を別に設けてある」と答えた。

男に言われるまま、ロルスとエミールとカーラは隣の小広間に移った。テーブルの前にはすでに着席している者が一人いた。

「これはこれは、ようこそおいでくださいました」

と言ったその男はカーバイン子爵だった。

彼はロルスたちにまず自分の向かい側に座るよう求め、ロルスたちが着席するのを待って話を始めた。

「バルン公はもうすぐ見えられる。それと、国王陛下におかれては君たち『闇の狐』の話をお耳に入れられ、たいそう関心をお持ちあそばされた。ぜひ会いたいとおおせになっておられたので、晚餐中にお見えあそばされるかも知れない。なに、これはバルン公の私的な晩餐会だ。公式行事ではからそんなに堅苦しく考える必要はない」

彼の言葉どおり、一皿目の料理が運ばれてくるとすぐ、バルン公が現れ、晩餐に加わった。

公爵は助けてもらったことに対し重ねて礼を言い、カーバイン子爵と同様に「闇の狐」の優秀さを褒めちぎった。しかし、さすがに公爵だけあって、盗賊としての評判自体を称賛することはしなかった。その代わり、

「君たちのその手腕が国家にとって有益な方面に発揮されないのは

誠に残念だ」

と言って、意味ありげな視線をロルスに送ってきた。

そのとき、広間の入り口の扉の向こうから

「国王陛下のお出まし」

と言う声が聞こえてきた。

扉が開かれ、中に入ってきたのはロルスやエミールと同じぐらいの歳の色白の少年だった。

広間に控えていた近習たちが一斉に膝まづいた。 balan公とカーバイン子爵は食べるのをやめ、頭を垂れた。エミールとカーラもそれに習った。ロルスは不思議そうに周りを見回していた。

少年はロルスのそんな様子を見て楽しそうに微笑んだ後、上座に着いた。

「みな、楽にしてよい」

少年がか細い、頼りなげな声でそういうと、広間の一同は頭を上げた。

「そちたちが『闇の狐』とか申すならず者の集まりを率いておるのか」

エミールは少年にそう言われて初めて、カーラとロルスと自分の三人が特別扱された訳がわかった。この少年やbalan公たちはロル

スだけでなく自分まで盗賊団の幹部だと思っているようだ。

「予の想像していたのとは大分違うな。もっと野蛮そうな者たちか  
と思うておったが」

少年がそう続けると、バラン公が答えた。

「恐れながら、陛下、この者たちを普通のならず者と同じに考えて  
はなりません。彼らの行動力は我が騎士隊の精鋭一個小隊に匹敵す  
るほどでございます」

軍略家公爵のその言葉は少年王をひどく驚かせた。

ますます興味を覚えた国王は矢継ぎ早にロルスたちに質問を浴び  
せた。エミールは会話の中で何とかして、自分とロルスは盗賊団の  
幹部などではないのだ、と伝えようとしたが、会話の流れがそとい  
う方向に行かなかった。

最後に国王は「予は魔道学に少なからず関心がある。魔道士よ、  
そちはエミールとか申したな。いずれそちには魔道学の講義を頼み  
たい」と言って席を立った。

食事が終わるころ、カーバイン子爵は今一度ロルスたちに称賛の  
言葉を贈った。その言葉尻を捕らえて、バラン公は

「先程も言ったが君たちの能力は盗賊行為以外のもっと有益な方面  
に使われてしかるべきだ」

と言い、再びロルスたちを特別な意味の込められた目つきで眺め  
た。

「実はな、我ら反デイルス諸侯は近々大規模な作戦行動を起こす予定なのだ」

公爵の言葉を聞いて、カーバイン子爵は天と地がひっくり返ったように驚き、

「よろしいのですか、公。この者たちにそのような大事なことを喋ってしまつて」

と声高に叫んだ。すると balan 公は笑って、

「大丈夫だ。彼らなら信用できる。そうだろう、ロルス君」

ロルスはよく意味がわからなかったが、とりあえずうなずいておいた。

「そこでだ」

公爵は続けた。

「君たちに我が軍の手伝いをしてほしい。エイハンの軍隊として作戦に参加してほしいのだ」

「え？」

ロルスはしばらく不思議そうに公爵の顔を見つめ、エミールとカラの方へ目をやった。二人ともきよとした顔だった。

更に balan 公の話は続いた。

「君は昨日言っただろう、デイルスの奴らに出て行ってほしいと。この作戦が成功すれば、デイルスの主力を壊滅させることができる。そうすればデイルスはこのホムスから出ていかざるを得なくなる。さきほどこちらにお見えになった国王陛下は今国土の二割しかお治めになっておられぬが、デイルスさえいなくなればホムス全土の真の王におなりになることが可能なのだ」

「俺たちにいくさをやれって言うのか」

ロルスは少し表情を曇らせ、言った。

「いくさというのは単なる殺し合いではない。相手の何人かに傷を負わせて戦闘能力を奪い、うまく包囲して降伏に持ち込むのがいくさの賢いやり方だ。君たちが昨日やったことと大して変わらないだろう。それに、君たちの活躍によって我が方が勝利すれば君たちは国の英雄として全国民から尊敬されることになる。場合によってはナイトに取り立てて領地を与えてもよい」

「英雄か」

ロルスの瞳はららんと輝きだした。

傍らで見ていたエミールは、まずい、と感じた。このままいくさになぞ参加させられてはたまったものではない。それ以前にロルスは「闇の狐」のお頭かしらでも何でもなし。彼に決定を下す権限はないのである。

カーラはどう感じているのだろう。彼女も balan 公たちの勘違いには気づいているはずだ。なぜ訂正しないのだろう エミールは



そう思つてカーラの方を見やった。彼女はどうつもりか、面白そうにロルスと公爵の顔を見比べていた。

「喜んで、と言いたいところだが」

ロルスは珍しく慎重に言葉を選びながら言つた。

「これは俺一人で決められることじゃない。みんなと相談したいので少し時間をくれないか」

「よかるう」

balan公は大きくうなずいた。

「ただし、作戦の都合上、回答の期限は二日に限らせてもらふ。決まったら、カーバイン子爵の方へ連絡してくれたまえ」

balan公の話が終わつたところで晚餐もお開きとなつた。

屋敷への帰り道、エミールはロルスに「いくさに参加するということは、もう女救世主探しを諦めたんだね」と皮肉を言つた。するとロルスは「いくさをやりながらも探すことはできる。むしろ、

いくさに加わればあちこちの土地を転戦することになるから、見つけやすいかも知れない」と応えた。困ったエミールはカーラに助けを求める視線を送った。ところが彼女はエミールに加勢するどころか嬉しそうに「いくさを勝利に導いて英雄になれば女救世主が向こうから現れるかも知れないしね」と言った。それを聞いたロルスは真面目な顔をして

「それは、カーラたちがいくさに参加してくれるって意味だな」

と尋ねた。カーラは微笑みながら

「みんなに聞いてみればいい」

と応え、彼女たちの前をぞろぞろ歩いている盗賊たちの方をあとで指し示した。

ロルスは彼女に言われたことを屋敷に帰り着き次第、実行に移した。

「 balan公は俺たちの力を高く評価してくれた」

屋敷の居間に集まった二十一人の盗賊の前に立つて、ロルスは言った。

「いくさに参加して勝てば領地をいただけるかもしれない。しかも俺にとっては長年の夢だった英雄になれるチャンスなんだ。ぜひみんなと一緒に戦いたい」

彼の演説が終わっても、盗賊たちはやにやしなうしばらく黙っていた。

「おまえを英雄にする、ためつてのは気に入らねえな」

突然、しゃくれ顎のユスフが口を開いた。

「俺たちは領地なんか要らねえ。俺たちは俺たち自身が英雄になるために戦いてえんだ」

その言葉に他の盗賊たちは拍手喝采した。

ユスフは続けた。

「俺たちは盗みがしたくて盗賊稼業をやっているわけじゃねえ。みんなでかいことがやりてえだけなんだ。ロルスが反対したとしても俺たちはいくさに加わるぜ」

「みんな……」

ロルスが盗賊たちの顔を見回すと、彼らは口々に賛同の意を表した。

エミールはその様子を見て頭を抱えた。これでいくさに参加させられることは間違いない。拒否しても、どうせロルスは、おまえの魔力がどうしても必要だ、とかなんとか言っただけで頼ってくるだろう。

それまで腕組みをして黙ってソファアに座っていたカーラがゆっくりと立ち上がり、盗賊たちに向かって言った。

「よし。決まり。当分の間、盗賊団『闇の狐』はお休みだ。今からしばらく、あたしはおまえたちのお頭でもなんでもない。『闇の狐』

小隊の隊長がおまえたちのお頭になる」

言葉の途中で彼女はロルスの方を向き直った。

「あたしはロルスが小隊長になるのが一番いいと思う」

「俺が？」

ロルスは不思議そうな表情をしたが、一同は、当然だ、という顔で賛成の言葉を口にした。

その勢いに押されて、ロルスは少し照れ臭そうにしながらも、

「よし、わかった」

と同意した。

「一応俺が小隊長ということにしておく。けど『隊長』とか『お頭』なんて呼ばないでくれよ。恥ずかしいから。今まで通り呼び捨てにしてくれ」

後ろ頭を掻きながらそのように言うロルス隊長を部下たちは面白がつて、「隊長、隊長」とよんで冷やかした。

しばらくして冷やかしが収まると、ロルスは少し真面目な口調で「いつ作戦が始まるのかわからないが、準備だけはしておかなければならない。『闇の狐』小隊としてはまず何をすべきだろうか、名参謀カーラ君」

と尋ねた。

「そうだね……。取りあえず、手下たち、いや隊員たちは兵士として能力を発揮できるよう、盗人の神リチエのご加護を捨ててそれぞれの得意武器に見合った神様にご加護をお願いするべきだね」

カーラはそう答えてから、祈りのしぐさをして槍士の神、ヴュイネの加護を求めた。

他の者たちもそれに習って、剣が得意な者はアギユイスに、槍が得意な者はヴュイネに、また斧が得意な者、弓が得意な者もそれぞれの神に加護を求めた。

「これでみんな、武器を扱う能力が高まった。金を持っていそうな奴、お宝がありそうな場所を嗅ぎつける能力は低下したけどね。あとは……いくさに耐えられるようなちゃんとした武器や防具をそろえないといけない。それに魔法使いがエミール一人では十分とは言えない。戦魔道士があと一人ぐらい欲しいし、補助魔法が使える時空魔道士、回復魔法が使える神聖魔道士も雇ったほうがいい」

カーラがそう言うところへ

「じゃあ、早速明日にでも武具店と傭兵斡旋所に行ってみよう」と応えた。

翌日、ロルスとカーラとユスフはまず、いくさに参加する旨を宮殿でカーバイン子爵に伝え、必要な武器と防具を武具店で注文した後、傭兵斡旋所を訪れた。

係員に希望を述べると、彼は「戦魔道士と時空魔道士については希望に沿うことができるが、神聖魔道士は品薄なので期待しないでほしい」と言った。

屋敷へ帰ってみると、門の前に数人の町人がたむろして中を覗きながら何か囁き合っていた。ロルスが声をかけた途端、彼らは急に愛想良くなり、「公爵様の命を救った英雄というのはおまえたちのことか」と尋ねてきた。ロルスがうなずいたので彼らは大喜びし、口々に称賛の言葉を述べて帰った。

翌日にはまた別の町衆たちが屋敷の門前にやって来てロルスたちの武勇をたたえる噂話に花を咲かせていた。ロルスがそれを見て「俺たちも有名になったもんだなあ」と言ったのに、エミールは「一日や二日でこれほど噂が広がるなんて信じられない」と応え、少し不審そうな顔をした。

その日の午後、ロルスたちが屋敷の庭で武術の訓練に勤しんでいる際中、前日雇った傭兵たちが到着した。戦魔道士と時空魔道士がいかにもいくさ慣れしたような風貌だったため、ロルスはいささか気後れしたが、相手は「今、町で噂になっているおまえたちと一緒に戦うことができて嬉しい」と笑顔を見せた。

と言った。

ユスフはそのとき、彼らの傍らにばーつとつつ立っている十六、七才のか細い少女に目を止めた。

「なんだ、おまえは」

ユスフがしゃくれ顔で睨みつけると、少女は焦点の定まらない目で

「あのお、わたしい、きのおお、こちらにい、雇ってえ、いただいたあ、神聖魔道士のお、アマリアなんですけれどお」

と答えた。

「おまえが？」

ユスフは不思議そうに聞き返した。

「はい。わたしい、いままでえ、修道院にい、いたんですけどお、退屈なのでえ、もつとお、人の役に立つことをお、したくなつてえ、神聖魔法があ、使えるのでえ……」

支離滅裂なアマリアの言葉をユスフは苛立たしげに遮った。

「わかったわかった。もう喋るな。とにかく、おまえたち魔道士の世話はあのエミールって奴がすることになってるから、続きはそいつに話してくれ」

「はい……」

そう言いながら、なおアマリアはユスフの顔を眺めている。

「何だ、まだ何か用か」

「あなたってえ、面白い顔をしてますねえ」

少女がユスフの長い顎を白い細い指で差すと、そのしゃくれ顔は怒りで真っ赤になった。

「大きなお世話だ。俺だって好きでこんな顔をしてるわけじゃない」

怒鳴られているのに、アマリアは動じるどころか、口を手をあててさも楽しそうにくすぐすと笑った。

怒りの収まらないユスフはカーラのもとに駆け寄り、アマリアの解雇を要求した。しかしカーラは

「神聖魔道士になれるのは女だけだ。女でいくさ場に行きたがる奴はあまりいないから人手不足なんだよ。我慢してくれ」

と言って、取り合おうとはしなかった。



それから数日間、「闇の狐」小隊は訓練を続けた。隊員たちはこれまで盗人の神の加護を受けていても武器の扱いがうまかった。その上専門の神の加護を受けた今、その強さは確かに普通の一個小隊よりも勝っていると言えた。

特にロルスの剣技の上達は目覚ましいものがあつた。以前彼を打ち負かした剣士は今や全く齒が立たず、「ロルスの腕前は剣士のレベルを越えている。騎士の神様のご加護を受けられるかも知れない」と進言するほどだった。

その翌日、宮殿から使いが来てエミールに魔道学の講義を国王にして差し上げるよう求めた。ロルスは「俺は占い師のもとを訪れるつもりなので、途中まで一緒に行こう」とエミールを誘った。

二人は下町に足を向け、占い師の家の扉を叩いた。ロルスは老婆に「俺はもう騎士の神様の加護を受けることができるか見てほしい」と言った。彼女が呪文を唱えると水晶玉にはっきりと騎士の神、シユバリエの姿が映し出された。

ロルスは早速シユバリエに加護を求め、騎士になった。下町から宮殿へ続く道を歩きながらエミールはしきりに驚いていた。

「普通剣士から騎士へ昇格するには五年ぐらいかかるのに。ロルスはどうしてたった十日あまりで昇格できたんだろう」

エミールの言葉にロルスは、英雄だからだ、と答えて自慢げに胸を張った。エミールは当然そんな言葉は無視したが、彼の頭の中に、ひよっとするとロルスは特別なのかも知れない、という思いが浮かんだのは確かだった。

ロルスと別れたエミールは宮殿に向かい、近習の案内をうけて国王の勉強室に通された。部屋にはすでに少年王の姿があった。

「やあ、よく来てくれた。さあ、ここへ座ってくれ」

国王は友達のようにエミールを迎えた。

「予は、じゃなかった、僕は庶民の言葉がうまく喋れぬゆえ、聞き苦しいかと思う。が、努力はしているつもりだ」

「いつもどおり喋ってください」

エミールは丁寧な口調で要求した。

「君こそそのような喋り方ではなく、いつも友達と話すときのように喋ってくれ」

王は逆に要求し返した。

エミールは魔道学の講義を少しした後、何か質問はないか尋ねた。王は魔道学のことではなく、エミール個人のことはかり質問してきた。エミールが「僕は本当は盗賊などではなく、気ままな旅人なのだ」と打ち明けると、王はたいそう羨ましがって「予……僕は全然自由がない。僕ほど不幸な者はいない」とこぼした。それに対し、エミールは「こんな立派な宮殿に住んで、いつも豪勢なものが食べられる王様がどうして不幸なの」と尋ねた。

「僕は一応国王ということになっているが、それは balan 公の後ろ盾があつてのことだ。公爵は先王の従弟という僕の血筋を利用しているに過ぎない。彼は僕を王に据えて裏で操ってこのホムス王国を

牛耳りただけなのだ」

王は悲しげな表情で答えた。

それを聞いて、エミールは嫌な気分になった。 balan公はあまり良い人間ではないらしい。信用してよいのだろうか。

「それに、彼はそちたち……、いや、君たちをも利用している。カ―バイン子爵と話すところを立ち聞きしてしまった。 balan公は『闇の狐』の評判を利用して民衆の士気を鼓舞しようとしているのだ。そのため、『公爵の命を救った英雄』の噂を配下の者に広めさせたりもしているらしい。僕と同様、君たちも用が済んだらいつ捨てられるかわからない」

王にそう言われて、エミールは、なるほど、と思った。 たった二、三日のうちに「闇の狐」が有名になったわけがこれでわかった。

その後も話は魔道学の方へは戻らず、二人は延々無駄話を続けた。 家族のこと、好きな食べ物、最近読んだ本、女性の好み、等々。話すうち、エミールは王を本当の友達のように感じ始めた。王はそれどころか「もしエミールが女なら妃にしたいくらいだ」とまですべてくれた。

あつという間に二時間が過ぎた。王は別れを惜しみつつ、エミールを勉強室から送り出した。エミールは「また機会があれば、王と親しく語りたい」と言い残して宮殿をあとにした。

その夜、エミールは王から聞いた balan公の話を ロルスとカーラに話した。 ロルスは少し驚きはしたものの、「まあ、英雄扱いしてくれたことは確かだし」と呑気なことを言い、カーラは「利用され

ていることはわかっていた。でなければたかが盗賊を重要な作戦に参加させたりするはずがない」と言った。それでも二人はいくさに参加するのをやめるとは言わなかった。一度参加すると言った以上、責任を果たす義務がある、というのが二人の一致した意見だった。

そしてその翌日、遂に作戦会議が宮殿において召集された。「闇の狐」小隊からは隊長ロルス、副隊長兼武術戦指揮官カーラ、魔術戦指揮官エミールが出席した。居並ぶ諸隊の首脳を前にカーバイン子爵が説明した作戦はまさに驚くべき内容のものだった。

作戦会議において、ロルスたち「闇の狐」は翌朝、日の出と共にエイハンを発つよう下令された。

会議を終え、宮殿から屋敷に戻ったロルスたちが部下にそのことを告げると、彼らは歓声を上げ、すぐさま出陣の支度に取りかかった。

その夜、隊員たちはみな、明日に備えて早めに床に就いた。しかし隊長ロルスは、作戦の最終確認がしたい、という副隊長カーラの呼び出しに応じて彼女の部屋を訪れていた。

ロルスは扉をノックした。

「どうぞ」

カーラの声が聞こえてきた。扉を開き、ランプが一つだけ灯る薄暗い室内に足を踏み入れたロルスに、彼女はうっすらと微笑みかけた。

「ここに掛けて」

カーラが指し示した長椅子にロルスは腰を下ろした。彼女は丸い小さなテーブルを挟んで彼の向かい側に椅子を置き、腰掛けた。

「で、まだ何か作戦のことで確認しなければならない点があるのか」

ロルスは不思議そうな顔で尋ねた。

「うん……。あたしたち、カーバイン子爵の指揮下に入って、あの前人未踏のエドロス山脈を越えて敵の背後に回り込むわけだろ」

カーラはロルスの目をじっと見つめながら言った。

「ああ。俺たちが敵の後方にある魔道都市ユフを陥とせば、敵を南北から挟み打ちにすることができる」

「エドロス山脈を越えるのは大変だろうね。地形が険しいのもあるけど、それよりもモンスターが厄介だね。山の奥深くには今まで誰も見たことがないようなすごいのがうようよしてるって話だよ」

「なんでも一万年も生き続けて人間のように知恵をつけたモンスターが棲んでいるという噂があるとか、エミールが言ってた」

「体力回復アイテムは十分用意したかな」

「ああ、大丈夫だ。抜かりはない」

「そう」

「」

「」

「……話つてのはそれだけか」

「いや、その……、そうだ、雇った傭兵たちはみんなとうまくやってるの」

「戦魔道士のグアスと時空魔道士のエブンは傭兵歴が長いからうまくやるすべを心得ているようだ。問題はアマリアとかいう神聖魔道士だな。こっちが言いたいことを彼女に理解させるのに普通の奴の三倍の時間がかかる」

「そんなにひどいの」

「ああ。それだけならばまだいいが、たまに『人殺しは神の意志に反しますう』とか言って『神の教え』を布教しやがる。どうしてそんな奴が傭兵になったんだ？不思議でならん」

「ははは、困った娘だね」

「もつとも、顔は結構かわいいんだがな。スタイルだってちょっと細いけど悪くはないし。それに、あの長い黒髪。つやつやしてて本当にきれいなんだよ」

この言葉に、カーラは急に表情を曇らせ、

「ロルスは……髪の高い娘の方がいいんだ」

と呟くように言った。

「そりゃな。髪は女の命、だから」

ロルスはうなずきながら言った。

「あたしも伸ばそうかな」

カーラは短く刈り込んだ自分の黒髪を撫でながら言った。

「カーラは短い方が似合ってるよ」

ロルスは微笑みながら応えた。

「そう？」

カーラは照れ臭そうに話を続けた。

「ねえ、ロルスの女性のタイプってやっぱり伝説の女救世主みたいな娘なの？」

「女救世主はあくまで俺が守護する相手だ。そんな浮わついた感情を抱くことはない」

「じゃあ、どんな娘がいいの」

「うーん。しっかりした娘、かな。アマリアみたいなのは見た目がよくても好きにはなれない」

「しっかりした娘……か。例えば、例えばの話だよ、女だてらに荒くれた男たちを引き連れて盗賊なんかやってる娘は……しっかりしてるって言えるかな」

「え？」

ロルスは驚いてカーラの瞳を覗き込んだ。

するとカーラはゆっくりと立ち上がってロルスの座っている長椅



子の方へ歩み寄り、彼の右隣に腰を下ろした。

「あたしが好きなタイプはね、あたしを引っ張って行ってくれる人なんだ」

彼女は遠くを見つめながら言った。

「ドークのことか」

ロルスはそう言っではぐらかした。

「ドークは確かにそういうタイプだったけどいくらなんでも身勝手すぎた。でも……あたしも懲りない女だね。また同じような男を好きになっちまったよ」

カーラの目は再びロルスの瞳を見据えた。

「今度の男は突然ふらつとやって来ていきなりどこかに行ってしまったかと思えば、英雄になりたいから一緒にいくさに出てくれ、なんて言いだすほどの身勝手野郎だ」

「カーラ……」

ロルスもカーラの瞳から視線を離すことができなくなった。

見つめ合ううち、カーラの頬は次第にピンク色に染まり、潤んだその瞳はランプの光をきらきらと反射し始めた。

しばらくして、張りつめていた糸がぷつんと切れて落ちたかのように、カーラの大きな体はロルスの方へ倒れた。

しかし、ロルスはそれを胸で受けることはせず、体を横に向けて右肩で受けた。

「ロルス……？」

彼女は怪訝そうな表情を彼に向けた。

ロルスは彼女の両肩を掴んで体を背もたれにもたれさせてから、すつくと立ち上がった。

「さ、作戦についての副隊長の意見は了解した。あ、明日は早いから俺、もう寝ることにする。お、おやすみっ」

そう言っ、隊長は顔を引きつらせながら微笑み、逃げるようにカーラの部屋から出て行った。

「バカ」

一人残されたカーラは長椅子の上で呟いた。

翌朝、「闇の狐」小隊の隊員たちはまだ真っ暗なうちに起き出し

て準備を整えた。軽い朝食の後、彼らは一旦庭に集合し、十日ほど「兵舎」として利用した屋敷に別れを告げてから、それぞれの得意武器を背中に担いで宮殿前広場へと向かった。

広場にはすでにカーバイン子爵が指揮を執る約千名の部隊が集結していた。ロルスたちの隊が一番端に整列し終わると、一段高いところに balan 公が立つて激励の言葉を述べた。

「我々本隊が敵主力部隊一万をレスティア峠で食い止める一週間の間に、諸君はエドロス山脈を越えてユフを攻略しなければならない。容易なことではないが、我が軍きつての精鋭たる諸君になら可能であろう。ホムス王国の未来は諸君の双肩にかかっている。死力を尽くしてでも作戦を成功に導いてほしい」

最後に「国王陛下万歳」を三唱させられた後、まず先鋒隊が、次に「闇の狐」小隊が広場をあとにした。カーバイン子爵とその旗本は後ろから二番目、それに後詰め部隊が続いた。

町の人々は軍勢に手を振って激励した。中でも「闇の狐」小隊は特に人々の注目を浴びた。「公爵を救った英雄たち」が軍勢に含まれているということはきつと重要な任務に向かうところに違いない、などと噂し合う声がロルスたちの耳にまで聞こえてきた。

当のロルスたちはいつもとあまり変わらないリラックスした面持ちでぶらぶらと街路を歩いていた。むしろ戦慣れしているはずの雇われ魔道士たちのほうに幾分緊張した様子が見て取れた。もっとも神聖魔道士のアマリアは相変わらず気の抜けたような表情だったし、同じ魔道士でもエミールは緊張というよりほとんど悲愴な顔つきだった。

実は、エミールは昨日作戦会議で作戦内容を聞かされるまではもつと暗い気分だった。いくらいくさとは言え、自分に人を傷つけることなどできるだろうか、という思いがずっと心の中にあつたからである。エドロス山脈を越える間は人間を相手にする必要がない、と知って、少しは気が晴れたが、それでも険しい地形や恐ろしいモンスターのことを想像すると、胸の中にずっしりとした鉛の塊がぶら下がっているような気分になるのだった。

軍勢は一路北を目指した。一日目の行軍はエイハンの北に広がる農業地帯を抜ける平坦な道のりだった。雪を頂いて前方に横たわるエドロス山脈は、その日はまだ一幅の風景画にすぎなかった。

二日目から道は上り坂となり、また遠くにあつた雪の頂きは頭上に見上げられる存在となつた。昼すぎにはいよいよ急な山道に入り、今自分たちが登っている山腹に視界を遮られて白い頂上はたまにしか見えなくなった。それでも後ろを振り返りさえすれば遥か遠くに畑や町を望むことができ、辛うじて人間世界とのつながりを感じる事ができた。

三日目、それまで山道のガイドを務めていた地元の猟師が軍勢と別れ、もと来た道を引き返して行つた。彼の仕事は終わったのだ。これからは誰一人として足を踏み入れたことのない未知の世界を進軍することになる。もはや周囲の草木も見慣れない種類のものばかりである。熊や鹿など人間の理解の及ぶ動物を目にすることもしばらくないであろう。

四日目、先鋒隊がいきなり巨大なヒドラ（三つ首竜）と遭遇、多数の死者を出しながら、「闇の狐」の援軍を得てようやくこれを撃退した。この際、エミールはヒドラが水性竜であることをいち早く見抜き、火炎の術によって決定的なダメージを与えた。また、ヒド

ラの尻尾による強烈な一撃に巻き込まれ、ほとんど死にかけていたユスフを回復魔法によって見事に蘇らせたのはアマリアだった。それも完全に戦闘に復帰できるほどにまで回復させたのである。その魔力の大きさに誰しも舌を巻いた。

「おまえ、すごい魔力だな」

一番驚いたのは当のユスフだった。

「はい。日頃からあ、『神の教え』をお、守っているう、おかげですう」

アマリアはそう言っただけ嬉しそうに微笑んだ。ユスフも今度ばかりは彼女に笑顔を返した。

五日目には更なる試練が軍勢を待ち受けていた。隊列の中央付近を三羽ものグリフォン（頭が鷲、胴体がライオンの飛行獣）に襲われ、カーバイン子爵の旗本を含むかなりの数の者が谷底へ転落したのである。グリフォンを仕留めた後、アマリアを始め各隊の神聖魔道士は転落した者たちの命を救うために危険を冒して谷底へ下りたが、ほとんどの被害者はすでに息絶えていた。一度失われた命はどんなに術者の魔力が高くても復活させることはできない。まだ息のある者も、魔法によって死は免れたものの、とても明日以降の行軍に耐えられる状態ではなかった。

神聖魔道士たちは持てる魔力を振り絞って怪我人の回復に努めた。とは言え、彼女たちが一日に使える魔力にも限界がある。それに数日來の強行軍のため彼女たち自身も体力を激しく消耗していた。兵士たちは携帯している体力回復アイテムを彼女たちに惜しみなく譲ったが、それでも魔力の使いすぎでダウンしてしまう魔道士が続出

した。アマリアも例外ではなかった。人一倍魔力が強いだけに、それを使い果たしたときのダメージもまた大きいのだった。

その夜、カーバイン子爵の野営テントで行われた会議の席上、ロルスは、明日以降進軍を続けられる者はわずか四百人足らずになってしまった、という事実を知らされた。

会議から戻ったロルスはアマリアが臥せっているテントを訪れた。彼女の傍らにはユスフが付き添っていた。ロルスがアマリアに声をかけると彼女は苦しそうな笑顔を作って、大丈夫ですう、一晚寝ればよくなりますう、と答えた。するとユスフは彼女の青白い顔をじっと見つめながら

「おまえはもう引き返せ。明日は尾根を越える日だ。今まで以上に道は険しい。おまえには無理だ」

と言った。ところがアマリアは首を横に振った。

「わたしはあ、これでもお、『闇の狐』のお、一員ですよ。皆さんがあ、命懸けでえ、頑張つてらっしゃるのにい、危ないのがあ、嫌だからと言つてえ、わたしだけえ、逃げ出すわけにはあ、まいりません」

アマリアの言葉に、ユスフは泣き出さんばかりの悲痛な表情で

「俺はおまえに死んでほしくないだけなんだ」

と応えたのだった。

翌、行軍六日目の朝、ロルスはエミールの叫び声に叩き起こされた。

「大変だ、ロルス。アマリアがない」

ロルスは飛び起きてアマリアのテントに向かった。テントの前にはカーラが一人ぼつんと立って、手にした紙切れを見つめていた。ロルスがやってきたのに気づくと彼女は黙って紙切れを差し出した。彼女のテントの入り口に挟まれていたものと言う。ロルスはそれを受け取ってそこに書かれた文字を読んだ。

「俺はこれ以上アマリアに無理をさせたくない。ここから先、山道はまだまだ険しいし、首尾よく山を越えたとしても、ユフでは激しい戦闘が待っている。彼女は本来神に使える身だ。人殺しの手助けをすべき人間ではない。だから俺は彼女をおぶって山を下りる。勝手言ってすまない。」

> p align="right"<ユスフ>/p<

読み終わったロルスは書き置きをエミールに渡し、カーラと顔を見合わせた。

「どうする、カーラ。回復魔法が使える奴が俺たちの隊にいらなくなってしまった。戦闘で傷を負ったら体力回復アイテムを使うか他の

隊の魔道士に頼むしかないってことだよな」

「体力回復アイテムはもう残りが少ない。それに、他の隊の魔道士は自分の隊の隊員を回復させるのを優先するから、それだけで魔力を使い果たしてしまってよその隊にまで手が回らないこともある」

「そうなのか。今までアマリアのお蔭でうちの隊は一人の死者も出さずに済んだが、もうそういうわけにはいかないかも知れないな」

そこへ、カーラの指示でユスフたちの追跡を試みていた者たちが帰ってきた。カーラが、どうだった、と尋ねると、彼らは一様に首を振り、「二人の影も形も見当たらない。恐らく夜中にここを立ち去ったのだろう」と報告した。

「仕方ない。これからは体力回復アイテムをできるだけ大事に使うよう気をつけないと」

カーラは腕組みをして溜息をついた。

朝食の後、軍勢は行軍を開始した。

二日前の戦闘でほとんど壊滅した先鋒隊に代わり、ロルスたち「闇の狐」小隊が先鋒を務めることになっていた。それにカーバイン子爵の旗本隊が続き、殿軍しんがりは生き残ったほかの部隊の寄せ集めだった。

野営地点を出発してすぐ、兵士たちは木や岩の陰にうつすらと雪が積もっているのを目にするようになった。上へ登って行くにつれ、雪の絨毯は陽の当たる場所にも広がりだした。



昼前には西の空に灰色の雲が現れた。高い山の上では、雨や雪を降らせるそのような低い雲は上空を覆う天幕ではなく、すっぽりと周囲を包み込むベールとなる。あれよあれよという間に彼らの視界は乳白色にかすみ、数歩先を行く者の姿を見極めるのさえ難しくなった。降り始めた雪はしばらく進むうちに彼らの頭や肩に積もり、高地の冷たい風がそれを凍らせた。

先頭に行くロルスは真つ白な視界の中に黒いもやのようなものを発見した。更に前進すると、それは洞窟の入り口だとわかった。彼は小隊の隊員の一人を使いとしてカーバイン子爵のもとに走らせて、雪雲が行き過ぎるまで洞窟で休んではどうか、と意見具申しておいて、その答が返ってくる前にさっさと洞窟に入ってしまった。

ロルスたちの隊につられて後続の隊も次々と洞窟内に足を踏み入れた。結局、ほとんどなし崩しに昼食のための休憩が取られることになった。

洞窟は高さも幅もかなりあり、また奥へもずっと続いているように見えた。「闇の狐」小隊が先に入って入り口付近に座り込んだため、後続く部隊は彼らの横を通り過ぎて奥の方へ進んで腰を下ろした。殿軍に至っては休憩場所を確保するのに松明たいまつを持って暗闇の中へ入り込まなければならなかった。

兵士たちは頭の雪を払い、焚火で服を乾かし、携帯食料をかじりながら雪のやむのを待ち続けた。しかし、雪はやむどころかますますひどくなってゆき、二時間が経過しても行軍再開のめどはたたなかった。

そのうち、暇を持て余した兵士たちがカードゲームに興じ始めた。彼らの上げる歓声は洞窟内に響き渡って、さながら町の酒場のよう

な騒々しさになっていった。

中でもロルスの声はひととき大きかった。今日の彼はつきまぐっていた。来てほしいカードが来てほしいときに来た。その度に彼は大声で喜びを表した。いつもカモにされている恨みを晴らす、エミールに借りた賭け金を倍にして返す、などと言って鼻息を荒げては更に賭け金を上乘せした。

これでは当分貸した金は金は返ってこないだろう　エミールはそう思いながら傍らでロルスの奮戦を見守っていた。ふと隣を見ると、カーラが洞窟の壁にもたれて座り、哀愁を帯びた眼差しでじつとロルスの浅黒い顔を見つめている。敏感なエミールには、それが特別な意味の込められた視線だとすぐにわかった。カーラもエミールに注目されていることに気がつき、少し照れ臭そうに洞窟の奥の方に目を逸らした。

そのとき、彼女は急に眉間にしわを寄せた。

「この生暖かい風はなんだ」

彼女にそう言われる前にエミールも洞窟の奥からやって来る生臭い空気を感じ取っていた。

「洞窟の奥に……何かいる」

と呟きながら、エミールはカーラと顔を見合わせた。カーラは彼にうなずき返してから、今日何度目かの大勝利に大袈裟なガッツポーズを取っているロルスの方を向き、声をかけようとした。

しかし、彼女が発した声は洞窟の奥から響いてきた叫び声にかき

消された。

「何だ」

ロルスはそう言って立ち上がり、カードを放り出して、そばに置いてあつた剣を取り上げた。そして洞窟の奥の暗闇に目を凝らし、耳を澄ました。

奥の方から兵士たちの叫び声に混じって地響きのような低いうめき声が聞こえてきた。次にどすんどすと重いものを繰り返し落とすような音が鳴り始める。やがて殿軍の焚いた火の光の中に大きな黒い影が浮かび上がった。

「何だ、あれは」

誰かが声を張り上げた。

それは巨大な人影だった。高さは普通の人間の二倍以上はあるだろう。いくらこの洞窟の天井が高いと言ってもそれだけ身長があつては完全に直立して歩くことは困難なようだ。「彼」は少し身をかめながらのっしのっしとこちらへ歩いて来る。すると、より多くの焚火に照らされて、ロルスたちの目にもその姿がはっきりと見えるようになった。

「キョクロープスだ」

エミールはそう言ってその巨人の顔を指差した。そこには目がない。つしかなかった。

「実物を見るのはもちろん初めてだけど、本の中でなら何度か見た

ことはある。でも、その本にはキュクロプスは南の島にしか棲んでいないと書かれていた。それに、挿絵には、一つしか目がないことを除けば人間とあまり変わらない姿かたちが描かれていたはずだ。なのに……」

今、目の前にいるキュクロプスはエミールの説明と違い、頭部の上半分がきのこのように大きく膨らんでおり、しかもその膨らんだ部分に脳のひだが浮き出ているというグロテスクな姿をしていた。

「誰だ、俺の思索の邪魔をするのは」

その上、このキュクロプスは人間のようにはっきりと言葉を喋った。

「俺は一万年の間、宇宙生成の秘密について考えてきた。あともう少しで答えが見つかりそうだったのに、おまえたちが騒ぎだしたせいでわからなくなってしまった」

キュクロプスは激怒の表情で足もとの兵士たちを睨みつけた。彼らは勇敢にも剣を抜き、巨人の足に切り掛かったが、巨人の丸太のような右腕の一振りによっていとも簡単になぎ払われ、洞窟の壁に叩き付けられた。

生き残った殿軍の兵士たちは恐怖の叫び声を上げ、撤退を始めた。入り口付近で戦況を見守っていて「闇の狐」の隊員たちを押し退け、かき分けて雪の振り荒ぶ洞窟の外へと飛び出して行った。

今やカーバイン子爵自らが剣を抜き彼の旗本と共に巨人と対峙していた。

「あのキュクロプスは知能が高そうだ。話し合えばわかってもらえるんじゃないかな」

エミールはロルスの方を見て言った。

「いや、だめだ。あいつのあの目は怒りで我を忘れている目だ。話を通じるとは思えない。逃げるにしても外は吹雪だ。地面に雪が積もっていて行動しにくい。ここはどうかしてあいつをやつつける方法を探すべきだ」

ロルス隊長の言葉に小隊の隊員は無言で賛成の意を表した。

その間に、カーバイン子爵の旗本たちは巧みに巨人の後ろに回り込んでいた。巨人はまたも右手を振り上げたが、弩兵が彼の後ろからその腕を射抜いた。

「さすがに子爵の旗本を務める精鋭騎士だ」

彼らの戦いぶりを見ながら、カーラは感心した様子で呟いた。

しかし、その言葉が終わるか終わらないうちに、巨人に更なる力を見せつけられることとなった。巨人は振りかかる矢や石つぶてをものともせず、一つしかない目を閉じ、ぶつぶつと何か呟いた。すると彼の周りに何本ものまばゆい光が降り注ぎ、稲妻となって旗本たちの体を刺し貫いた。光が消えたとき、さっきまで精鋭兵だった肉体は黒焦げの炭の塊になっていた。

「たかがモンスターに『雷鳴の術』が使えるだけの知能があるなんて信じられない」

エミールは甲高い声で驚きを表現した。

「くそつ。力が強い上に魔法まで使えるとは厄介な相手だ」

ロルスは唇を噛みしめた。

「普通の武器では歯が立そうにないね。ここは魔道士の出番だ」

カーラはそう言いながら槍を手にとった。

「エミール、グアス、エブン、あいつを仕留めるのはおまえたちの仕事だよ。何とか弱点を見つけて、そこを魔法で集中攻撃するんだ。あたしたちはあいつに呪文を唱える隙を与えないよう攻撃し続ける。さあ、ロルス」

ロルスはカーラの言葉にうなずいてから、隊員たちの方を向き直った。

「行けえ」

隊長の号令一下、「闇の狐」は巨人目掛けて突進して行った。

「弱点、なんて、わかるわけがない……」

エミールは半べそをかきながら、暴れ回るキュクロースとそれに立ち向かう仲間たちの姿を見つめた。

ふと、彼の目は大きく膨らんだ巨人の頭部をとらえた。あれは恐らく大きくなりすぎた脳が頭蓋骨からはみ出しているのだらう。

「そうか。あそこだ」

と言いながらもう一人の戦魔道士グアスの方を振り向くと、彼は、俺も同じことを考えていた、と言わんばかりにうなずいて見せた。二人の魔道士は同時に「火炎の術」の呪文を唱え始めた。

ところが、その間にキュクロースはそばにあった大きな岩を持ち上げ、それをカーバイン子爵目掛けて投げつけてしまった。岩が子爵とその周りにいた兵士を下敷きにした直後、やっとエミールたちの呪文が終わり、巨人の頭上に火柱が落ちた。頭蓋骨に覆われていないキュクロースの頭は半熟卵のようなものだった。火柱に貫かれて、ぐしゃっ、というらしい音をたてたかと思うと、辺り一面に赤紫色の血液と脳髓をばらまいた。頭部を失った巨人の体は仰向けに地面に倒れ落ちた。

「やった」

エミールは見事巨人を仕留めた喜びに浸る間も惜しんですぐさまロルスたちの方に駆け寄った。

しかし、そこには悲痛な表情を浮かべて立ち尽くす「闇の狐」の隊員の姿があった。彼らは、腹から胸の辺りを真っ赤に染めて横たわるカーラと、その傍らに膝まづいて心配そうに彼女の顔を覗き込むロルスを取り囲んでいたのだった。

「カーラ、しっかりしろ」

ロルスの言葉にカーラは何か応えようとしたが声にならず、苦しそうな吐息を漏らすだけだった。

それを見て、ロルスは顔を引きつらせ、握り締めたこぶしを地面に叩きつけた。

「あの化け物が投げた岩の破片がカーラを直撃したんだ」

隊員の誰かがエミールに説明した。

「体力回復アイテムはもうないの？」

エミールの問に、彼は首を振った。

エミールは突然、気が狂ったように洞窟内を走りだした。

「神聖魔道士はいませんか。余っている体力回復アイテムはありませんか」

彼の叫び声に応える者はいなかった。彼の耳に聞こえてきたのは死にかけて兵士のうめき声と、カーバイン子爵の亡骸の前で数人の旗本がすすり泣く声だけだった。

エミールは神聖魔道士の姿を求めて洞窟中を駆け回った。しかし、子爵の死体のそばで発見した神聖魔道士は血まみれになってすでに息絶えていた。奥の方で殿軍と行動を共にしていたはずの者は巨人の最初の一撃で壁に叩きつけられて死んでいた。三人目は巨人の死体の下敷きになって圧死していた。つまり、カーバインの率いていたこの軍勢にもはや回復魔法を使える者は一人もいないということの意味した。

このままではカーラは死んでしまう　エミールは頭を抱えた。いくら魔力が強くても男である以上、彼自身が神聖魔道士の神、ピ



ユールヴィエルジュの加護を求めることはできない。体力回復アイテムも使い果たした今、カーラに対してしてあげられることは奇跡を信じるぐらい エミールは落胆のあまりその場にがつくり膝をついてしまった。

そのとき、彼の目はキュクロプスの死体の腰に巻かれた獣の革に書物らしきものが一冊挟まっているのをとらえた。恐る恐る近寄って手にとってみると、それはどうやら魔道書らしいことがわかった。

「これは」

魔道書を開いて中を見たエミールは目を丸くした。その文章は魔道書の常として古代文字で書かれていたのだが、内容は現代魔道学では考えられないようなものだったのである。

「これは……古代魔法なのか？」

エミールはページをぱらぱらとめくっていった。背中に翼を生やす術、えら呼吸をできるようにする術、背を高くする術、脳を発達させる術、目がよくなる術……。

「間違いない。古代魔法だ」

彼は思わず叫び声を上げてしまった。

更に読み進めてゆくうち、彼はふと、ある術の書かれたページに目を止めた。

「この術を使えばカーラを救える」

エミールは独りごちた。

「僕は戦魔道士だから動物に対して効果を発揮する魔法ならかけられるはずだ。人体を変化させる古代魔法を使えるはずだ。でも、本当にうまくいくのだろうか……」

彼は一瞬躊躇したが、すぐさま気を取り直し、そのページに書かれた呪文を唱え始めた。

五分後、今まさに息を引き取ろうとしているカーラのもとにエミールが戻って来た。彼が回復魔法の呪文をたどしく唱えると、カーラの腹の傷口はあっというまに塞がった。

ロルスは戦魔道士だったはずのエミールが回復魔法を使ったことに驚き、不思議そうに彼の顔を見やった。彼は手にした魔道書を開いて、あるページをロルスに見せた。古代文字が読めないロルスに代わって彼自身がそのページのタイトルを読み上げた。

「『性転換の術』だよ」

エミールの口から出た声は変声期前のような、女のような声だった。

た。

その夜、キククロースの棲家だった洞窟の奥に生き残った兵士たちが集合した。全部でわずか百人余り、出発前の十分の一ほどに減った計算になる。昼間、キククロースとの対戦で多くの戦死者を出したのに加えて、その場から逃亡を計った者もほとんどが洞窟を飛び出した途端、降り積もった雪に足を取られ、谷底へ滑落したからである。

集まった兵は今後の行動について話し合った。カーバイン子爵の旗本だった騎士たちは、百人ばかりの兵ではエドロス山脈を越えたとしても魔道都市ユフの攻略など不可能、として、作戦の遂行を諦めてエイハンに帰還することを主張した。半数近くの兵がそれに賛成した。残りの者も特に異議を唱えなかった。

しかし、ロルスだけは別の考えを述べた。

「ここから南へ山を下ってエイハンに戻るのも、北へ進んでユフの方へ下りるのも、かかる手間は同じだろ。攻略する、しないは別として、俺たちはとにかくユフへ行ってみるつもりだ。『闇の狐』はどうせ盗人の集まりだ。盗人稼業はユフでもエイハンでもどこでもやれるからな。攻略なんかできなくても、ユフに駐留するデイルスの連中からお宝を頂戴できれば俺たちはそれで満足さ」

その後、兵士たちは解散し、広い洞窟の奥にめいめいばらばらに横になって体を休めた。「闇の狐」だけは二十五人が輪になって一つの焚火を囲んで座った。

ロルスは火のすぐそばに仰向けになっているカーラの傍らに腰を

下ろし、その顔を覗き込んだ。彼女は昼間かなり出血したため少しだるそうだったが、「大丈夫か」というロルスの問いに明るい笑顔で「全然平気」と答えるほどの元気はあった。

そこへ、他の隊の兵士に回復魔法をかけに行っていたエミールが戻って来た。ロルスはエミールの顔を見て眉をひそめた。

「エミール、おまえ、魔力の使いすぎで疲れたんだろう。顔色が青白いぞ。それにちょっとむくんでる。早く休めよ。神聖魔道士のおまえが倒れてしまったら回復させる方法はないんだから」

相棒の言葉にエミールは

「僕は全然疲れてないよ」

と甲高い声で応えた。

「顔色が白いのもむくんで見えるのもきつと性転換したせいだと思う。女は皮下脂肪が多い分、頬がふつくらしているのが普通だし、男でも陰部を切り取られたら色白になるって聞いたことがある。だから心配する必要はない」

エミールは少女さながらの笑顔で微笑んだ。

「そうなのか。ならいいが」

ロルスはそう言ってエミールから目を逸らした。エミールの少女らしい愛らしい青い瞳を見ているうちに、不覚にもどきまぎしてしまったからである。

少女エミールはそんなことはお構いなしにじつとロルスの顔を見つめ、「ところで、本当にユフを目指すつもりなの？」と尋ねた。ロルスはどきまぎしている自分自身を情けなく思いながら「ああ、もちろん」と答えた。

ロルスの説明によれば、盗賊活動でも何でもいいからユフで騒ぎを起こせば少しでもデイルスの戦力をそぐことができる、それでバラン公率いる反デイルス諸侯連合軍が勝てるかどうかかわらないが、負けるにしてもデイルスにひと泡吹かせてやりたいのだ、という。

エミールは、これ以上危ないことをやるのは嫌だ、というのが本心だったが、体力回復アイテムもなく神聖魔道士もいない「闇の狐」のみんなを命の危険にさらすわけにもいかないので、せめてユフまでは神聖魔道士として同行してあげよう、と考えていた。

ロルスはそこで、エミールが昼間、偶然発見した古代魔法のことに話題を移した。「古代魔法を使えば空を飛べるようになるんだろなら、みんなにその術をかけてここからユフまでひとつ飛びしょうじゃないか」というロルスの提案にエミールは首を振って「古代魔法の書の中に翼を生やす魔法が書いてあるのは事実だけど、翼を生やしたとしてもうまく操れるようになるにはかなり練習する必要があると思う」と応え、更に

「古代魔法のことが世に知れたらきつと悪用しようとする人が出てくるに違いない。僕はあと一度、自分を男に戻すのに古代魔法を使った後でこの魔道書を燃やしてしまう積もりだ」

と言った。それを聞いてロルスは少し残念がったが、「親からもらった体をむやみやたらに改造するのは確かに良いことではないよな」と言っただけで素直に納得してくれた。但し、「燃やしてしまう前に

俺が英雄になれる魔法をかけてくれ」と付け加えるのも忘れなかった。そんなロルスをエミールが「英雄になる魔法なんてあるわけないでしょ」とたしなめたとき、その口調も声色もまるで母親のようだった。

翌朝、洞窟の入り口の前で軍勢は南へ下山する旗本たちと北を目指す「闇の狐」の二つに別れた。ところが、驚いたことに旗本の側に立ったのはほんの十人ほどだった。残りの者は口々に、「闇の狐」について行くことにした、と言って山を登り始めたのである。

ロルスは今や百人近くの兵を率いることとなった。行軍七日目のその日は彼らの尾根越えを歓迎するかのような快晴の空だったため、雪や風に邪魔されることはなかった。足を滑らさないように地面の雪を踏み固めながらゆっくりと進んだ結果、昼過ぎには無事、全員が尾根にたどり着いた。

尾根から見下ろす絶景を十分堪能する暇もなく、彼らはすぐさま北の斜面を下り始めた。南側と比べて日が当たりにくいだけあって空気はかなり冷え冷えとしていたが、幸いこちら側の方が斜面の傾斜が緩やかだった。滑落の危険が減ったということで歩行のペースも上がり、前日、進軍を半分で中断した遅れをかなり取り戻すことができた。その日の夕方、野営テントを張るころには雪の積もって

いない地点にまで下って来ていた。

その翌日以降も行軍は順調そのものだった。たまに小型のモンスターへの襲撃を受けても、ロルスやすでに怪我が完治したカーラの適切な指揮によって難なく撃退でき、またその際負傷する者があっても、エミールの強力な回復魔法が傷を癒した。

エイハンを出発して十日後、ロルスたちは一人の死者も出すことなく、ユフの南方に広がる森林地帯に到着した。当初の計画ではここから一気にユフを攻め陥とすことになっていたのだが、たった百人では真正面から立ち向かうわけにもいけないので、ロルスは一旦行軍を停止し、町に何人か斥候を出すことにした。

斥候が戻って来たのは深夜だった。彼らが町の情報通から聞いたところによると、デイルス側に組みしているユフの領主、ベヘーレ伯爵の軍隊のほとんど、ユフに駐留するデイルス軍のすべてはレスティア峠で反デイルス諸侯連合軍を迎え撃つべく出払っており、ユフ城に残っているのは三百名ほどの留守部隊だけだという。

また町の様子についても報告がなされた。斥候たちは異口同音に、何かがおかしい、と言った。どういうふうにおかしいのか、とロルスに尋ねられても、具体的には説明できないが、ユフ全体の雰囲気は何となく変なのだ、と答えるだけだった。

斥候の報告を踏まえて、ロルスはカーラとも相談の上、軍勢の全員で町に忍び込んでユフ城において盗賊活動を行うことに決定した。翌朝、日の出前に森の野営地を出発し、人里に出る直前でほぼ五人ずつ、二十のグループに別れた。それぞれのグループが別々の時間に、別々の方向から町へ入れば怪しまれることはないだろう、と考えたのである。



「エミールは俺と一緒に来い」

ロルスは組分けの際、そう言っただけで相棒を誘った。

「おまえは神聖魔道士だから身を守る魔法が使えないだろ。他の奴と一緒にいかすのは危険すぎる」

「どうして？ 追いはぎやモンスターに襲われたって、そんなのロルスでなくても誰でも追いつけるでしょ」

エミールは不思議そうな顔で言った。

「ばか。おまえの正体を知っているのは俺とカーラだけなんだぞ。おまえと一緒にいく奴がおまえを襲うかも知れないだろうが」

ロルスは少女エミールの可愛い顔を見て言った。

「そうか。僕は今、女だった。忘れてた」

エミールはぺろりと舌を出した後、微笑みをたたえて相棒の顔を見つめた。

「ロルスは僕のことを心配して言ってくれたんだ。珍しいね。いつも自己中心的なのに」

「俺だってたまには優しいときもあるぞ」

ロルスはそう言ってエミールから目を逸らした。またどきまぎしってしまったからである。

「ロルスに優しくしてもらえんなら、僕、このままずっと女でいようかな」

「気持ち悪いことを言うな。おまえが女だから優しくしたわけじゃない」

「ふふふ」

エミールはさっきまで、もうそろそろ男に戻ってロルスたちと別れるつもりだったのだが、今、ロルスに意外な優しさを見せられて、もう少し一緒にいてあげてもいいかな、という気になった。

ロルスとエミールは他に三人の隊員を伴って七時に森を出て西へ迂回し、九時ごろユフに入った。

ユフが魔道都市と呼ばれるのはここにホムス随一の魔道大学があるからである。エミールが書物などで知ったところによれば、ユフはお世辞にも賑やかな町とはいえないが、その代わり、学園都市らしい落ち着いた雰囲気漂っている、とのことだった。

ところが、ロルスたちが町に入って最初に受けた印象では落ち着いていると言うよりどんよりしていると云ったほうが適切だった。町の人々はみな一様に表情を強ばらせ、他人と目を合わせないようにうつ向きがちに街路を歩いて行く。本来明るいはずの子供たちさえ笑顔を見せるのが罪だとも言いたげに暗い眼差しをロルスたちに向けてくるのだった。

陰気な町だな、と呟きながら、ロルスは情報を得やすそうな場所を求めて辺りを見回した。まだ午前中なので酒場が開いているはず

はない。今どき人が集まりそうなところと言えば市場ぐらいだろうか。

そう考えたロルスはエミールとその他のメンバーと共に町の中央広場の方へ足を向けた。思った通り、広場のすぐそばに露店が並び、その間を多くの人々が行き交う光景が目についた。さすがにここだけは町のほかの場所ほど陰気ではなかったが、町の市場にしては品ぞろえが十分でないように感じられた。

市場に足を踏み入れてすぐ、彼らは一軒の露店に愛想の良さそうな小肥りの中年女性と十才くらいの活発そうな男の子を見つけた。女が奥から次々と野菜の束を引っ張りだし、男の子がそれを店先に並べている。とにかく声をかけてみよう、と考え、ロルスは彼らの方へ歩み寄って、話すきっかけを作るためにりんごを一個、手に取るうとした。

すると、彼が取るうとしたのと同じりんごを横から伸びてきた誰かの手が取り上げた。目を上げて見ると、そこには騎士装束を着た男が二人、立っていた。

「こいつをもらうぜ」

黒髪の騎士がそう言って手にしたりんごを口に運んだ。続いて赤毛の騎士が何も言わずにりんごを手に取り、かじりついた。

驚いたことに、彼らはそのままくると背を向け店の前から立ち去る気配を見せた。

「ニレート払っておくれよ」

男の子は不安げな表情で騎士たちの背中に声をかけた。彼らは足を止め、振り返り、意地悪そうな笑顔を男の子に向けた。

「いくさが終わったらいくらでも払ってやる。今は非常時だ。少しぐらい大目に見ろ」

黒髪の騎士の声を聞いて、店の奥にいた女がこちらを向いた。

「非常時なのはわかってるけど、それとあんたたちがただで品物を持って行っちゃまうのとどういいう関係があるんだい」

女は恐る恐るではあるがはつきりとした口調で言った。

「俺たちは新しい武器とか防具とかを買うだけの給料しかもらっていないんだ。それに、支給される食い物だけでは腹が一杯にならない。腹が減ってはいくさができないって言うだろうが。いくささえ終われば武器なんてたまにしか買わなくていいから金も払えるようになる。文句があるならいくさをやめようとしないうエイハンのバーン公にでも言ってくれ」

にやにやした顔で屁理屈をこねる騎士たちに、店の女はとうとう我慢しきれなくなった。

「嘘ばかり。あんたたちユフ城の連中はしょっちゅう賭場や女郎宿に出入りしてるじゃないか。ばくちや女につきこむ金はあるくせに、市場の品物を買ったり食堂や酒場で飲み食いしたときに払う金がないって言うのはおかしい話だね」

女がそう言うと、周りの露店の売り子や客たちは一斉に騎士たちを咎めるような目で睨んだ。店のすぐそばにいたロルスと、少し離

れたところから今のやりとりを見守っていたエミールも同様の視線を騎士たちに送りつけた。

「ちえつ。俺たちが命がけで守ってやってる恩も忘れて勝手なこと言いやがる」

黒髪の騎士はそうばやきながら、ポケットから銅貨を二枚取り出し、荒々しく男の子に投げつけた。すると運悪く、銅貨の一枚が男の子の片目を直撃した。

「ぎゃあっ」

男の子の悲鳴は辺り一帯に響き渡り、更に多くの人々の注目を集めさせた。

二人の騎士はほんの一瞬、男の子を憐れむような顔をしたが、すぐに背を向けた。二人が露店間の通路に足を踏み出した途端、周囲の人々は目を逸らした。しかしロルスとエミールだけは別だった。

「おい、待てよ」

ロルスはそう言って、すぐ前を通り過ぎようとした黒髪の騎士の腕を掴んだ。騎士は振り向き、怪訝そうな顔でロルスを睨んだ。

騎士とロルスが睨み合っている間に、エミールはその横を通り抜けて男の子の方に駆け寄った。

「あの子に謝れ」

ロルスが声を荒げると、騎士たちはまたにやにや顔に戻った。

「おまえはあの子の関係者か？ 違っだろうが、旅の剣士さんよ。わざわざ他人のいざこざに口を挟むとは何様のつもりだ、え？ 英雄気取りもいいかげんにしないと痛い目に遭うことになるぜ」

黒髪の騎士はロルスの手を振りほどき、自分の剣の柄を掴んだ。それを見て、ロルスはひるむどころか、逆に相手と同じようににたにたと微笑んだ。

「残念ながら、俺は『英雄気取り』じゃなくて、『英雄』そのものつもりだ。英雄である以上、困っている子供を助けるためにいざこざに口を挟むのは当然なんだ」

「はあ？」

相手の騎士は不思議なものを見るような目つきでロルスのにやにや顔を見つめた。

「おまえ、頭がおかしいのか？ じゃあ、なにか、おまえが英雄であつちの魔道士が女救世主だとも言つつもりか」

黒髪の騎士が指差した先には神聖魔道士エミールがしゃがんでいた。「彼女」は男の子の傍らで回復魔法の呪文を唱え、手のひらから出る白い光を男の子の目にあてているところだった。

「もう大丈夫だよ」

そう言ってエミールが手を離すと、男の子は目を開き、手をそつとあてがって痛みのないことを確認した後、満面に笑みをたたえた。

「ありがとう、おねえちゃん」

男の子におねえちゃんと呼ばれたことに、エミールは戸惑いの表情を見せたが、同じ店にいた女や周りにいた人々はみな安堵の表情を浮かべた。

女が男の子に「大丈夫かい、グナン」と尋ねると、男の子は「うん、大丈夫だよ、お母さん」と答えた。女は男の子に微笑みかけてから、その目を二人の騎士の方に移した。彼女だけでなく周りの人々もロルスも一斉に二人を非難の視線で攻撃した。

しかし、エミールの青い瞳だけは非難と言うより悲しみを帯びた視線を騎士たちに向けて放った。

「あなたたちは騎士でしょう。騎士なら弱い者をいたわらなければならぬはずです。なのに、あなたたちはいたわるどころか、過ちを犯したら謝罪するという当たり前のことさえしやうとしなかった。そんなことではいずれ民衆の信頼をうしなってしまうですよ。」

さあ、あの男の子に謝ってください」

エミールの声は、性転換して甲高くなったせいか、朗々とよく響き渡った。

その声の勢いと人々の視線に圧倒されて、二人の騎士は顔色を失った。

「あ、謝るぐらいいくらでもやってやる。し、しかしな、魔道士のお嬢さん、俺たちは民衆の信頼なんかとつくの昔に失ってるんだ」

と、黒髪の騎士が言う。

「そうさ。民衆にとってはデイルス側が勝とうと反デイルス諸侯が勝とうと同じなのさ。みんな早くいくさが終わってほしいだけなんだ。税金を増やされたり、食い物が兵糧に回されて品薄になったりするの全部俺たちがいくさをさっさと終わらせないせいだと思つてやがるんだ」

と、もう一人の赤毛の騎士が言う。

すると、周りの人々は「そのとおりじゃないか」とか「早く決着をつけたらどうなんだ」とか口々に文句を言った。

「俺たちだつて好きでいくさを長引かせているわけじゃない。でも、騎士である以上、主君の命には逆らえない。辛い立場なんだ」

と黒髪の騎士が反論する。

「そもそも、国王陛下の力が弱いからこんなことになるんだ。しっかりした人物が王位に就いてデイルスみたいな外国やバラン公みたいな有力諸侯の力を抑えればこのホムスは平和になるんだ」

と赤毛が付け加える。

「じゃあ、そのような人物を王にすればいいじゃないか」

あっけらかんとロルスが言った。

「そんな奴がどこにいる。それとも、『英雄』のおまえか『女救世主』のあの魔道士が王様になってくれるのか」



黒髪の騎士は馬鹿にしたような顔でロルスを睨み、笑い飛ばした。ロルスが何か言い返して話がややこしくならないうちに、エミールが口を挟んだ。

「僕……いや、私は救世主などではありません。普通のホムス人です。あなたたちもホムス人なら、デイルスに加担するような領主のためではなく、ぜひホムスの民衆のために戦う騎士になってください。その前に、あの男の子に謝ってください」

「わかったよ、『女救世主』さん」

黒髪の騎士はそう言っただけで肩をすくめ、男の子の方を向いて「悪かった」と謝った。男の子がおびえたような目で騎士を見つめると、騎士は苦笑いをしながらくると背を向け、同僚と共にその場をあとにした。

途端に、人々はエミールの周りに集まって幾重にも輪を作った。

「あんた、すごいねえ。女だてらに騎士を向こうに回して言い負かしちまうなんて」

男の子の母親が言った。エミールは謙遜しようとしたが、彼の言葉は周囲の人々の感心の声にかき消されてしまった。

「ねえ、おねえちゃん、何て言う名前なの」

男の子が尋ねた。

「僕、じゃなかった、私はエミール……」

そう言いかけてエミールは口ごもった。エミールという名は誰がどう聞いても男の名前なのである。

「エミール？男みたいな名前だね」

案の定、男の子は不思議そうな顔をした。

「い、いや、エミールって言ったんだよ」

苦し紛れに、エミールは自分の名前の女性形を名乗った。

「え？ミリア？」

男の子がひととき大きな声で聞き返したのを、周りの人々は断定したものと思い込んだ。

「ミリア」「そうか、ミリアさんか」「グナンの目の恩人の名はミリアか」「ユフ城の騎士と渡り合った『英雄』はミリアという名前なのか」「違うだろ。ミリアは『英雄』じゃなくて『女救世主』だろ」などという人々の声に押されて、エミールは名前を訂正するタイミングを失った。

「息子の怪我を直してくれたあんに、改めて礼を言わせてもらうよ、ミリアさん。これはお礼の印だ。受け取ってくれ」

男の子の母親はそう言って持ちきれないほどのりんごやオレンジをエミールの手に押しつけた。

彼女に負けじと、周りの人々も「泊まるならいい宿を紹介するぜ、

ミリア」「酒場なら俺の方が詳しいぜ」「ばか。神聖魔道士が酒を飲むわけないだろう」などと次々に声をかけてきたため、エミールはしばらくその場を動くことができなくなってしまった。

ロルスは少し離れた場所に立って、エミールが必死になって女らしく受け答えしようとするのを面白そうに見守っていた。

その日の夕方、ロルスとエミールはカーラや「闇の狐」の隊員たちと共にユフ城にほど近い廃虚に身を潜めていた。今夜半に決行されるユフ城侵入計画を昼間の偵察活動に基づいて最終的に練り上げるためである。

軍勢全体を三つに分け、それぞれに「闇の狐」の隊員を八人ずつ振り分ける。城に実際に侵入するのは主に「闇の狐」の隊員が行い、他のメンバーは後方支援と盗んだ品物の搬出を担当する。盗賊活動の経験豊富なカーラたちがてきぱきと計画の細部を詰めてゆく一方、ロルスとエミールはうなずくしかやることがなかった。

カーラはエミールに後方支援に残るよう指示したが、エミールは「どうしても城に入りたい」と主張した。カーラが不思議そうにその顔を見やって「えらく積極的だね」と言っと、エミールは「回復魔法が使えるのは僕だけだから、一緒に行ったほうがいでしょ」と

きっぱり応えた。

一通り計画を練り終わったところで、ロルスは午前中の市場での一件をカーラに話して聞かせた。するとカーラは「エミールが女救世主だつて？」と言って笑いだした。ロルスはおどけた口調で「カーラ、笑うとはミリアさまに対して無礼だぞ」とたしなめた。エミールは「もうその話はいいってば」と言いながら顔を赤らめた。

「でも、あの時のエミールは少しかつこよかったぜ。俺、おまえのことを見直したよ」

ロルスは最後に真面目な顔をしてそう付け加えた。

夜更け過ぎ、計画は実行に移された。

エミールはロルスと共に一番安全そうな東側の城壁を越えるグループに配属されていた。盗人の神の加護を捨てた今でも、「闇の狐」たちの手際の良さは変わっていないかった。城壁の上に鉤のついたロープを投げ、それをつたって全員が堀を越えるまでに十分とかならなかった。多少手間取ったと言えば、腕力のないエミールのために二本のロープをきつく張って橋のようにし、彼にその上を歩いて渡ってもらったときぐらいだった。

元盗賊たちは城壁を乗り越えるや否や、城の内部へと散っていった。エミールはその場で待機することになっていたのだが、たまたまその辺りに身を隠す場所がなかった。そこでロルスは自分自身が盗みに行くのを諦めてエミールの護衛をすることにした。

隊員たちはなかなか帰って来なかった。待ちくたびれたロルスとエミールは城壁の隅に座り込んで夜空を見上げながら幼いころの思い出話に興じ始めた。あまりにも話に熱中したため、そばにまで近寄っていた人影に全く気づかなかった。

「誰だ」

と声をかけられて、二人はやっと、自分たちがいかに不用心だったかを悟った。ロルスが慌てて右手を腰の剣にあて、左手で相手の松明の光を遮って見てみると、そこには今朝会ったばかりの黒髪の騎士の姿があった。

「何だ、おまえらか。こんなところで何をしている」

騎士はどういうわけか、警戒の素振りを見せようとしなかった。それにつられてロルスも警戒を解き、世間話でもするような口調で

「俺たち、実は盗賊なんだ」

と答えた。

「そうか。しかし、残念ながらここには金目のものは元々置いていないし、武具とか食料はみんなレスティア峠遠征軍が持って行ってしまった」

「ちえっ、空振りか」

「いずれにせよ、おまえたち、早くこの町を去れ。じきにここも戦場になる。情報では、エイハンから派遣されたカーバイン子爵率いる軍勢がエドロス山脈を越えてこのユフに攻めて来るらしい。中でも『闇の狐』とかいう部隊は盗賊あがりの凄腕を集めた最精鋭だそうだ」

騎士の話聞いて、ロルスとエミールは顔を見合わせ、にやにやと微笑んだ。騎士はそんな二人の様子を気にも留めずに話を続けた。

「でな、さっきうちの隊長とも話してたんだけど、俺たち、カーバイン子爵に投降することを考え始めたんだ。今朝、魔道士のお嬢さんも言ったとおり、どうせ民のためにならないいくさをするなら、外国の手先になるよりはバラン公の側についたほうがホムス人らしいじゃないかって思ってたな」

話がそこまで進んだところで、ロルスとエミールはにやにや顔を騎士の方に向けた。

「本当言うと、エイハンから攻めて来た部隊っていうのは俺たちのことなんだ。途中でカーバイン子爵は死んでしまったし、軍勢も十分の一になってしまったけど」

ロルスの言葉は騎士を驚かせるのに十分だった。

「おまえたち、さっき盗賊だって言ったよな。ってことはつまり、おまえたちが『闇の狐』なのか」

騎士の間に、ロルスとエミールは無言のうなずきで答えた。

「なるほど。どおりで度胸があるわけだ。おまえたちときたら今朝、俺たち騎士を相手に互角に渡り合ってたもんな」

騎士は腕組みをし、さも嬉しそうにロルスたちの顔を見つめた。

「よし。俺は今から、このユフ城の留守部隊三百人を投降させるよう隊長にかけあうことにする。ユフが反デイルス側のものとなれば補給路を断たれたデイルス軍主力はレスティア峠で孤立するだろう。そうなれば反デイルス側の勝ちは確実だ」

「そしていくさをはやく終わらせることができる。ユフの人々をこれ以上苦しめることもなくなる」

エミールが言い足した。

「その通りだ、魔道士さん。俺、あんたに感謝してるよ。今朝、あんたに言われて初めてわかった。俺たちは民衆のために戦うべきなんだってな。俺を目覚めさせてくれたあんたはやっぱり『女救世主』だよ」

騎士はそう言ってエミールの青い瞳を見つめた。

「で、おまえたちのお頭かしらは今どこにいる？うちの隊長のところに連れて行きたい。一緒に説得してほしんだ」

「ここにいますよ」

ロルスは自分を指差しながら答えた。騎士は一瞬目を丸くした後、

驚きを払いのけるかのように頭を振った。

「俺はもう何にも驚かないぞ。たとえ、精鋭部隊を率いるのがこんな若僧だと聞かされても」

騎士の言い方がロルスには気に入らなかった。

「俺は若僧じゃなくて『英雄』だ」

翌日、魔道都市ユフが反デイルス諸侯側の手に落ちたという知らせがレスティア峠のデイルス軍のもとに届いた。戦意を喪失した彼らは取るものも取りあえず、王都パンノス方面へと撤退を開始した。すかさず balan 公が追い打ちをかけ、かなりのダメージを与えたが、決定的とまではいかなかった。それでも、北ホムス諸侯の多くが次々と寝返ったため、形勢はわずか数日の間に一挙に反デイルス側有利に傾くこととなった。



ユフ城留守部隊が「闇の狐」に投降してから六日後の昼過ぎ、バラン公はユフに入城を果たした。

彼を出迎えたのはユフの領主、ベヘケーレ伯爵だった。彼はデイルス軍が敗走を始めるや否や、さっさと反デイルス側に寝返った諸候の一人である。

「今宵、公の勝利を祝う宴を催すつもりですが」

伯爵は公に申し出た。

「宴席には『女救世主』を招待しようと思っているのです」

「『女救世主』？」

バラン公は怪訝そうな顔で聞き返した。

「はい。今、町衆の間で噂になっている少女のことです。なんでも我がユフ城の兵たちに民衆のために戦えと説教したとかで、その話に感銘を受けた多くの者たちが彼女を慕ってその周りに集まり始めているらしいのです」

ベヘケーレ伯は骨張った顔に薄ら笑いを浮かべながら言った。

「なるほど。それは利用しない手はないな」

バラン公もにやりと笑い、伯爵と顔を見合わせた。

ロルスたち「闇の狐」はユフ城を陥とした後、しばらくはデイルス軍の来襲に備えて守りを固めていた。三日前、当面の危機は去ったということで、エドロス山脈から同行した兵と元々の留守部隊に城の守りをまかせ、自分たちは盗賊らしく町外れにテントを張って balan 公の到着を待つことにした。

以来、エミールのもとを毎日多くの人が訪れた。その中には町衆だけでなく城の兵も混じっていた。彼らはみな「女救世主」ミリアと共に戦いたい、と志願する者たちだった。

早く男に戻りたいエミールにとっては迷惑な話だったが、ロルスが「あと一步でデイルスのやつらをこのホムスから追い出すことができる。ミリアさまは皆さんの力を必要としている」などと人々を焚きつけてしまったため、引っ込みがなくなっただけである。

balan 公到着の知らせに続いて城での祝宴の招待状を受け取ったロルスは「これ以上『女救世主』のふりをするのは人々を欺くことになるから」と言っ嫌がるエミールを何とか説得し、その上で力ーラに「『女救世主』をみすばらしい魔道士マント姿で宴席に出させるわけにはいけないので、エミールを町の服屋に連れて行って適当な服を見繕ってやてくれ」と頼んだ。

二人が出かけている間、ロルスは一人テントに残り、ずっと剣を磨いたり革鎧のほつれを繕ったりといった雑務をかたづけていた。「今夜の宴席で balan 公は俺を『ユフを救った英雄』と呼んでくれるのだからか」などと考えているうちに知らず知らず顔がにやけてしまった。

二時間後、にやにやにしている彼の背後でいきなりテントの入り口の布がめくれ上がる音がした。ロルスは死ぬほどびっくりして慌てて後ろを振り返って見た。そこには華やかなドレスに身を包んだ淑女が立っていた。腰はくびれ、豊かなバストがドレスの胸もとから覗いている。白い肌と透き通るような青い目の持ち主だった。

「もしかして、エミールなのか？」

たっぷり三十秒も眺めた後、やっとロルスは口を開いた。

「僕はこんな格好は嫌だつて言ったんだよ。なのに、カーラが強引に着せようとするものだから、仕方なく……」

エミールは胸を両手で隠しながら言った。その少女らしいしぐさに、ロルスは久々に胸のときめきを感じてしまい、たまらずテントの天井に目を逸らした。

そのとき、テントの外から

「隊長殿、ミリアさまのいでたちはお気に召しましたか」

と言う声がし、続いてエミールの背後にまたもドレス姿の女性が姿を現した。今度の淑女は背が高く、髪が男のように短く刈り込ん

である。しかし、スタイルは抜群で、大人っぽい、落ち着いた感じのドレスがそのしなやかな体にとてもよくマッチしていた。

「今まで魔道士マントを羽織ってたからわからなかったけど、ミリアって結構胸が大きいんだね。思わず、胸もとの大きく開いたドレスを着せちゃったよ。そしたら、何となくあたしもおめかししたくなってるね」

淑女カーラはそう言ってあっさり化粧した顔を微笑ませた。ところろが、ロルスは惚けたように口を開いたまま、じーっとカーラを見つめていた。

「な、何だい、ロルス」

カーラが気持ち悪がると、ロルスはようやく我に帰り、顔を赤らめながら、

「い、いや、カーラのスカート姿を見るのは俺、初めてだから」

と呟いた。

「そ、そうだっけ」

カーラも顔を真っ赤にしながらそっぽを向いた。

「でも、あたしよりエミール、いや、ミリアのほうがかわいいだろ。色白だし、体つきも女らしいし」

「あのなあ。男相手に色白も女らしいもないだろうが」

ロルスは怒ったような口調で言った。

今やロルスの心はエミールるときとは違う、本当のときめきを感じていた。カーラに対する心の動揺を隠すために、今度はエミールの方へ目を逸らさなければならなかった。

「まあ、その格好なら、いかにも『女救世主』らしく見えるだろう」

ロルスは落ち着きのない視線をエミールに向け、言った。

「とにかく、デイルスの奴らを追い出して俺が英雄になるまでの辛抱だ、エミール。もうしばらく『ミリアさま』として俺たちと一緒に行動してくれ。おまえがいれば俺の配下に入りたがる奴がもっと増えるから」

「……………わかったよ」

エミールは恥ずかしそうにうつ向いたままうなずいた。彼の心の中はもっと早く男に戻るべきだった、という後悔の念で一杯だった。

「よし、そろそろ城の方へ出かけるか」

ロルスはそう言ってちらつとカーラの方に目を戻した。彼女は暖かい微笑みを返してくれた。

その夜、ユフ城で行われた祝宴は盛大だった。大広間には数十のテーブルが連ねられ、それを百近い数の椅子が取り囲んでいた。広間の一方には楽団が陣取り、その横のスペースに次々と登場した踊り子や声楽家たちはその特技で出席者たちの目や耳を楽しませた。

出席者の大半は反デイルス側の諸侯とその従者で、残りは大商人や大地主といった地元の実力者だった。いくさの際中ということで諸侯は夫人を同行していないため、女性が少なく、いささか華やかさに欠けるきらいはあった。

ロルスとカーラは「ミリア」の従者という名目で祝宴に出席していた。身分が高いわけではないので、エミールともども balan 公やベヘケール伯からずっと離れた末席に座らされていたのだが、出席者中、数少ない若い女性とあって、エミールのドレス姿はいやがうえにも人々の注目を誘った。近くの席にいた若い騎士が早速、「彼女」に声をかけ、ミリアという名を聞き出すと、たちまち、あれが噂の女救世主なのか、と囁く声が広間の隅々にまで広がった。

人々から注目されることにそろそろ慣れてきたエミールだったが、このときばかりは少なからず、辟易した。今までと違い、あからさまに好色そうな視線をドレスの胸元に向けてくる者が何人かいたからである。

「これはこれは、ミリア殿」

その中の一人、ベヘケール伯爵はそう言いながらエミールに近寄ってきた。祝宴の主宰者として上座 かみざ の方から一人一人挨拶してき

た彼がエミールたちの席にまで到達したのは宴の開始から一時間も経ったときだった。

「なるほど。美しいお方だ。噂になるだけのことはある」

伯爵のいやらしい作り笑いを見て吐き気を催しながらも、エミールは愛想良く

「お褒めいたたいて光荣です」

と応えた。

「いやいや、こちらこそ貴殿に感謝せねばならない。我が城の兵の不行状を叱咤してもらったことに対して」

伯爵の笑顔は幾分皮肉を帯びた。

「叱咤なんてものではありません。ただ騎士は私たち民衆のために戦ってほしいという希望を述べたまでです」

「さすがは『女救世主』、しっかりとした考えをお持ちのようだ。町衆たちに人気があるのは決して美しさだけが理由ではないということですね。……いや、これは失礼。私は別に貴殿が美しさを武器にして男たちをたぶらかしたとかそういうことを言ったつもりはないのですぞ」

伯爵の言葉はエミールの神経を逆撫でするのに十分だった。あまにも頭に血が昇ったので反論の台詞が思いつかなかった。

エミールのむっとした表情を見ても、伯爵の表情は変わらなかつ

た。

「さっき、 balan 公もぜひ貴殿と話がしたいとおおせであった。あとで公のお席の方へ挨拶に行かれるのがよろしいかと存ずる」

と言つて、作り笑いの表情のままエミールのもとを離れ、隣の来賓と話し始めた。

エミールは胸に込み上げる不快感を抑えることができず、撫然とした表情をロルスの方に向けて同情を求めた。しかし、ロルスは同情どころか嬉しそうな顔をして

「balan 公に挨拶しに行こうぜ」

とエミールを誘うだけだった。

何がそんなに嬉しいのだろう、といぶかりつつ、エミールは席を立ち、カーラと共にロルスのあとについて上座の方へ向かった。

「おお、ロルス君」

balan 公はロルスが近づいて来るのに気づき、大げさな身振りで驚きを表した。

「カーバイン子爵の死後、残った兵を率いてユフ城を攻略してくれた君の働きは勲章十個分にも相当するぞ。君はまさにユフの英雄、いやホムスの英雄だ」

「ありがたいお言葉で」



ロルスは後ろ頭を掻きながらでれでれと応えた。

なるほど、ロルスは balan 公に英雄と呼ばれることを期待していたのか エミールは納得すると同時に相棒の単細胞さに呆れた。

「いずれ君を呼び出して褒美を取らせるつもりではいたのだが」

balan 公は少し怪訝そうな顔で言った。

「ここは諸侯や地元の名士を集めた宴の席だ。君を招待した覚えはない。この場にいるというのはどういうことだ？」

「今日はミリアさまの従者としてここに来たんだ」

ロルスはエミールを手で指し示し、言った。

「なんと、噂の女救世主は君の部下だったのか」

balan 公は今度は本当に驚いたようだった。

「いいや、違うよ。ミリアさまは俺が主君と仰ぐお方だ」

「ほう。君は私を主君にしてくれるものとはかり思っていたが」

「俺はデイルスを打ち負かすための作戦に協力するとは言ったが、あんたの部下になるとは言っていない。あんたは言ってみれば共にデイルスと戦う戦友みたいなものだ」

「公爵に向かって『戦友』かね」

balan公は一瞬不機嫌そうな表情を見せた。

これ以上公爵の機嫌を損ねないように、エミールは笑顔をこしらえて口を挟んだ。

「公爵様、今日はお招きに預かり、大変嬉しく思っております。わたくし、ミリアと申します」

彼女に美しい笑顔を向けられると、さすがのbalan公も頬を緩ませた。

「噂は耳にしている。民衆のために戦え、と騎士を諭したそうだが、その言葉、全くをもって耳が痛い。デイルスを追い出すためのいくさに忙しくて民衆の声を聞く暇がない、などと言いつけるのは領主として誠に恥ずかしいことゆえ」

「わたくしはそんなたいしたことを言っただけではありません。それに、本来このような場所に招かれるような人間でもないのです」

エミールはきっぱりと応えた。

「しかし、多くの者が君を慕って集まって来ているというのは事実だろう」

「それは事実ですが、みな一緒にデイルスを追い出すために戦おうと言っているだけです」

「つまり、ロルス君の言葉を借りれば貴殿たちと我々は『戦友』というわけだ」

balan公の目は怪しく輝き始めた。

「ミリア殿、今やデイルス側に組みしているのはホムス北東部の諸候だけとはいえ、王都パンノスはなお敵の手中にある。できるだけ早い時期に王都奪回作戦を発動するつもりだが、そのおりにはもちろん我々と共に作戦に参加してもらえるね」

「ホムスのためとあらば」

エミールはそう応えたものの、心中穏やかではなかった。balan公はまた自分やロルスたちを利用しようとしているに違いないのだ。

「よろしくたのむ。ただ貴殿は女性ゆえ、男性のようにナイトに取り立てて領地を与えらるというわけにはいかぬ。作戦成功の場合、その恩賞は……大領主のご嫡男との縁組みなどはいかがかな」

balan公の言葉に、エミールは驚いて

「男との縁組みなんてとんでもない！」

と叫んだ。

「おや、君はおかしなことを言う娘だな。修道女でもない限り、女が男と結婚して家庭を築くのは当たり前のことじゃないか。それとも、君は男嫌いかね」

「い、いえ、そうじゃなくて……」

「では、私の縁談を受け入れてくれたまえ。君のような平民出の女性にとっては夢のような話だろう。君ならきっと、領民思いの立派

な領主夫人になれる」

「そ、その、わたくしは……何というか、普通の女性とは違つのです」

「自分は『女救世主』だから特別だ、とでも言いたいのかね」

balan公はいらだたしげにミリアを睨んだ。

「民衆に崇められる今の立場は心地よい、結婚して夫の従属物になるのは嫌だと言つのかね？さもなければ、領主の妻になって上流階級の仲間入をすることは民衆に対する裏切りだと言つつもりなのかね？

女は男に従属し、民衆は統治者に従属する。これがいにしえの昔より伝えられた世の秩序というものだ。それを壊すことは何人にもなんびと許されることではない。また、そのようなことは不可能だ」

balan公の語気に圧倒されて、エミールは声が出なくなってしまう。何とか balan公の誤解を解き、この場を穩便に済ませる言葉を探したが、うまく見つけられなかったのである。

しかし、ロルスは相変わらず物怖じということをしらなかった。

いつもと全く変わらないのんびりした調子で口を出した。

「でも公爵さんよ、俺は農民の息子だが、領主に従属しているつもりはないぜ。うちの家族はみんな自由に畑を耕して、自由に暮らしている。それに、うちのおふくろだつておやじに従属しているとは思えないけどな。どちらかと言うと、親父のほうがおふくろの尻に敷かれてるって感じた。第一、ここにかしらいるカーラは女だけど、ついこの間まで『闇の狐』のお頭かしらだつたんだ。従属してたのは男たちの

方だぜ。なあ、カーラ」

ロルスはそう言って、今まで傍らで黙りこくっていたカーラに目をやった。いきなり話をふられたので、カーラは戸惑った。

「あ？ああ……」

そう答えるのがやっとだった。

balan公はロルスの見当外れの反論に呆れ、話を続ける気力をなくしてしまった。

「まあ、ミリア殿の恩賞のことはおいおい考えとしよう。とにかく、数日中に王都奪回の作戦会議が開かれるだろうから、そのつもりで。このあと宴を存分に楽しんでいってくれ」

言い終わった途端、 balan公の関心は広間に新たに登場した一団の踊り子の方に移った。彼女たちは羽織っていたマントを一斉に脱ぎ捨てて乳首と陰部だけが布で隠されている姿を現わにし、体を奇妙にくねらせて踊り始めた。

balan公を始め広間にいるすべての男たちは彼女らに目が釘付けとなった。もちろんロルスも例外ではなかった。

「すげえ」

彼が踊り子たちの裸体を見つめる目はいやらしい目つきというより、好奇心旺盛な子供のような目だった。

そんなロルスの様子を見て、エミールは何となく微笑みたくなっ

た。カーラの方に目をやると、彼女もロルスを見つめながら微笑んでいた。

「闇の狐」はその後もユフや近隣の村から多数の志願者を受け入れた結果、千人を越える規模となり、その名も「闇の狐」兵团と改められた。

祝宴の五日後に開かれた作戦会議の席上、名目上の指揮官、ミリアはバラン公より「先に王都パンノス郊外北東部に進軍し、他の部隊が町を包囲し終わるまで待機せよ」との命を受けた。それを受けて、実質的な指揮官、ロルスは参謀カーラたちと進撃計画を練った上で翌朝に出陣を下令した。

敵はパンノス籠城を決め込んだらしく、「闇の狐」兵团の進撃に対してほとんど抵抗らしい抵抗を行わなかった。そのため、ロルスたちはユフを発ってわずか三日で目的地に到達することができた。

ロルスは王都郊外北東部に位置する小高い丘の上に陣を構えた。早速斥候を放ち、王都とその周囲の状況を調べさせたところ、やはり町の至る所に防累が築かれており、いまだデイルスに組する北ホルム諸候軍の兵が守りを固めていることがわかった。また、最重要地点二、三ヶ所は半ば要塞化されていて、そこにはデイルス軍が駐

留していることも確認できたという。

次の朝、ロルスのテントにカーラがやって来て「見張りの兵が陣内をうろつろしていた十人ほどの不審者を捕らえた」と報告した。ロルスがその見張りの兵を呼んで詳しく聞いたところ、不審者はどうやら付近の村の百姓で、しきりにミリアに会いたがっているとのことだった。

ロルスとカーラは不審者が拘束されている場所に行ってみた。すると、百姓風の身なりをした男女たち十人がどういうわけか同じ方向を向いて膝まづき、手を合わせて頭を垂<sup>しな</sup>れていた。彼らの向いている方向には真っ白なマントを羽織<sup>は</sup>ったミリアが立っていた。不審者の話を聞きつけて先に来ていたようだ。

「顔をお上げください。わたくしは聖職者でも何でもないのです。わたくしに向かって手を合わせても仕方ありませんよ」

ミリアは苦笑いしながら言った。

百姓たちは一斉に顔を上げ、訴えかけるような眼差しをミリアに向けた。

「お願いします。ミリアさま、いくさを止めてください」

百姓の一人が言った。

「私たち、ミリアさまの噂を聞いて頼みに行こうと決めたんです」

女の百姓が言った。

「いくさになれば俺たちの畑はきつと踏み荒らされるに違いねえ。そうでなくても税が重くて困っているのに、これ以上収穫が減ったら食うものがなくなっちゃう」

別の百姓がこぼした。

ミリアは彼らの言葉を聞いて胸を痛めた。

「お気持ちはわかります。しかし、今はデイルスを打ち破らなければなりません。税のことはいくさが終わったら、領主に相談してみると良いのではないですか」

ミリアがそう言うと、百姓たちはみな落胆の表情を浮かべ、口々に

「『女救世主』は民衆のために戦えと騎士を叱咤するような方だから、きつと我々の言うことを理解してくれると思ったのに」

などと嘆いた。

「いくさを避けたいと思うの気持ちはわたくしも同じです。でも、わたくし一人の力ではどうすることもできないのです」

ミリアは苦しい胸のうちを吐露した。

そのとき、ロルスのもとに見張りの兵士が駆けて来て、また不審者を捕らえた、と報告した。数人の兵に引っ立てられて来たのは騎士装束を着た五人の男だった。ところが、男たちはミリアの姿を目にした途端、強引に腰縄を振りほどいて彼女のそばへ歩み寄った。

「あなたがミリアさまですね。私たちは北ホムス諸候に仕える騎士



です。パンノスの陣地からこっそり抜け出して来ました」

騎士の一人が膝まづき、言った。

「今、パンノスはあなたの噂で持ち切りです。民衆や兵士は言うに及ばず、多くの騎士たちもあなたの行いに共感しています」

別の騎士が言った。

「私たちはあなたと剣を交えたくありません。ぜひパンノスへお越しください。あなたの姿を見れば、ホムス人の騎士や兵士は抵抗する氣力を失うはずです。あとは駐留しているデイルスさえやつければパンノスは解放されるのです」

もう一人の騎士が目を輝かせながら言った。

彼の言葉を聞いて百姓たちは歓声を上げた。

「ミリアさま、パンノスへ行きましょう。町の中からデイルスを追い出さなければ畑が荒れることはありません。そうなれば、私たちは救われるのです」

百姓の一人がそう言つて、再び拝み始めた。

あまりに突然のことだったので、ミリアは戸惑っていた。ロルスはカーラを連れてミリアのすぐそばまで近づき、声をかけた。

「何を戸惑っている。パンノスが簡単に奪回できるなら、この騎士たちの言うとおりにすればいいじゃないか」

「でも、どうして急に僕の噂がそんなに広がったんだろう。話がで  
きすぎているような気がする」

ミリアは首を傾げ、言った。

「たぶん、バラン公の差し金だ」

カーラが応えた。

「彼があたしたちを先にパンノスに來させた訳がこれでわかった。  
『女救世主』の噂をばらまいておけば、パンノス総攻撃を始める前  
にたくさんの敵兵があたしたちに投降すると思ったんだろう」

「なるほど。それで実際、そのとおりになったってことか」

ロルスはさも感心したようにうなずいた。

しかし、ミリアは一層表情を曇らせた。

「だけど、それでいいのかな。僕がこのままパンノスに出向いて降  
伏勧告を行ったら、兵たちは寝返るかも知れないけど、結局バラン  
公の術中にはまったってことになるよ。以前、国王陛下がおっしゃ  
った。バラン公は僕たちを利用するだけ利用して捨ててしまうだろ  
うって。僕は男に戻ればいいけど、ロルスやカーラたちはいくさが  
終わり次第難癖つけられて罪人にでも仕立て上げられて処刑されて  
しまうかも知れない。」

それに、バラン公がいくさに勝てば、きっと今までと同じように  
民衆をないがしろにする政が<sup>まっしぐら</sup>続くに違いない。せつかく尊い犠牲を  
払ってデイルスを追い出したのに、民衆にとっては何の利益もなか

つたつていうことになる。それでは今まで重税や食料不足に耐えてきた人々が余りにもかわいそうだよ」

ミリアは悲しげな口調で訴えたが、ロルスは全然明るい表情のままだった。

「なら、おまえが王になればいい。おまえが民衆を大切にする政をやって見せればいい。『ハーデイス英雄伝説』によると、女救世主は蛮族を追い出した後、民衆の支持を得て皇帝位につくことになる。おまえもそのとおりすればいいんだ」

ロルスの言葉にミリアは呆れ果て、遂に本音を暴露した。

「馬鹿なこと言わないでよ。そんなことできるわけないじゃない。ねえ、ロルス、十六にもなつて英雄伝説を信じてるなんて恥ずかしいと思わないの？ あれは単なるお伽話なんだよ。第一、なぜ伝説のとおりしなきゃいけないの？ なぜそのとりできると思うの？」

ミリアに甲高い声で非難されても、ロルスの浅黒い顔は子供っぽい微笑みをたたえたままだった。

「お伽話にすぎないってことは百も承知さ。でもな、エミール、やってみなきゃわからないだろ？ できるかどうか、なんて考えてる暇があつたらまずやってみることだ。そりゃあ、たまには失敗して恥をかくことなんかあるかもしれないけど、失敗を恐れていたらいつまで経つても前へは進めない。そうさ、要は少しずつでもいいから前へ進むことなんだ」

ロルスはきつぱりと言い放った。

ロルスがめずらしくまともなことを言ったので、ミリアとカーラは驚きのあまり二の句が告げなかった。

しばらくして二人は顔を見合わせて微笑み、それからその笑顔をロルスに向けた。

「パンノスへ行こう」

カーラが言った。

「やってみよう。パンノスの兵を、民を一人残らず味方につけるんだ。ホムスの民を、諸候をみんな味方につけるんだ。ひよっとしたら、本当に王に、あるいは皇帝にだってなれるかもしれない。そんな気がしてきた」

ミリアが言った。

「よし、決まりだ」

ロルスは応えた。

「カーラ、各中隊の隊長を集めてくれ。計画を変更して今すぐパンノスに向かうことになったと伝えなければならない。エミール、いや、ミリアさまも出発の準備を始めてくれ」

ロルスはそう言い残して、慌ただしく自分のテントへ戻って行った。

ミリアは捕らわれの騎士や百姓たちを解放するよう命じ、これから自分たちはパンノスに向かうつもりだと告げた。その途端、彼ら

侵入者だけでなく、周囲にいた兵士たちの間からも歓喜の叫び声が上がった。

野営地の丘を出発してしばらくすると、「女救世主」の噂を聞きつけた付近の住民が「闇の狐」兵団の隊列の周りに集まり、一緒に行軍するようになった。パンノスが近づくにつれてその数は次第に増し、町に入るころには総計数千人規模となっていた。

町の防累を守るホムス人兵士は抵抗するどころか、「ミリアさま万歳」と叫んで街路に飛び出し、行軍の列に加わった。王宮の方へ軍勢を進めるうちに隊列の人数は更に増し、半ば要塞化された駐屯地に籠るデイルス軍が恐れをなして全く手出しできないほどになった。

十年前までホムス全土を統治した王が住まいとしていた王宮もすでに衛兵たち自らが門扉を開け放ち、ミリアの入門を待ち構えていた。ミリアは衛兵たちに宮殿広場に面したバルコニーへ案内させた。彼女がロルスとカーラ、それに盗賊団「闇の狐」のメンバーだった者たちと共にバルコニーに姿を現すと、広場を埋めつくした群衆は一斉に「ミリアさま万歳」と叫びだした。その声はパンノスじゅうに響き渡り、いつまで経っても止む気配を見せなかった。

ロルスはふと顔を上げた。彼の目は、白いペガサスにまたがり、白い装束を身にまとった騎士が青空を駆けて行くのを捕らえた。周りの者が誰も騒がないところを見ると、どうやらロルスにしか見えていないらしい。あれは聖騎士の神、フェイダルーンにちがいない。自分を加護するために天上界からわざわざ降りてきたのだ。ロルスはなぜかそう思った。そこで彼は胸の前で手を合わせ、フェイダルーンに加護を求める祈りを捧げた。すると聖騎士神はロルスを見てうなずき、ペガサスを駆って青空の彼方に消えて行った。

balan公はエイハン城でパンノス陥落の報告を受け取った。自分の計略がうまくいったことに内心ほくそえみながら、ただちにエイハンを出発する準備を部下に命じた。

公爵はパンノスのすぐ近くまで来て初めて、自分の思惑が外れたことに気づいた。パンノスの民だけでなく、この前まで balan公に組んでいた諸侯さえ、今や救世主ミリアを主君と仰いでいたのである。

ミリアは圧倒的な支持を背景に、自分の臣下となるか、剣を取って刃向かうかの選択を迫る書状を balan公宛てに送った。郊外の野営地でそれを受け取った公爵は一読の後、今後ミリアを主君とすること、ミリアのためにいまだホムスに残るデイルス軍の掃討に全力

を上げること誓う書状をしたため、王宮に届けさせた。

## エピソード

パンノス陥落の後、ホムスの全土からデイルス勢力をすべて駆逐し終えるのに一ヶ月の時間を要した。その間、ミリアは人々の反対を押し切って、常に聖騎士ロルスと共に最前線に出て戦った。軍勢の先頭に立つ二人を見て、ホムス人だけでなくデイルス人の兵士までもが「彼らは『ハーデイスの英雄』と『女救世主』の再来にちがいない」と噂し合ったという。

それから二ヶ月後、パンノスの王宮は聖地アムンドから教皇の使者を迎える準備で大わらわだった。そんな中、聖騎士の装束をまとったロルスは右往左往する人々をかき分けるようにして、国王の私室へと向かっていた。

私室の扉を開くと、そこには公式行事用の重厚な衣装を身に付けた国王陛下と華やかな純白のドレスを着こなしたミリアがたたずんでいた。ロルスが「ミリアと二人で話したい」と要求すると、国王は残念そうな顔をしてミリアの手を取った。そしてその甲に口づけをした後、「またあとで」と言い残して部屋を去って行った。

「神聖帝冠を携えた教皇の使者はもうすぐこの王宮に到着するそう



だ」

ロルスはミリアのそばに歩み寄り、言った。

「そう」

ミリアはそう応え、うつすらと化粧した顔をロルスに向けた。

「戴冠式が終わればおまえは晴れて『神聖ホムス帝国』の皇帝になるわけだな」

ロルスの目はミリアの青い瞳を見据えた。

「そうね。私、この三ヶ月間に起きたことは夢だったんじゃないかって思うことがあるの。いまでも信じられないわ。私がここでこうやって戴冠式を待ち詫びているなんて」

ミリアはまさに淑女のような話し方だった。

「それはそうと、おまえ、よく男となんか結婚する気になったな。気持ち悪くないのか」

「仕方ないわよ、国王陛下の方から求婚してしてきたんだもの。それに、彼と結婚すれば私の地位が確固たるものになるのは確かですよ。今の私には民衆の支持以外、何の後ろ盾もないんだから」

「皇帝になった途端、政略結婚か。これだから嫌だねえ、上流階級は」

「単なる政略結婚じゃないわ。彼、本気で私を愛してくれてる。私

だつて彼のこと、いい人だなんて思ってるし」

「なら、いいけど。……それにしても、おまえ、えらく簡単に女言葉が喋れるようになったもんだ。もしかしてエミールには前からそういう気があつたんじゃないのか」

「とんでもない。僕は普通だよ。ちゃんと隣村に好きな女の子がいたんだから。見事にふられたけど」

「お、やつと男の喋り方に戻ったな。しかし、このふた月ほどおまえとはこうやって二人きりで話す機会がなかったから、何となくおまえのその喋り方が懐かしいよ。……ところで、エドロス山脈でおまえが見つけた『古代魔法』の書、あれはどうしたんだ。確か男に戻った後で焼き捨てるとか言ってたよな」

「ああ、それならもう焼き捨てたよ。僕は男に戻るつもりはないからあつても仕方ない」

「そうなのか。それは残念だ」

「ロルスも女になってみたかったの？」

「馬鹿野郎。俺が性転換なんてしたら気持ち悪いだけだ。ただ、あと一度くらいおまえが男に戻った姿を見ておきたかったんだよ」

「そうか。そうしても良かったかな」

「いずれにせよ、おまえはもうすぐ皇帝ミリアになってしまつんだ。俺が『エミール』と話すのはこれが最後ってわけだ」

「そんなことない。これからだって二人っきりで話すときはいつも僕は『エミール』に戻るから」

「ちがうんだ、エミール、そういう意味じゃない。実はな、俺、おまえの戴冠式を見届けたらパンノスを去るつもりなんだ」

「えっ？どうして？」

「俺には決まり事の多い上流階級の暮らしは向いてない」

「そんな。いずれ私の、いや僕の近衛兵団の団長になってもらおうと思ってたのに」

「それに、『ハーデイスの英雄』は女救世主が帝位に就いた後、どこへともなく去っていった、っていうだろ」

ロルスはミリアにウィンクして見せた。

「そうか。……そうだよな」

ミリアも笑顔を返した。

「でも、ロルス、これからどうするの。まさか『闇の狐』のお頭かしらとして盗賊団を率いるなんてことはないよね。そんなことをするなら、私は皇帝としてあなたたちを取り締まらなくてはならない」

「ははは。大丈夫だ。『闇の狐』兵団は、隊長は変わるけど、これからもミリアさまをお守りする」

「じゃあ、カーラが隊長になるんだね」

「いや、それが、その……」

ロルスは照れ臭そうに後ろ頭を掻きながら扉に向かって「入って来い」と声をかけた。すると、扉が開いてドレス姿のカーラが部屋に入ってきた。

「俺、カーラを故郷の村へ連れて行くことにした。これからは彼女と一緒に畑を耕して暮らすつもりなんだ」

「ってことはつまり……」

ミリアは目を丸くした。

「そうさ、エミール。結婚するのはおまえだけじゃないってことだ」

ロルスがそう言ってカーラの腕を取ると、彼女は顔を赤らめた。

「せっかく、フェイダールンのご加護を受けて聖騎士になったのに、百姓に戻るなんてもつたいない、ってあたしは反対したんだけど、ロルスときたら相変わらず自分勝手でさ」

とカーラは言った。

「でも、また小麦の神、ダウスのご加護を受けられるようになるには五年ぐらい経たないと」

とミリアは説明した。

「まあ、それまでは俺のうちの家事を手伝ったり、村人のためにあ

ぜ道や灌漑水路を修理してあげたりして過ぐすさ」

ロルスが言った。

「それより、問題は住む場所なんだ。なあ、エミール、もしよければおまえが住んでいた家を譲ってくれないか。あそこなら二人で暮らすにはちょうどいい大きさだから」

「うん、いいよ」

ミリアはうなずいた。

そのとき、扉の外で教皇の到着を知らせる声がした。

「お、来たな」

ロルスはそう呟いてから、ミリアの顔をもう一度見つめ、

「お別れだ、エミール、もう二度と会うことはないだろう」

と言った。

「さようなら、ロルス。さようなら、カーラ。お幸せに」

ミリアはぼろぼろ涙を流しながら言った。

「ミリアさまこそ」

カーラも涙声だった。

「とにかく頑張れ、エミール。民をないがしろにしない政がうまくいくことを遠くから祈っている。 balan 公やその他の腹黒い諸侯の横槍になんか負けちゃだめだぞ」

ロルスはそう言ってエミールの手を握り締めた後、くるりと背を向けた。

「ありがとう、ロルス」

ミリアは部屋を出て行こうとするロルスとカーラの背中に向かってそう呟いた。

その数時間後、王宮の祭壇の前でミリアの頭に神聖帝冠が載せられた。ミリアは居並ぶ諸侯の前で君主の神、アンプルールに祈りを捧げてこの加護を求め、神聖ホムス帝国初代皇帝となった。

（以下、エロイ・ガフタルク著 「ホームスの英雄と女救世主伝説」研究 より、あとがきを抜粋）

私が「ホームスの英雄と女救世主伝説」に最初に興味を抱いたのは、まだ十才の子供だった私が自宅の物置から曾祖母の手記を発見したときだった。

そのとき、私は両親や兄たちに、世紀の大発見だ、と言ってその手記を見せびらかしたのだが、誰も取り合ってはくれなかった。そこで私は考えた。その手記に書かれているのは曾祖母の空想などではなく真実だということを何とかして証明してやろう、と。ある意味で、それがこの研究の第一歩だったのかも知れない。

最後に、この研究を世に送り出すことを直接的に、あるいは間接的に助けてくれたみなさんにありがとうと言いたい。とりわけ、克明な手記を私に遺してくれた曾祖母カーラ・ガフタルクとその夫口ルス・ガフタルクには最高の謝辞を贈りたいと思う。彼らがいなければ文字どおりこの研究はありえなかったのだから。

神聖ホームス帝国の百回目の建国記念日に

エロイ・ガフタルク

(完)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3898p/>

---

ホームスの英雄と女救世主

2010年12月9日05時09分発行